

地名研究会報

第 97 号

平成 19 年 9 月 2 日

鹿児島地名研究会

I. 第 97 回例会 平成 19 年 6 月 3 日 (日) 於西郷南洲顕彰館研修室
(出会者) 青柳俊二・今村誠一・入来院貞子・上野堯史・川野雄一・永坂芳彦・
浜田良知・平田信芳・福元忠良・松浪由安 (計 10 名)

II. 大日本地名辞書読会 P. 572~P. 573
始羅郡・鹿屋郷・串伎 (串良) 郷

III. 川辺町の地名

[話題となった地名および事項] 始羅・吾平、指宿と鹿児島、始良、錦江

(川辺町の地名) 調査の方法と手順、川辺の特色、中福良という地名、信仰地名、
川辺仏壇、城郭に関わる小字、川辺町の地名の特色、堀・丸・塘・金糞
悪谷・論山・諸麦、雨里・雨包・土喰・案之元、総州家と奥州家、
小字の読み誤り

始羅・吾平

平田 大隅国の郡郷比定で最も難しいのが大隅郡です。大隅国風土記逸文に串トが大隅郡とあるために大隅郡の郷名比定が混乱させられてしまうのです。和名抄では串伎：串良は始羅郡。現在の吾平と見られる始羅郷が大隅郡所属だったので、あながち偽りでもなさそうです。大隅郡と始羅郡の境界がよく判らない。ここが最も難しい。

川辺町の地名の説明に時間がかかりそうなので、大日本地名辞書への質問は後回しにします。

松浪 いえ、結構です。

平田 いゝですか。

松浪 はい。

平田 何か質問があったら出して下さい。

松浪 始羅がありますが。

平田 現在の吾平でしょう。「あいら」は奈良・平安時代は此処だけです。「吾平」と書くのは確か、昭和になってからです。但し

吾平山陵の場合は「吾平」と書き、村と町の名前は「始良」と書いていたのです。詳細な漢和辞典を未だ見ていませんが、日常使っている漢和辞典を引くと「始」の呉音は判りませんが、漢音では「オウ (アウ)」です。始 (アイ) の読みの由来がよく判りません。案外、日本で作られた国字かも知れません。「良」は呉音 (ロウ) 漢音 (リョウ) です。これを「ラ」と読むのは日本で崩された良の行書体が「ら」になるので、それが一般化して呼び名に成長したのでしょうか。始良・串良・岸良など鹿児島県に多い地名語尾ですし、「ら」はあちら・こちら・そちら・どちらなどの語尾に用いられています。

呉音・漢音

平田 呉音は 5 世紀に倭の五王が南朝に使節を派遣しましたので、その時に伝わって来た南シナ系の発音だとみられます。漢音は遣唐使たちが持ち帰った北シナ系の発音とみてよいと思います。それ以後の唐音や宋音、明

・清時代の新しい中国語がありますが、日本では定着しませんでした。

漢和辞典には必ず日本語の意味が書いてあります。それが和語：国語すなわち古代日本語だと考えてよいものです。地名や名字は漢字で表記・表現されていますが、漢和辞典にない「音」が時たま出て来ます。系統不明の「音」です。古代日本語よりも古いものかも知れません。

身近な話、鹿児島県の「鹿」ですが、呉音・漢音はともに「ロク」、和語は「しか」。「か」の読みが手持ちの漢和辞典に出て来ないので、県立図書館で多くの漢和辞典に当たりました。最近編集された漢和辞典に「古語では（か）」とされていますが、ほとんどの辞書は「か」音の説明はありません。「児」は呉音（ニ）：小児科があります。漢音（ジ）の例は児童があります。和語は「こ」：児玉・小島、小さい子供の意味になります。

「鹿」、常識では「ロク」「しか」なのになぜ「か」と読むのか。古事記には天鹿児弓（あめのかごゆみ）や天鹿児矢の名が、和名抄には鹿屋（かのや）という地名が出て来ます。日本では相当古くから「か」と読んでいます。鹿児島を一字にした「麿」は、呉音（ゲ）・漢音（ゲイ）、和語は「鹿子：かご」。これらのことから鹿児島県の「鹿（か）」は日本で作られた「音」だと思ふのです。そうすると鹿屋は鹿を飼っていた痕跡地名で馬屋とか牛小屋と同じ意味になる。鹿児島とか鹿児島山などは鹿の子を表現した地名だと解釈出来ます。

地名表記を呉音・漢音を中心にして眺めると、判らないのは指宿（指宿）です。「指」は呉音・漢音ともに「ユウ（イブ）」、指は呉音も漢音も「シ」、和語が「ゆび」。宿は

呉音（スク）、漢音（シュク）、和語は（やど）。「スキ」という音は出て来ない。指宿（指宿）という漢字は系統不明の音の当て字になる。由来は古いけれども現段階では意味の判らない音を類似の漢字を用いて表現した地名と解釈せざるを得ません。

呉音だけで表現した地名は、前々回入来院さんが扱った求名（グミョウ）です。慈眼寺（ジゲンジ）、伊集院（イジュウイン）など仏教寺院に由来すると見られる地名は、呉音表記になります。知覧（チラン）は呉音・漢音ともに知（チ）・覧（ラン）ですから呉音型とも漢音型とも言えます。

漢音だけの地名例は川内（センダイ）と帖佐（チョウサ）。「センダイ」という表現は奥州仙台が具体例として残っていると思うのですが、仙台は遠くへ出掛けた官庁・役所ということで国府を表現したものが漢音地名として定着したものと見られます。帖佐の「チョウ」は国庁、「サ」は地名語尾。何という意味かよく判りませんが「あんた方どこさ、肥後さ、肥後どこさ、熊本さ」が、最も近い表現です。そのような分析をすると、帖佐も大隅国府が移動した所の可能性を示していることになります。

日本ではいろいろな考え方があって未だに地名学が成立していませんが、基本的に漢字の音訓で四つに分類すれば、地名の類型化が可能になり、誰でも漢和辞典をもとに考えて行くことが出来る。地名研究の方向が見えて来ると思ふのです。今週の金曜日にそういう話を史談会ですつもりです。

それから始良が出て来ましたが、「始」を「アイ」と読むのも特殊な例です。「良」を「ラ」と読むのは呉音にも漢音にもないので

す。「良（ラ）」と読むのも日本で出来た発音だと思います。その辺を踏まえながら、そのような表現がいつ頃成立するのかをしぼって行けるのではないかと思います。

従来、地名を表記する漢字は単なる当て字との解釈をして来たのですが、案外漢字の意味を知らながら地名表記を工夫して来たのだらうと考えます。そのような視点に立てば、日本語の歴史にも地名の由来にもつながって来らるらうと思ふます。そんなことを感じましたので紹介しておきます。

指宿と鹿児島

平田 肝属・肝付（きもつき）も由来がよく判りません。

入来院 訛るということもありますよね。訛っている言葉も……。

平田 言葉が訛っているという解釈は風土記の時代から訛ってこうなったとする説明をして来たのです。地名の由来を説明するのに故事付け手法を用いて来たのです。訛ったと故事付けると地名はどのようなものでも説明が付くのです。

入来院 「イブシュク」というのは「イブとシュク」で、それが「イブスキ」になったのではないかと解釈されています。

平田 常識的な解釈では「湯富宿（湯が豊富な宿）が指宿になったとするのです。しかも「スク」とか「シュク」は、古代朝鮮語の集落・村落を意味する「スキ」だとします。その場合、「イブ」はどういう意味なのかを古代朝鮮語でしなければならぬのにそれをしない。

似たような地名が種子島の南の方にあります。広田遺跡という有名な遺跡があります。その近くを流れる川に阿武鋤川（あぶすきがわ）

というのがあります。アブスキとイブスキは類似しているので語源的に追究する必要があるのでと思うのですが、今から古代朝鮮語を勉強するのは少々年令を取りすぎました。

入来院 古代朝鮮語との関連もあるでしょうけども。

平田 どの程度調べられているのか、よく判らない。

入来院 古代朝鮮語の読み、ありますよ。

平田 案外進んでいないのではないかと古代朝鮮語の研究というのは。

入来院 柿本人麻呂の歌を朝鮮語で読むと解釈が全然違うという説がありましたよね。

平田 はい。

入来院 そんなのは、どうやって解くのかな。そういう読み方も……。

上野 旧記雑録を見た限りでは「鹿児島」という表現は出て来ないような気がします。「麿」または「麿城」。鹿児島語とか鹿児島城という表現は多分出て来ない。

平田 鹿児島は明治になってから？

上野 鹿児島というのは明治になってから造られたのではないかと。それまで果たして鹿児島という表現を一般の人々は知っていたかどうか。「かごしま」という言い方があったのは事実だと思います。それはもう幕末になります。麿島がそのまま「かごしま」になったのか。「鹿児島（かごしま）」というのが最初出て来るのは、いつなのか。

始良

上野 始良郡とは、どういう意味なのか。現在の始良郡は新しく造られた郡名。

平田 和名抄の始羅郡は大まかにいうと、肝属川の右岸が肝属郡、左岸が始羅郡だったそして上流の方に、錦江湾岸に展開する大隅

川辺町の地名

松浪由安

調査の手順と方法

この会に永年在籍させて頂いておりながら何も勉強しないで、ただ皆様の苦勞して研究された話などをば専ら聞き役で、自分も勉強せにやいかんのだかと思ひながら仲々積極的に調査研究もしないまま現在に至っている次第です。県内のあっちこっちの小字調査や分類を手分けしてやって来たわけですが、自分でもどこかをやらなきゃということで、仕方なくと言えば語弊がありますが、自分で選んだ所が川辺町でした。後で気付きましたが、小字もとても多くて2,600からあるんです。仕事に取りかかることもしないで、分布調査が始まってから5~6年になるわけですが、そのまましておきました。3年ぐらい掛かってやっと本格的に取り組みました。100回で終りにするからとの平田先生の話があってそれじゃいかんなどということ、まとめて取り掛かりました。平田先生の所に直接伺って教を頂いたり他の方々からもご教示を頂くべきだったのですが、それもしないまま自分の考えでまとめて原稿にしたものを1週間程前に平田先生の所へ届けて、あちこちご指摘頂きました。訂正出来る範囲内をただけでプリント4枚にまとめてみました。反省の所に書きましたように、地名研究会で研究した資料だとも云えない、唯格好だけつけたようなものですがお許しを頂きたいと思ひます。いろいろ皆様のご指摘やご教示を頂けたらと思っております。それじゃ、失礼して坐らせて頂きます。

1ページの調査手順と方法から説明します

まず役場に参りまして、町教育委員会の新地さんという方をお願いをして小字の読み方を調べて頂いて一覧表を作ってもらいました。そして分類作業に取りかかりました。分類に長くかかりましたが、自分で分類してみて、それをば新地さんの所に持って行き一応目を通してもらいました。そのようにしたのですが、どっちに入れるべきかということ、分類に迷いました。二重に計上したものが小字の数で380ばかり、ダブっております。これらを合計しますと、2,600でなくて3,000近くになります。厳密には数えておりません。

こういう調査は直接現地に行つて足で稼がなきゃいけないのに、それも出来ませんでした。それで参考資料の所にあげたものを参考にして調査しました。

先ず「川辺町郷土誌」。それから「川辺町の城跡」。これは新地先生から貰いました。それから「角川日本地名大辞典」。それと昨年でしたが「川辺町風土記」というのが書店に出ておりましたので買い求めて参考にしました。

「川辺町郷土誌」は県立図書館から何回か借りてこれを主とし、角川地名大辞典を併せ用いました。町の全図も役場で貰ひまして、これも見ながら調べました。町自体の参考資料というのが少なく、調査可能な範囲内でまとめました。

県内には川辺町と似たような所があるかも知れませんが、川辺町だけを調べました。自分で調べた範囲内で気付いた川辺町の独自性・特色を7ページ(3)にまとめておきました。

郡があった。古い時代は大隅郡の範囲は広がったが、大隅隼人が大和朝廷に征服されて近畿地方に移住させられてから領域が細分化され、肝属郡・始羅郡・大隅郡の三つに分かれたと考えられます。

始羅郡は肝付氏に征服され、大隅半島から消滅するのです。さらに肝付氏が島津氏に征服された後、錦江湾の奥に始良郡の名が与えられることとなります。またこの始良郡は肝属の方にあったのとは違う表記になってしまいます。島津家の右筆がこういう文字を書きしてしまうのです。「始良郡」と。これは「シラ」としか読めないのですが、間違いにも構わず「アイラ」と読んだのでしょうか。そのようにして始良郡が出来てしまった。

現在の始良郡は加治木町・始良町・蒲生町だけです。今後、どういう名前になるのか。

上野 錦江市になると言ったら私は大反対なんです。既に「錦江町」が出来たので今更という感じです。今書かれた始羅の「始」、ちょっと上の方を伸ばせば「始」の字になりますよね(笑い)。間違いなんだけど、そのつもりだったのでしょね。

平田 「始良」が漢和辞典に出て来ないので意味が判らない。「始」は日本で出来た、いわゆる国字なんでしょうね。「あいら」は本来「間(あいだ)」の意味で大隅郡と肝属郡の間に存在した地域。それに付けられた郡名の可能性が大きい。

上野 現在の始良郡は大隅国では一番西側になります。すぐ隣は鹿児島郡吉田、今は鹿児島市になりましたが。

平田 現在の始良郡は平安時代はほとんどが桑原郡だったので。

上野 あゝ、元はですね。

平田 島津氏の支配が確立してから桑原郡を縮小して始羅郡の名が復活した。奈良時代大隅国が出来た時は嘯啖郡・大隅郡・始羅郡・肝属郡と、北から順に並んでいたとみられます。現在の始良郡は初めは嘯啖郡だったので。そして、その南の方に大隅郡があつて始羅郡、肝属郡と連なっていた。それが大隅国最初の四郡だったので。「あいら」というのは歴史的に右往左往して来たのです。

錦江

平田 先程出て来た錦江の話について。錦江湾と鹿児島湾とを比べた場合、他県の人は鹿児島湾という。鹿児島県の者は錦江湾という。何故かという、錦江湾を取り巻く所では皆名前がよいものだから小学校校歌に相当盛り込まれている。合併して錦江町になった大根占と田代の人たちから見ても、錦江という言葉が小学校校歌にあつて、子供の時から摺り込まれているから、さっさと錦江町を名乗ったわけです。

錦江という名前が出来たのは加治木島津家6代の久徹(ひきなる)が、日本山川河口で錦江云々の島津家久の歌を思い出したのが命名の由来とされます。それが加治木町の錦江(にしきえ)という小学校の名前になったのです。

上野 そうですね。いずれ錦江(きんこう)市錦江(にしきえ)小学校となるのです。それはおかしいと私はいうのです。錦江(きんこう)駅というのがありますが、あれは団地の中の小さな駅です。言葉の上から言えばそれが錦江市の主要駅にならざるを得ない。だから、おかしい。

平田 加治木町、始良町、蒲生町が合併するのは難問だな。

上野 いろいろ難しくなりますね。

川辺の特色

川辺町の特徴・特色について項目を立てて整理しました。そういうひとりよがりの調べ方に自然なついでにしまいました。それじゃ本論に入って参ります。

平氏が政治の実権を握っていた時代：平安末に村岡平氏が川辺を支配していました。鎌倉の北方に村岡という所があって、そこから起こったのだそうです。その一族が川辺に下向して来て川辺を名乗ったということです。川辺町の現在の状況からも理解出来ますが、最後に付けた地図でもお判りのように広瀬川がいくつもの支流を集めています。一番南側の大谷川も加世田市に入ってから広瀬川に合流します。そして最後は万之瀬川となって東シナ海に流れているようです。

2ページに書いておきましたが、水は湯田からと言われ、水は豊富で河川も多く、小字は水・谷・田が付くものが多いようです。このような小字名も大字が違えば他所の大字にもいくつか出て来ます。同じような小字名を合計すると、12%、300を超えるようです。

また井関・疎水・用水路も多くて、水神碑も沢山あるとのこと。しかし田の神は他所の町村に比べると比較的少ないそうです。10～15ぐらいでしたか。島津藩の開田政策によって田の神が造られたようです。川辺はそれ以前からの水田が多いので田の神が少ないのではないかとこのことのように。

中福良

中福良。これは県内に17箇所あるようですが、中福良という地名のある市町村は、平均して1～2箇所あるといわれます。鹿児島市は広いので3箇所あるそうです。川辺町には6箇所もあるようです。しかし小字一覧では

2箇所しか見当たりません。2万5千分1の川辺町全図には大字上山田・永田・宮・野崎・神殿の5箇所大きな活字で「中福良」というのが見えております。田代という小字も川辺町内には2箇所あるようです。

3ページの(3)に参ります。島津氏が三州統一をするまでの間、250～270年。川辺町郷土誌には270年と書いてあります。1130年から1380年頃までの間が、川辺氏の統治時代だということで計算すれば250年ぐらいになりますが、その辺はきちんと計算せずに250～270年ということになるのではと思います。

信仰地名

大字清水から平山、この辺りに仏教文化と関わりのある小字があります。また仏教文化だけではなく、神統・神事に関わる小字もあります。3ページの下の方に書いておきました。合祀されて今はなくなった神社が21。明治初年の廃仏毀釈で消えた寺院が18ということで宗教に関わる小字は比較的多いようです。分類表を見て頂ければ157、信仰地名があります。形状地名が1位、信仰地名は5位です。

3ページの真ん中あたりに飯盛塚、中塚、西塚、飯盛塚後塚、飯盛塚迫平などの「塚」地名も宗教地名との指摘を平田先生から受けましたが、これらも以前は神社と関係のある地名だったようです。平山城の南側一帯にこれらの地名がまとまってあるようです。その他に諏訪・諏訪尾・諏訪下・左別当・御所堀・天神坊・天神城・宮田・御所堀前平等が見られます。

隠れ念仏のガマ(洞穴)が現在でも15ぐらいあるようです。島津氏に禁じられた一向宗(浄土真宗)が根強かったことを示します。

川辺仏壇

仏教文化遺産としての川辺仏壇。これも有名ですが、伝統工芸品として国が指定することになった時に仏壇造りが百年以上、全国的に見ると二百年・三百年、もっと古くからのものがあっちこちにあるのに、川辺仏壇が国指定第1号だったのだそうです。衆議院議員の川崎寛治さん(故人)が、伝統工芸品の指定を受けるのに熱心に働きかけをされたようです。

明治になってから仏壇を造るのが増えて来て今のような伝統工芸として川辺仏壇が有名になって来ているようですが、町内に住んでいる人たちが業を尊ぶとか敬うとかかそう云った風土的なもの、雰囲気的なものがあることじゃないか、ということも考えられます。

城郭に関わる小字

4ページに参ります。小字の調査をしますからということで役場に参りました時、2万5千分1の町全図と「川辺町の城跡」というのを頂きました。教育委員会と史談会と合同で調査してまとめられたものです。それらによって4ページをまとめました。

表を見て頂ければ判りますが、阿多隼人時代の古城が四つあるようです。それ以外は中世の城のようです。南北朝時代から2回に亘って、15世紀初頭と16世紀前半に、川辺動乱といわれている動乱があったようです。二つとも島津氏の内紛で、総州家と奥州家の争い、どっちが本家か判りませんが、非常に激しい戦が行われたそうです。その時に造られたり補強されたりした城のようです。こう云った城郭に関わる小字が、表の下から2段目の所に関係字名としてあります。小字

一覧には全部入っております。

ただし、1ページの一覧表には城郭地名だけでなく集落も含んでいるので、合わせて100ぐらいになるようです。

川辺町の地名の特色

5ページに参ります。川辺町の地名の特色という表現にしました。平仮名で書いた史料を掲げておきました。川辺町郷土誌に出ていた史料です。嘉元4年(1306)の史料で幕府から薩南方面に派遣された千竈時家が、子供たちに宛てた議状です。必要な所だけを書き出してみました。「さつまのくに、かハなへのこほりのちとう(地頭)御代官ならひにくんし(郡司)職・・・」、濁点は昔の人は打っていないようです。最後の「みやしたのむら」以外は現在もそのままのようです。「みやした」は現在「両添(りょうぞえ)」という大字に名前が変わっているようです。「両」は村と村の境目の所で、両方に関わるから両添という名前になったんだということのようです。また何故、宮下なのかと云えば、此処に高良八幡宮があったから、その宮の下ということで当時こういう名前で呼ばれていたのだということです。

上山田・中山田・下山田は、ずーっと以前は山田郷だったそうですが、明治になってからは郷名の変更で勝目郷と名前を変えたとのこと。4ページの左側の4番目に勝目城というのがあります。山田城と云ってもいいのかも知れませんが、通称勝目城です。

5ページの②、小字地名に入ります。具体的な地名で特色を考えてみます。景観地名・自然地名それから位置地名・形状地名。この中で特色のあるものだけを拾い出しました。まず景観・自然地名の例ですが、5ページの

下に掲げた通りです。

上から3番目の「平(ひら)」。その中に「飛良」があります。川辺にだけこんな文字を使った「ひら」があるのじゃないでしょうか。小丸ケ飛良(こまるがひら)・大迫飛良(おおさこひら)・持留飛良(もちどめひら)・前飛良迫(まえさこひら)。5つ目の「次郎ケ迫」は間違いですので消してください。

6ページに一覧表を作ってみました。真ん中から上が景観・自然地名です。平(比良・飛良)、原、迫、宇都、谷、久保。この中で「ひら」は、平と比良と飛良。飛良は全体で4つしかありません。意味は3つとも同じです。合計すると187。「ひら」が多いということ。

「原」とか「宇都」というのが少なく、「迫」が断然多いようです。「谷」もその半分ぐらいあるようです。

2本線の下に、頭(かしら)・鼻(はな)・尾(お)・尻(しり)。その中では「尾」が付くのが最も多くて、その次に「頭」。「尻」と付くのもだいぶ多いようです。

下にも書きましたように、大字の面積とも関わるとは思いますが、地勢・地形とも関係がありますので、地図と比べて頂ければ見当が付くのではないのでしょうか。

堀・丸・塘・金糞

人文地名では、〈城郭・集落地名の例〉をいくつか出してみました。城・陣：4ページの表でも23あります。これに比べて城跡に関係する「堀」が付くのは、2つしかないのです。あとは牧場の周囲など台地上に「堀」の付く小字があります。田圃の区画になった所でも「堀」の付く小字があるようです。

城に関係のある「丸」は北丸(きたまる)と南

丸(みなみまる)の2つしかないようです。

「丸」にはいくつか意味があるようです。清水の柚木丸(ゆのきまる)、本別府の大丸(おおまる)、これは上山田にもあります。小丸(こまる)、これは本別府・田部田・上山田・両添にもあります。堂ノ丸(どうのまる)とか迎之丸(むかえのまる)という小字が、下山田と神殿にあるようです。最後の「丸尾(まるお)」は山の名前です。小野の丸尾だけを書きましたが、両添にも丸尾があるようです。野崎には「丸山」、上山田と野間には「丸岡」という小字があるようです。

7ページに参ります。〈開発地名の例〉をここにいくつか掲げました。「堀」「木場」「割」「作」。※印に書きましたように共同で開発した畑などに、こういう名前が付いているようです。

「塘」：川辺町以外にもあるのかどうかは判りませんが、塘池(ともいけ)・塘尻(ともじり)・村塘(むらとも)・塘頭(ともがしら)・古塘(ふるとも)の六つ。名前だけじゃなくて、池が2万5千分1の地図にも出ております。

「タタラ」、製鉄に関係のある鉄山(てつやま)金糞(かなくそ)吹越(ひこし)火ノ平(ひのひら)金ケ堀(かねがほり)金糞迫など。金糞が今でも出る処があるそうですが、そんなには多くはないようですし、江戸期以後のものが多いようなのでこの表にはあげませんでした。

次に動植物地名の例ですが、だいぶ多いようです。1行目の小鹿倉(おがくら)、平田先生に教えて頂きましたけど、中世領主の狩場で、一般の者には禁猟区だった、と。狩倉・鹿倉などの表記になっているようです。

悪谷・論山・諸麦

意味不明の地名例。エ) 特異・希少・独特

という表現をしましたが、そのような内容の地名です。最初の○印の「悪谷(アクタニ)」。大字永田では「アクタニ」、清水・高田では「ワクタニ」と読み方が違うようです。読み方一覧を見ながら、この通りかなと思いつきながら書きました。上山田では「アクタニ」。どちらが正しいのか。大字によって読み方が違うのかどうか、判りません。(編集時後記：地名研究では「アクタニ」が常識)。

2番目は論山(ロウザン)となっております。本別府や小野にあります。論地(ロウヂ)という地名も他所にはあるようですので、これも境界線の論争問題からそのまま呼び名になったものと考えられます。

「免(メツ)」が付くものも、いくつかあるようです。租税免除の土地だと思います。庭月野(ニツキノ)という地名がありますが、大変珍しい、良い名前です。

意味不明の小字はそこに掲げて置きましたが、最初のは「諸麦(モロキ)」と読むのだそうです。「イヌガヤという植物」だと、平田先生から教えて頂きました。

雨里・雨包・土喰・案之元

その次の雨里(アメリ)。そんな読みになっていますが、「アマリ」と読むのではないかと平田先生から指摘を頂きました。条里地名というか、古代の行政呼称で「余り・残り」の表現です。(編集時後記：古代では50戸を1里という集落単位にしたが、50戸未満の集落が当然出て来る。それを「余り」と称して一つの「里」とみなした)。

雨包(アマツミ)は雨雲に包まれて湿気の多い所に名付けられる気象地名の一つ。

土喰(ツチク)ですかね。現在、アメリカ人のジェフリーさんが部落会長をやっているよう

です。「喰」の付く地名は一般に浸食地名といわれます。土喰には集落の近くに「馬子の滝」という滝があります。そこに水飲みに来た仔馬が水がなかったの、代わりにその土を食べて帰った、と。此処の土はミネラル分が多いらしいです。ミネラル分を含む土だったので仔馬だけでなく、いろいろな動物がミネラルを食べに来ていたことから、そのような呼び名が生まれたのかなと考えることでした。

平田 それは面白い見方だ。

松浪 案之元(アンノト)、ゴアン、海舟軒。そこに書きましたように平田先生から教えて頂きました(庵・軒は小規模な仏寺)。

自分で調べることで大変勉強になり、感謝しております。しかし、これで川辺の地名調査が終ったことにはなりません。中間報告ということでお許し頂きたいと思ひます。

[質疑応答・補足]

平田 川辺で情報提供をして頂いた社会教育課の方の名を教えてください。

松浪 新地浩一郎という方です。

平田 川辺には、その昔、旧制川辺中学がありました。郡部にあったものとしては川内中学、川辺中学、加治木中学が古くて、その次に来るのが志布志中学でしょうね。

松浪 何ですか。

平田 旧制中学があった所。

松浪 あゝ。

平田 川辺中学出身で東京大学名誉教授の川野重任先生が95才を超えたと思われませんが健在で、川辺中学・川辺高校同窓会に活を入れておられます。

総州家と奥州家

平田 先程の説明にありました中世の川辺

をめぐる島津一族の争いとは、15世紀初めに薩摩国守護職を受け継いだ総州家が野田の木牟礼城、川内の平佐城、最後は川辺の松尾城に拠点を移します。奥州家を力づくで継いだ第8代の島津久豊が、若い総州家の島津久世を鹿児島に呼び出して久世主従を軟禁状態にします。そして強圧的に提起した要求が川辺を差し出すか、差し出さなければ命はないぞとの無理難題で現在の玉竜高校の南端にあった千手観音堂を取り囲みます。川辺に連絡に行かされた家臣が事情を説明すると、川辺に残っていた家臣たちが、こちらには幼いけれど若君がいるから、若君を擁して川辺を死守すると回答したのです。その返事を聞いて、軟禁状態にあった総州家の主従は自決の道を選びます。島津久世が自刃、家臣11名が殉死という悲劇になったのです(1416年)。川辺にいた若君(島津久林)も成人すると川辺を追われて、最後は真幸で討たれ総州家は血統が絶えます(1430年)。

総州家が兄の家柄、鹿児島の奥州家は弟の系統になります。奥州家も第14代勝久で絶え分家筋の伊作島津家が島津家の本宗(正統)になるのが16世紀半ばのことです。

総州家と奥州家は兄と弟の家柄の違いだけでなく、薩摩国守護と大隅国守護の違いがあります。薩摩国守護であった兄の系統が上総介を名乗ったので総州家と呼ばれ、大隅国守護であった弟の系統が陸奥守を名乗ったので奥州家と呼ばれたのです。

国司は守・介・掾・目の四等官制で、上総介と陸奥守を比較すると、陸奥守の方が上位ではと錯覚しますが、上総や常陸は親王任国で国守の親王が赴任することがない特別な国だったのです。次官である介が事実上の国守

となり、国守の中でも地位が高い存在だったのです。忠臣蔵の悪役、吉良上野介の地位はそのように理解すればよいでしょう。

小字の読み誤り

平田 役場提供の小字一覧の「よみ」には誤読が多いのが普通です。大字単位で読んだものを集めたと見られ、大字が違ふと異なった「よみ」になるのが多くあります。

松浪 役場職員の新地さんが一人でしたのでなくて、以前、町の職員だった女性の方が町立図書館に屢々来られて、その人にも小字の読みを調べてもらったりしたものですから

平田 役場の小字一覧は明治中頃のものですから、若い役場職員が付けた新しい読みには間違いが相当入っています。下調べをして印を付けておいたのですが、持ってくるのを忘れました。会報を作成する時に、気付いた間違いを整理します。大まかに見て、此处で気付いたものを指摘しておきます。

平山の4.大終(オヒイラギ)でなくて、「終」は鹿児島では「クヌギ」と読みます。鹿児島県独特の読みで、「ヒイラギ」は全国共通の読みです。

6.雨包:「アマツツミ」でも意味は通じますが、「アマツツミ」と読みます。湿気の多い所をいう気象地名です。27.米〜:コメは地名の場合ヨネと読むのが普通です。82.忍口は「シノグチ」ではなくて「オシグチ」ではないでしょうか。

松浪 田部田ですか。

平田 いや、平山の82。

松浪 オシグチですか。

(編集時後記:「忍〜」とつく地名や名字には「オシ」と読むものが多い)

平田 次は田部田に行きます。2.外戸口は「ソトグチ」ではなく「ケドグチ」。ケドは街道の鹿児島語的な表現です。

2枚目の大字永田。28.本寺、「ホシテラ」ではなくて「モテラ」だと思います。「モテラ」という名字があります。

下山田の61.蒲牟田山野。山野は「ヤマノ」ではなくて「ヤノ」と読みます。山野・大山野(オヤノ)は藩政時代の開墾地のこと。

3枚目の6ページ。56.終平(クヒラ),161.入角(イリス)と共に名字があります。312.柞、これは「ハク」と普通よむのですが、鹿児島県では「イスノキ」を指します。330.剥石、「ハクシ」とか「ハクシ」と読みます。172.門前、「カドマエ」でなくて「モンゼン」。377.寺の名は善積寺(ゼンシキジ)でしょうね。寺の名は呉音で読むのが多い。423.問ノ谷、「トイノニ」でしょうね。

本別府の81.「垂(ク)」というのはその昔商業地域にのれんのような垂(ク)を下げたのです。それから内は領主が特権的空間と認めて、すべての者が自由・平等とされた地域になります。近世初期の楽市・楽座や、中世のヨーロッパでアジールと呼ばれた特別地域になります。

以下、テープ切れ、録音なし。「読み」の誤りの説明なので話の内容はカバー出来る。

(1.大字、平山)

4.大終 オオヒイラギ→オオクヌギ

6.雨包 アメツツミ→アマツツミ

7.津ヅルキ ツヅルキ→トドロキ(轟)

27.米水 コメミズ→米永:ヨネナガ?

45.ヲロン口 ヲロンモト→ヲロンクチ

80.馬越 ウマゴエ→マゴエ or マゴシ

96.徳代 ノリシロ ?

(2.大字、田部田)

2.外戸口 ソトグチ→ケドグチ

13.トケ比良 トケヒラ ?

37.次平 ツギヒラ→ジヘイ(人名?)

59.行屋比良 ユキヤヒラ→ギョウヤヒラ(鹿児島駅近くに行屋馬場(ギヤンバ)の地名がある。行者(ギョウジャ)ゆかりの地名か?)

75.正脇ケ迫 マサワキガサコ ?

(4.大字、下山田)

26.早馬堀 ハヤウマボリ→ハヤマボリ

36.下り平 クダリヒラ→サガリヒラ

(アガリに対するサガリ。行者たちが修行の為に山に入り、修行を終えて下山するに際し村人たちが迎え、祝宴する場所を下り平とか下り山と呼んだ。宗教的色彩濃厚な場所)。

61.蒲牟田山野 カマムタヤマノ

→カマムタサンヤ

(山野・大山野(オヤノ)は藩政時代の開墾地で、仕明地:シアケチ、拘地:カケチ、持留:モチドメなどと同類のもの)

78.梨子木山:ナシコキヤマ→ナシノキヤマ

83.下り谷字都 クダリタニウト

→サガリタニウト

120.土器 コラキ←カワラケの転訛?

(6.大字、上山田)

56.終平 ヒイラギヒラ→クイビラ

110.雨里 アメサト→アマリ

161.入角 イリカド→イリスミ

203.雨包 アメツツミ→アマツツミ

303.葉竹山 ハタケヤマ→ハチクヤマ

(「ハチク」は竹の種類名)。

304.涼松 スズマツ→スズミマツ(スズマツ)

(畑の隅にある松の木の下で農作業中に休憩をした。風通しのよい所)。

312.柞ケ角 ハハソガカド→ユスガスミ?

330.剥石 ハクセキ→ハグイシ・ハグシ

339.下山 サガヤマ→サガイヤマ

354.堂跡 ドウセキ→ドウアト

374.門前 カドマエ→モンゼン

377. 善積寺 ゼンセキジ→ゼンシヤクジ
(仏寺の場合は呉音で読む例が多い)。
404. 米山 コメヤマ→ヨネヤマ
423. 問ノ谷 モンオタニ→トイノタニ
(7. 大字、本別府)
39. 馬上田 ウマウエダ→バジョウダ
(馬上免田をさすもの。婆尉田もあるか)
44. 三百町 ミモモマチ→サンビヤクチョウ
46. 小鹿倉 コジカクラ→コガクラ
51. 外戸之口比良 ソトグチヒラ
→ケドノクチヒラ
78. 樽角山 タルカドヤマ→タイカドヤマ
(樽角は垂門：タレカドの当て字)
80. 早馬平 ハヤウマヒラ→ハヤマヒラ
81. 垂門井川前 スイモンイカワマエ
→タレカドイガワマエ
95. 猪ノ久保 イノシノクボ→イノクボ・シノクボ
124. 垂門比良 スイモンヒラ→タレカドヒラ
125. 川原谷山之口 カワハタタニヤマノクチ
→カワラタニヤマノクチ
146. 馬ツク子バ ウマツクコバ ?
210. 崩頭 クズレカシラ→クエカシタ
(8. 大字、高田)
47. 元日田 モトヒタ→ガンジツデン
113. 瀬越 カワウソコシ→ウソゴエ
161. 兵衛ケ迫 ヘイベイガサコ ?
182. 悪谷 ワルタニ→アクタニ
210. 明賀谷 アケガタニ→ミョウガタニ
(茗荷が生えている谷のこと)。
(9. 大字、宮)
58. ゴツ谷川原 ゴツタニカワハラ
：後藤谷川原(ゴツタニカワ)
62. 櫟木 ヒイラギ→クヌギ
118. 元日田 モトヒタ→ガンジツデン
122. 九日田 ココノヒタ→クニチデン
- (13. 大字、野崎)
4. 徳善 ノリヨシ→トクゼン?
102. 提ノ角 テイノカド→サゲノスミ?
165. 遠呂平 エンロビラ→オロヒラ
(14. 大字、清水)
38. 弥平屋地 ヤヒラヤチ→ヤヘイヤチ
53. 三月田 ミツキタ→サンガツダ
(元日田・九日田・三月田などは元日・九日・三月の祭りの費用をまかなう為の祭礼田)
88. 黒葛木ケ迫 クロカズラギガサコ
→ツツラガサコ?
95. 雨包 アメツツミ→アマツツミ
117. 悪谷 ワルタニ→アクタニ
122. 仏谷 ブツタイ→ホトケタニ?
141. 米山 コメヤマ→ヨネヤマ
151. 下り山 クダリヤマ→サガリヤマ
157. 隼馬平 ハヤウマヒラ→ハヤマヒラ
184. 当トンヤチ アタリトンヤチ
→トトンヤチ
(15. 大字、神殿)
48. 熊鹿倉 クマシカクラ→クマカクラ
52. 祢五郎 ネゴロウ→弥五郎：ヤゴロウ
(弥五郎は巨人伝説。県下に分布)
57. 八丈 ハチタケ→ハチジョウ
85. 尾松下り オマツクダリ→～サガリ
110. 樋渡 ヒワタリ→ヒワタシ
122. 堂角 ドウカク→ドウカド?
194. 崩元 クズレモト→クエモト?
(17. 大字、野間)
14. 完ノ足形 カンノアシカタ
→シシノアシカタ (完は宍の誤記)
22. 善亀ケ尾 ヨシカメガオ→ゼンガメガオ
(善亀は銭瓶・銭神の転訛)
27. 雨包 アメツツミ→アマツツミ
43. メトキ下り メトキクダリ→～サガリ

川辺町の小字(総計 2600)

1. 大字 平山 (136)

1 外戸之口	ケドノクチ	61 中塚	ナカツカ
2 佛坂	ホトケザカ	62 西ノ塚	ニシノツカ
3 立岩	タテイワ	63 雁俣迫	カリマタザコ
4 大塚	オオヒイラギ	64 吉野	ヨシノ
5 大堀	オオホリ	65 耳切	ミミキリ
6 雨包	アメツツミ	66 萩場迫	ハシバザコ
7 津ツルキ	ツツルキ	67 猫山	ネコヤマ
8 大瀬戸	オオセト	68 宇都ノ迫	ウトノサコ
9 岩塚	イワツカ	69 宇都ヶ比良	ウトガヒラ
10 岩塚比良	イワツカヒラ	70 道正堀	ドウショウボリ
11 三本比良上	サンボンヒラウエ	71 佐別当	サベツトウ
12 善兵衛迫	ゼンペイザコ	72 駒越	コマゴエ
13 二本平	ニホンビラ	73 道正堀前比良	ドウショウボリマエヒラ
14 犬之塔鼻	イヌノトウバナ	74 池ノ迫	イケノサコ
15 三本比良	サンボンヒラ	75 墓ノ下	ハカノシタ
16 犬之迫	イヌノサコ	76 松之元	マツノモト
17 榊木迫	タバキザコ	77 山越山	サンショウヤマ
19 中之迫	ナカノザコ	78 十郎ヶ宇都	ジュウロウガウト
20 柏段	カシワダン	79 駒越迫	コマゴエザコ
21 中ノ迫尻	ナカノザコジリ	80 馬越比良	ウマゴエヒラ
22 長山	ナガヤマ	81 馬越原	ウマゴエハラ
23 犬之塔	イヌノトウ	82 忍口尻	シノブクチジリ
24 加治殿迫	カジノザコ	83 宮田	ミヤタ
25 荒平	アラヒラ	84 馬越	ウマゴエ
26 江平	エヒラ	85 天神坊	テンジンボウ
27 米水	コメミズ	86 砂走	スナバシリ
28 後平	ウシロヒラ	87 湧沢津	ワキサワツ
29 鉦磨比良	ナタギヒラ	88 小松ヶ尾	コマツガオ
30 鉦磨	ナタギ	89 弓細工	ユミサイク
31 後比良迫	ウシロヒラザコ	90 立石	タテイシ
32 中道	ナカミチ	91 堂免	ドウメン
33 佐蔵山	サクラヤマ	92 竹添	タケソエ
34 作蔵迫	サクゾウザコ	93 古門	フルカド
35 鉦磨迫	ナタギザコ	94 盛園	モリソノ
36 琵琶ノ谷	ビワノタニ	95 佐牟田	サムタ
37 丸岡迫	マルオカザコ	96 徳代	ノリシロ
38 大岩ノ迫	オオイワノザコ	97 平松	ヒラマツ
39 丸岡	マルオカ	98 薩摩田	サツマダ
40 沢津橋迫	サワツバシザコ	99 樋口	ヒグチ
41 田ノ上嶽	タノウエダケ	100 大坪	オオツボ
42 馬立比良	マタテヒラ	101 京田	キョウデン
43 魚釣石	ウオツリイシ	102 中ノ坪	ナカノツボ
44 魚釣石ノ迫	ウオツリイシノザ	103 六丁園田	ロクチョウソノダ
45 ヲロン口	ヲロンモト	104 五反田川原	ゴタンダカワハラ
46 飯森塚後ノ迫	イモリツカノサコ	105 大蔵前	オオクラマエ
47 飯森塚後比良	イモリツカノヒラ	106 拂川	ハライガワ
48 岩川	イワカワ	107 拂川尻	ハライガワジリ
49 並木浦田	ナミキウラダ	108 木ノムレ	キノムレ
50 比和ノ段迫	ヒワノダンサコ	109 中津町	ナカツマチ
51 浦田	ウラダ	110 永田	ナガタ
52 大迫	オオサコ	111 馬渡	マワタリ
53 岩川尻	イワガワジリ	112 松山	マツヤマ
54 大迫比良	オオサコヒラ	113 三反田	サンタンダ
55 前園浦田	マエソノウラダ	114 福田	フクダ
56 岩ノ元	イワノモト	115 中川原	ナカガワハラ
57 太郎ヶ迫	タロウガザコ	116 山之内	ヤマノウチ
58 榊木	シイキクチ	117 川原町	カワハラマチ
59 坂之上	サカノウエ	118 横手町	ヨコテマチ
60 飯森塚	イモリツカ	119 横枕	ヨコマクラ

120 鷹取	タカトリ
121 迫田	サコダ
122 中町	ナカマチ
123 前田町	マエダマチ
124 諏訪下	スワシタ
125 諏訪	スワ
126 本町	ホンマチ
127 諏訪尾	スワオ
128 倉ヶ迫	クラガザコ
129 大和ノ平	オオハシノヒラ
130 新城	シンジョウ
131 天神城	テンジンジョウ
132 本城	ホンジョウ
133 花見城	ハナミジョウ
134 牟田屋敷	ムタヤシキ
135 蔵前之下	クラマエノシタ
136 榊木迫	シイノキサコ

17. 大字 野間 (P17) のつづき

117 新田	シンデン
118 甕ヶ迫	コシキガサコ
119 出水	デミズ
120 小平原	コヒラハラ
121 大久保下川路	オオクボ
122 大坪	オオツボ
123 南田	ミナミダ
124 大久保	オオクボ

2. 大字 田部田 (140)

1 加寛田	ガランダ	59	行屋比良	ユキヤヒラ	117	原田	ハラダ
2 外戸口	ホカトグチ	60	下柳ヶ谷	シモヤナギガタニ	118	六町	ロクチョウ
3 小坂	コサカ	61	下岩下	シモイワシタ	119	刈元	カリモト
4 南田代	ミナミタシロ	62	太郎ヶ迫	タロウガサコ	120	ススコ原	ススコハラ
5 北田代	キタダシロ	63	ウクリ岩	ウクリイワ	121	南田前田	ミナミダマエダ
6 黒木山	クロキヤマ	64	上岩下	ウエイワシタ	122	大渡	オオワタリ
7 苗代ヶ丸	ナエシロガマル	65	植松入口	ウヰマツノイロ	123	新田	シンデン
8 堂之元	ドウノモト	66	阿津ヶ瀬戸	アツガセト	124	南洗川	ミナミアライカワ
9 越ヶ原平	コシガハラヒラ	67	東猫山	ヒガシネコヤマ	125	金村田	カネムラタ
10 井川ノ尻	イカワノシ	68	西猫山	ニシネコヤマ	126	二反田	ニタンダ
11 熊ヶ内	クマガウチ	69	ヲンチヨガ山	ヲンチヨガヤマ	127	高次	タカツギ
12 瀬之脇	セノワキ	70	南猫山	ミナミネコヤマ	128	井料前	イリヨウマエ
13 トヶ比良	トケヒラ	71	佐々良	サザラ	129	東中ノ島	ヒガシナカノシマ
14 下越ヶ原	シモコシガハル	72	石切場	イシキリバ	130	中通	ナカドオリ
15 上越ヶ原	ウエコシガハル	73	佐々良山下	サザラヤマシタ	131	西中ノ島	ニシナカノシマ
16 西大迫	ニシオオサコ	74	佐々良山	サザラヤマ	132	北洗川	キタアライカワ
17 下原	シモハラ	75	正脇ヶ迫	マサワキガサコ	133	轟木田	トドロキダ
18 山下堀	ヤマシタホリ	76	上猫山	ウエネコヤマ	134	加寛田ノ下	ガランダノシタ
19 遠目ヶ尾	トオメガオ	77	大比良	オオヒラ	135	後ヶ迫	ウシロガサコ
20 東大迫	ヒガシオオサコ	78	西雁俣	ニシカリマタ	136	小丸	コマル
21 上仁久田	カミニクタ	79	東雁俣迫	ヒガシカリマタサコ	137	廻り淵	メグリフチ
22 中仁久田	ナカニクタ	80	雁俣迫	カリマタサコ	138	岩下	イワシタ
23 小大迫	コオオサコ	81	権兵衛平	ゴンベエヒラ	139	丸尾	マルオ
24 仁久田前平	ニクタマエヒラ	82	石切場	イシキリバ	140	石切場ノ上	イシキリバノウエ
25 下仁久田	シモニクタ	83	西山神	ニシヤマガミ			
26 西松ヶ迫	ニシマツガザコ	84	猫山下	ネコヤマシタ			
27 堤下	デシタ	85	池尻	イケジリ			
28 東松ヶ迫	ヒガシマツガザコ	86	柴建	シバタテ			
29 鳥越	トリゴエ	87	河治	カワジ			
30 貫口	ヌキグチ	88	七曲	ナナマガリ			
31 鍋ヶ谷	ナベガタニ	89	宇都迫	ウトサコ			
32 下長野	シモナガノ	90	床並	トコナミ			
33 貫口ノ上	ヌキグチノウエ	91	柞木	クスノキ			
34 上永野	ウエナガノ	92	大正田	タイショウダ			
35 コツテ坂	コツテザカ	93	田中田	タナカダ			
36 通山口	トオリヤマグチ	94	羽祢田後	ハネダウシロ			
37 次平ヶ迫	ツギヒラガサコ	95	羽祢田	ハネダ			
38 赤土坂	アカツチザカ	96	西小城	ニシコジョウ			
39 瀬田ヶ比良	セタガヒラ	97	東小城	ヒガシコジョウ			
40 次平ヶ前	ツギヒラガマエ	98	大久保	オオクボ			
41 滝之上	タキノウエ	99	下町	シタマチ			
42 浦田	ウラダ	100	宇都ノ尻	ウトノジリ			
43 上椎ナシ	ウエシイナシ	101	小吉野	コヨシノ			
44 横岡	ヨコオカ	102	山神	ヤマガミ			
45 南田部田ヶ宇都	ミナミタベガウト	103	西吉野	ニシヨシノ			
46 椎ナシ	シイナシ	104	東吉野	ヒガシヨシノ			
47 北田部田ヶ宇都	キタ	105	宇都	ウト			
48 加藤ヶ山	カトウガヤマ	106	上町	カミマチ			
49 大山之口	オオヤマノクチ	107	今市原	イマイチハラ			
50 西比良	ニシヒラ	108	地頭堀	ジトウボリ			
51 東田部田ヶ宇都	ヒガシタベガウト	109	陣	ジン			
52 イゲ迫	イゲサコ	110	小松ヶ尾	コマツガオ			
53 西比良西大迫	ニシヒラニシオオサコ	111	東今村	ヒガシイマムラ			
54 舟岩ノ上	フネイワノウエ	112	西今村	ニシイマムラ			
55 舟岩ノ下	フネイワノシタ	113	西之野	ニシノ			
56 白坊田	シロボウダ	114	今村	イマムラ			
57 柳ヶ谷	ヤナギガタニ	115	前田	マエダ			
58 寺屋敷	テラヤシキ	116	中牟田	ナカムタ			

ナガタ
3. 大字 永田 (100)

シモヤマダ
4. 下山田 (121)

ナカヤマダ
5. 中山田 (71)

1 芹牟田	セリムタ	58 中宇都ノ迫	ナカウトノサコ	1 一本松	イッポンマツ
2 半迫	ハンサコ	59 山門合	サンモンアイ	2 南之上	ミナミノウエ
3 兎ヶ城	ウサギガシロ	60 山下堀	ヤマシタホリ	3 深田	フカダ
4 下平	シモヒラ	61 上西ヶ迫	ウエニシガサコ	4 楠渡瀬	クスワタセ
5 上比山	ウエヒヤマ	62 中西ヶ迫	ナカニシガサコ	5 大山下	オオヤマシタ
6 瀧ノ上	タキノウエ	63 下中西ヶ迫	シモノシガサコ	6 坂之上	サカノウエ
7 瀧ノ元	タキノモト	64 境杉ノ上	サケスギノウエ	7 東原	ヒガシバル
8 木場田	コバンタ	65 東大迫	ヒガシオオサコ	8 大迫	オオサコ
9 西	ニシ	66 下大迫	シモオオサコ	9 塚之園	ツカノソ
10 小坂ノ下	コサカノシタ	67 上大迫	ウエオオサコ	10 川添	カワソエ
11 坂口	サカグチ	68 西大迫	ニシオオサコ	11 餅田	モチダ
12 水元	ミズモト	69 楠木比良	クスノキヒラ	12 堀切	ホリキリ
13 湧沢津	ウキサワツ	70 ツブラ山上(明)	ツブラヤマウエ	13 西ノ園	ニシノソ
14 前田	マエダ	71 ツブラ山	ツブラヤマ	14 諏訪園	スワジノ
15 東原	ヒガシハラ	72 池之上	イケノウエ	15 桃園	モモノ
16 古市	フルイチ	73 池ノ頭	イケノカシラ	16 宇都	ウト
17 芝牟田	シモムタ	74 田ノ比良	タノヒラ	17 高良ヶ原	コウラガバル
18 古市田間	フルイチタマ	75 矢石迫	ヤセキサコ	18 諏訪原	スワバル
19 牟田比良	ムタヒラ	76 堂免	ドウメン	19 山門原	ヤマカドバル
20 永ハサマ(狭間)	ナガハサマ	77 寺山野	テラヤマン	20 八幡堀	ハチマンボリ
21 田之頭	タノカシラ	78 下寺山野	シモテラヤマン	21 堂ノ丸	ドウノマル
22 東古市田間	ヒガシフルイチタマ	79 永山上	ナガヤマウエ	22 室ノ園	ムロノソ
23 田之尻山	タノジリヤマ	80 矢石上	ヤセキウエ	23 大角田	オオスミダ
24 大園	オオソノ	81 矢石ノ元	ヤセキノモト	24 弓立堀	ユミタテボリ
25 園田	ソノダ	82 山ノ口	ヤマノクチ	25 中越	ナカゴシ
26 櫛元	クシモト	83 上山ノ口	ウエヤマノクチ	26 早馬堀	ハヤウマボリ
27 五反田	ゴタンダ	84 上中野	ウエナカノ	27 矢倉ヶ迫	ヤクラガサコ
28 本寺	ホンデラ	85 東中野	ヒガシナカノ	28 上之平	ウエノヒラ
29 四反田	シタンダ	86 下中野	シモナカノ	29 供養塚	クヨウヅカ
30 瀬戸口	セトグチ	87 中野	ナカノ	30 東大戸ヶ原	ヒガシオオトガハラ
31 山下原	ヤマシタハラ	88 小丸ヶ飛良	コマルガヒラ	31 東面之平	ヒガシメンノヒラ
32 小園	コソノ	89 西中野	ニシナカノ	32 西面之平	ニシメンノヒラ
33 尾永田	オナガタ	90 南中野	ミナミナカノ	33 秋田	アキタ
34 小古川	コフルカワ	91 遠目ヶ尾	トオメガオ	34 松原	マツバラ
35 有田	アリタ	92 南中野迫	ミナミナカノサコ	35 瀧之上	タキノウエ
36 丸玉	ウダマ	93 中野迫	ナカノサコ	36 津フシ	ツフシ
37 新屋	シンヤ	94 妙現俣	ミョウゲンマタ	37 下り平	クダリヒラ
38 元立	モトタチ	95 前飛良迫	マエヒラサコ	38 芹牟田	セリムタ
39 中水流	ナカヅル	96 小坂ノ上	コサカノウエ	39 ニッ石	フタツイシ
40 芹ヶ谷	セリガタニ	97 西山ノ上	ニシヤマノウエ	40 人落谷	ヒトオチタニ
41 上中水流	ウエナカツル	98 飛類山ノ上	ヒルイヤマノウエ	41 大倉野谷	オオクラノタニ
42 下庭坂	シタニワサカ	99 上兎ヶ城	ウエウサギガシロ	42 柴立	シバタテ
43 中庭坂	ナカニワサカ	100 瀧元	タキモト	43 枳場	ハシバ
44 上庭坂	ウエニワサカ			44 水ヶ元	ミズガモト
45 窟ノ上	ホキノウエ			45 西大戸ヶ原	ニシオオトガハラ
46 大園堀	オオソノホリ			46 獅子見ヶ尾	シシミガオ
47 悪谷迫	アクタニサコ			47 多良木	タラキ
48 下悪谷迫	シモアクタニサコ			48 西供養塚	ニシクヨウヅカ
49 下大園堀	シモオオソノホリ			49 高山	タカヤマ
50 長迫	ナガサコ			50 二反田ヶ原	ニタンダガハラ
51 上長迫	ウエナガサコ			51 荒田原	アラタハラ
52 西堀	ニシホリ			52 馬見岡	ウマミオカ
53 西大園堀	ニシオオソノホリ			53 下荒田迫	シモアラタサコ
54 北大園堀	キタオオソノホリ			54 上荒田迫	ウエアラタサコ
55 前五本松	マエゴホンマツ			55 桑持野	クワジノ
56 後五本松	ウシロゴホンマツ			56 平渡瀬	ヒラワタセ
57 宇都ノ迫	ウトノサコ			57 久保	クボ
				58 登瀬	ノボリセ

57 轟ヶ迫	トドロキガサコ	117 三反田	サンタンダ
58 東番屋ヶ尾	ヒガシバンヤガオ	118 中ノ古川	ナカノフルカワ
59 蒲牟田山野	カマムタヤマン	119 尻田間	シリタマ
60 上番屋ヶ尾	ウエバンヤガオ	120 土器	コラキ
61 下番屋ヶ尾	シモバンヤガオ	121 室ノ園	ムロノソ
62 上桃木渡瀬	ウエモモキワタセ		
63 下桃木渡瀬	シモモモキワタセ		
64 下横尾	シモヨコオ		
65 中横尾	ナカヨコオ		
66 上横尾	ウエヨコオ		
67 日當平	ヒアタリヒラ		
68 日當平	ヒアタリヒラ		
69 権助谷	ゴンスケタニ		
70 四郎左衛門ヶ平	シロウサモノヒラ		
71 竹屋ヶ尾	タケヤガオ		
72 蛇野谷	ヘビノタニ		
73 落平	オトシヒラ		
74 梨子木山	ナシコキヤマ		
75 蛇野	ヘビノ		
76 青戸堀	アオトボリ		
77 上青戸堀	ウエアオトボリ		
78 二反田山野	ニタンダヤマン		
79 狸ヶ平	タヌキガヒラ		
80 乘越	ノリゴシ		
81 谷之宇都	タニノウト		
82 下り谷之宇都	クダリタニノウト		
83 茶園ヶ原	チャエンガハラ		
84 立野平	タチノヒラ		
85 答石	コタエイシ(サキイシ)		
86 宮ノ谷	ミヤノタニ		
87 塩入川	シオイリカワ		
88 月白	ツキシロ		
89 薄堀	ウスイホリ		
90 西遠見ヶ尾	ニシトオミガオ		
91 東遠見ヶ尾	ヒガシトオミガオ		
92 四門原	シカドバル		
93 堂法	ドウホウ		
94 堂山	ドウヤマ		
95 牛本	ウシモト		
96 宮迫	ミヤサコ		
97 八枝	ヤツエダ		
98 古塘	フルトモ		
99 源去堀	ゲンキョボリ		
100 片平	カタヒラ		
101 大道橋	ダイドウバシ		
102 先ノ田	サキノタ		
103 鳥越	トリゴエ		
104 原田前	ハラダマエ		
105 田中	タナカ		
106 蒲牟田	カマムタ		
107 山仁田	ヤマニタ		
108 西牟田	ニシムタ		
109 黒木迫	クロキサコ		
110 原田	ハラダ		
111 霧島	キリシマ		
112 平田	ヒラタ		
113 庄屋敷	ショウヤヤシキ		
114 樋之口	ヒノクチ		
115 垣添	カキソエ		
116			

1 當円寺	トウエンジ
2 東四枝	ヨツエダ
3 下之口	シモノクチ
4 口之坪	クチノツボ
5 正牟田	ショウムタ
6 尾ノ山下	オノヤマシタ
7 前田	マエダ
8 竹内	タケウチ
9 花元	ケモト
10 八反田	ハチタンダ
11 宮ノ前	ミヤノマエ
12 從弟附	イトコツキ
13 平山	ヒラヤマ
14 山神ノ上	ヤマカミノウエ
15 中尾平	ナカオヒラ
16 平迫	ヒラサコ
17 一本松	イッポンマツ
18 藤野原	フジノハラ
19 本田堀	ホンダホリ
20 丸尾迫	マルオサコ
21 山神ノ下	ヤマガミノシタ
22 宇都良	ウトラ
23 城内	ジョウナイ
24 中須田	ナカス
25 龜田	ソノダ
26 龜銅	カメドウ
27 二反田	ニタンダ
28 砂田	スナダ
29 君屋敷	キミヤシキ
30 一里塚	イチリツカ
31 柿木迫	カキノキサコ
32 光明寺谷	コウミョウジタニ
33 東宮中野	ヒガシミヤナカノ
34 宮中野	ミヤナカノ
35 光明寺	コウミョウジ
36 宝正寺	ホウショウジ
37 水流	ツル
38 上ノ口	ウエノクチ
39 麓	フモト
40 下麓	シモフモト
41 本薬師	モトヤクジ
42 寺中	ジチュウ
43 天神山	テンジンヤマ
44 高佛	タカボトケ
45 和田堀	ワダボリ
46 北ノ迫	キタノサコ
47 長堀	ナカホリ
48 割地平	ワリチビラ
49 西ノ迫	ニシノサコ
50 南堀	ミナホリ
51 牧ノ田山	マキノタヤマ
52 阿部ヶ尾	アベガオ
53 弓田迫	ユミタサコ
54 銅金	ドウキン
55 銅金ノ下	ドウキンノシタ
56 市ノ原	イチノハラ
57 芋洗河	イモアライカワ
58	

6. 上山田 (464)

59	塘ノ頭	トモノカシラ	1	光明寺前	コウミョウジマエ	59	下君野尻	シモキミノジリ
60	小田石	オダイシ	2	荒巻ノ下	アラマキノシタ	60	荒田	アラタ
61	大隅ヶ尾	オオスミガオ	3	荒巻	アラマキ	61	城戸坂	キドサカ
62	太郎ヶ山	タロウガヤマ	4	荒巻ノ上	アラマキノウエ	62	陳ノ尾	ジンノ オ
63	八久保	ハチクボ	5	大正野谷	タイショウノタニ	63	船木迫	フナキサコ
64	大連山	オオタテヤマ	6	大正野	タイショウノ	64	田中堀	タナカボリ
65	中立山	ナカタチヤマ	7	西大正野	ニシタイショウノ	65	北船木迫	キタフナキサコ
66	立山	タチヤマ	8	北大正野	キタタイショウノ	66	西ノ上	ニシノウエ
67	石ヶ間伏	イシガマフシ	9	大正野迫	タイショウノサコ	67	悪谷尻	アクタニジリ
68	石ヶ間伏上	イシガマフシウエ	10	唐舟ヶ淵	トウセンガフチ	68	悪谷	アクタニ
69	木場ヶ平	コバガヒラ	11	灰塚	ハイヅカ	69	前原	マエバル
70	天ヶ久保	アマガクボ	12	堀之内	ホリノウチ	70	大迫	オオサコ
71	銅金平	ドウキンピラ	13	東堀之内	ヒガシホリノウチ	71	朽木馬場	ハシキババ
			14	迫田ノ上	サコダノウエ	72	柴立	シバタテ
			15	池宇都	イケウト	73	桜ヶ迫	サクラガサコ
			16	外園	ホカソノ	74	権現谷	ゴンゲンダニ
			17	北面	キタメン	75	耳取丘	ミミトリオカ
			18	銭淵	ゼニブチ	76	権現ノ上	ゴンゲンノウエ
			19	津舟	ツフネ	77	中野	ナカノ
			20	有木	アリキ	78	狩保	カリマタ
			21	亀甲上	カメコウウエ	79	松尾上	マツオウエ
			22	亀甲下	カメコウシタ	80	松尾平	マツオビラ
			23	谷山尻	タニヤマジリ	81	上背野	カミセノ
			24	谷山下	タニヤマシタ	82	背野平	セノヒラ
			25	谷山迫尻	タニヤマサコジリ	83	一本松	イツボンマツ
			26	塘尻	トモジリ	84	山仁田上	ヤマニタウエ
			27	谷山平	タニヤマビラ	85	沓本松迫	イツボンマツサコ
			28	桃木迫	モモキサコ	86	西ノ谷上	ニシノタニウエ
			29	久保	クボ	87	1本松ノ上	イツボンマツノウエ
			30	三百作	サンヒヤクサク	88	猿掛	サルカケ
			31	下井ノ尻	シモイノジリ	89	西ノ谷頭	ニシノタニカシラ
			32	上井ノ尻	ウエイノジリ	90	西ノ谷	ニシノタニ
			33	橋之口	ハシノクチ	91	坂ノ下	サカノシタ
			34	山仁田	ヤマニタ	92	坂ノ上	サカノウエ
			35	中ノ園	ナカノソノ	93	狸山谷	タヌキヤマダニ
			36	市之瀬	イチノセ	94	下谷瀬	シモヤセ
			37	切手分	キリテワケ	95	犬堀ヶ谷	イヌホリガタニ
			38	山下	ヤマシタ	96	犬堀ノ上	イヌホリノウエ
			39	榎木田	エノキダ	97	長野平	ナガノビラ
			40	大坪	オオツボ	98	犬堀ヶ谷頭	イヌホリガタニガシラ
			41	六枝	ムツエダ	99	崎野	サキノ
			42	六ノ坂	ロクノサカ	100	岩塚前	イワツカマエ
			43	上ノ門	ウエノカド	101	入佐平	イリサヒラ
			44	本門	モトカド	102	入佐谷	イリサタニ
			45	下牧ノ田	シモマキノタ	103	片服桶	カタフククスノキ
			46	上牧ノ田	カミマキノタ	104	石塚尻	イシヅカジリ
			47	軸屋ノ上	ジクヤノウエ	105	石塚	イシヅカ
			48	塘ノ頭	トモノカシラ	106	石塚上	イシヅカウエ
			49	堂ノ上	ドウノウエ	107	片服桶ノ上	カタフククスノキノウエ
			50	阿部ヶ尾	アベガオ	108	丸岡	マルオカ
			51	越之口	コシノクチ	109	雨里上	アメサトウエ
			52	阿田ヶ谷	アタガタニ	110	雨里	アメサト
			53	下仁田ヶ瀬戸	シモニタガセト	111	岩松	イワマツ
			54	出口	デグチ	112	崎之巢	サキノス
			55	上仁田ヶ瀬戸	カミニタガセト	113	上之作	ウエノサク
			56	椋平	ヒイラギビラ	114	上山口	ウエヤマクチ
			57	藤氏	サルウシ	115	大山口	オオヤマクチ
			58	下君野	シモキミノ			

116	大山口迫	オオヤマクチサコ	173	大谷口	オオタニクチ	322	鳥越	トリゴエ
117	樋山谷頭	ヒヤマトニカシラ	174	小平	コヒラ	323	東鳥越	ヒガシトリゴエ
118	星合	ホシアイ	175	大谷	オオタニ	324	上川口	カミカワグチ
119	星合平	ホシアイヒラ	176	諸麦平手	モロムギヒラ	325	荒平	アラヒラ
120	樋山谷	ヒヤマトニ	177	諸麦迫	ナカドテ	326	新ヶ谷	アラガタニ
121	大丸	オオマル	178	切出	モロムギサコ	327	宇都	ウト
122	大丸之上	オオマルノウエ	179	切出平	キリダシ	328	宇都尻	ウトジリ
123	白岸	シロキシ	180	切出尻	デヒラ	329	宇都口	ウトグチ
124	白岸上	シロキシウエ	181	阿房谷	キリダシジリ	330	剥石	ハクセキ
125	中島谷	ナカシマタニ	182	阿房谷頭	アホウタニ	331	代田	タシロ
126	小長野谷	コナガノ	183	阿房迫	アホウタニカシラ	332	八久保	ハチクボ
127	小長野	コナガノ	184	西之迫	アホウサコ	333	木屋敷	コヤヤシキ
128	鷹爪野谷	タカツメノタニ	185	西原	ニシノサコ	334	木屋下	コヤシタ
129	鷹爪野	タカツメノ	186	下原	シモハラ	335	野口	ノグチ
130	樋山谷頭上	ヒヤマトニカシラ	187	竹内平	タケウチヒラ	336	竹内	イオク
131	鷹爪野頭	タカツメノカシラ	188	竹内	タケウチ	337	打木谷	ウチキタニ
132	棚橋	ナギハシ	189	案之元	アンノモト	338	打木谷下	ウチキタニシタ
133	氷加賀野頭	コオリカガノカシラ	190	庭月野	ニワツキノ	339	下山	サガヤマ
134	氷加賀野	コオリカガノ	191	村塘頭	ムラツツミカシラ	340	山路谷	ヤマジタニ
135	川原山	カワハラヤマ	192	村塘	ムラツツミ	341	山路谷上	ヤマジタニウエ
136	横畑	ヨコハタ	193	峯尾	ミネオ	342	穴原	アナハラ
137	後之谷	ウシロノタニ	194	峯尾下	ミネオシタ	343	入谷頭	イリタニカシラ
138	後ノ谷頭	ウシロノタニカシラ	195	木場様	コバサマカシラ	344	中南風野	ナカハエノ
139	後谷上	ウシロタニウエ	196	木場様	コバサマ	345	南風野迫	ハエノサコ
140	本申	モトサル	197	内山平	ウチヤマヒラ	346	山ノ口	ヤマノクチ
141	久邊背道	クアタリセミチ	198	木場様谷	コバサマタニ	347	茶屋田間	チャヤタマ
142	下道之平	シモミチノヒラ	199	小月野頭	コツキノ	348	下南風野	シタハエノ
143	上道之平	ウエミチノヒラ	200	小月野	コツキノカシラ	349	入谷尻	イリタニジリ
144	野之口	ノノクチ	201	桜木谷	サクラギタニ	350	入谷	イリタニ
145	野之口頭	ノノクチカシラ	202	雨包谷	アメツツミタニ	351	穴谷頭	アナタニカシラ
146	地藏谷	ジゾウタニ	203	雨包	アメツツミ	352	穴谷	アナタニ
147	地藏谷上	ジゾウタニウエ	204	矢板之頭	ヤカラクリタニ	353	栗木野頭	クリキノカシラ
148	溝口	ミゾグチ	205	矢板之頭	ヤカラクリノカシラ	354	堂跡	ドウゼキ
149	黒岩	クロイワ	206	胸突坂	ムネツキサカ	355	出水	デミズ
150	三方境	サンボウサカイ	207	城ヶ南風	ジョウガハエ	356	栗木野	クリキノ
151	高焼下	タカヤキシタ	208	城ヶ南風頭	ジョウガハエカシラ	357	栗木野尻	クリキノジリ
152	仁田上	ニタ	209	大竿	オオサオ	358	伊勢部谷	イセバナ
153	中尾上	ナカオウエ	210	桐木平	キリキビラ	359	鷹野原	タカノハル
154	中尾	ナカオ	301	深牟田上	フカムタウエ	360	川原山向	カワハラヤマカシラ
155	中尾下	ナカオシタ	302	深牟田	フカムタ	361	寺谷	テラタニ
156	仁田下	ニタシタ	303	葉竹山	ハタケヤマ	362	鳥瀬平	トリブチヒラ
157	中尾谷	ナカオタニ	304	涼松上	スズマツウエ	363	鳥瀬谷	トリブチタニ
158	打釜谷	ウチカマタニ	305	溝口谷	ミゾグチタニ	364	大丸向	オオマルムカイ
159	小平下	コダイラシタ	306	次郎迫	ジロウサコ	365	上谷瀬	カミタニセ
160	内之野	ウチノ	307	杉ヶ鼻	スギガハナ	366	須田木迫	スダキサコ
161	荒田	アラタ	308	火ノ平	ヒノヒラ	367	上之平	ウエノヒラ
162	尾立	オウタテ	309	大谷	オオタニ	368	松園上	マツノウエ
163	中之平	ナカノヒラ	310	仁田谷	ニタタニ	369	板木ヶ原	イタキガハラ
164	中平下	ナカヒラシタ	311	柞ヶ角	ハハツガカド	370	小原上	コバルウエ
165	佛瀨	ホトケブチ	312	次郎釜石	ジロウカマイシ	371	小原	コバル
166	片吹野下	カタフキノシタ	313	釜ヶ平	カマガヒラ	372	下畔	シモアゼ
167	片吹野	カタフキノ	314	釜ヶ平尻	カマガヒラジリ	373	松園	マツノ
168	小山	コヤマ	315	小野平	オノヒラ	374	門前	カドマエ
169	大平	オオヒラ	316	湯穴谷	ユアナタニ	375	門前上	カドマエウエ
170	諸麦	モロムギ	317	下川口	シモカワクチ	376	間谷	マタニ
171	立木	タチキ	318	管元	クダモト	377	善積寺	ゼンセキジ
			319	小丸	コマル	378	柿木原	カキキハラ
			320	小坂下	コサカシタ	379	田之野	タノ
			321					

モトヤッポ
7本別府 (249)

380	柿房	カキフサ	437	山神迫	ヤマガミサコ	1	大笹	オオササ	59	善ヶ後迫	ゼンガウシロヤ	117	セキ谷ノ上	セキタニノウエ	175	池ノ谷西迫	イケノタニシサ
381	猿之山	サルノヤマ	438	三本松谷	サンボンマツタニ	2	後藤谷	ゴトウタニ	60	下樟脳山	シモシヨウノヤマ	118	上床平	ウツコヒラ	176	加治屋ヶ迫	カジヤガサコ
382	越中山	コシナカヤマ	439	追籠平	オイカゴヒラ	3	西之原平	ニシノハラヒラ	61	樟脳山	シヨウノウヤマ	119	新兵衛谷	シンベエタニ	177	加治屋ヶ迫口	カシヤガサコチ
383	菖蒲谷	シヨウブタニ	440	三本松	サンボンマツ	4	西ノ原	ニシノハラ	62	善ヶ東	ゼンガヒガシ	120	松ヶ鼻	マツガバナ	178	加治屋田	カシヤテン
384	待来平	マツキヒラ	441	永加賀野	ナガカガノ	5	西之原口	ニシノハラクチ	63	谷角	タニカド	121	カチガ山ノ上	カチガヤマノウエ	179	大丸	オオマル
385	傳八越	ツタヤゴシ	442	尾立	オタテ	6	猿之内	サルノウチ	64	水ヶ迫	ミズガサコ	122	山ノ川	ヤマノカワ	180	小丸	コマル
386	下駄ヶ迫	ゲタガサコ	443	中平	ナカヒラ	7	白谷	シラタニ	65	水ヶ迫下	ミズガサコシタ	123	牧堀	マキホリ	181	山尻迫	ヤマジリサコ
387	勢田野	セイメンノ	444	切出尻	キリダシジリ	8	上井手之本	ウエイデノモト	66	樟脳山前	シヨウノウヤマエ	124	垂門比良	スイモンヒラ	182	西小丸	ニシコマル
388	金山谷	カネヤマタニ	445	上原	ウエハラ	9	下井手之本	シモイデノモト	67	西角切	ニシツノキリ	125	川原谷山之口	カワハラノニメタノマ	183	東郷作	トウゴウサク
389	竹山谷	タケヤマタニ	446	内山	ウチヤマ	10	野角	ノツノ	68	灰床ノ鼻	ハイドコノハナ	126	長谷比良	ナガタニヒラ	184	椎木田	シイキタ
390	野瀬戸	ノセト	447	栗野	クリノ	11	打出口	ウチデグチ	69	灰床ノ下	ハイドコノシモ	127	釜土坂	カマツチザカ	185	上木場	ウエコバ
391	野瀬戸頭	ノセトカシラ	448	里田	サトダ	12	後谷	ウシロタニ	70	冷水ヶ迫	ハイドコノヒラ	128	火ノ川原	ヒノカワハラ	186	平岩	ヒライワ
392	中尾筋	ナカオスジ	449	水元	ミズモト	13	飯牟田	メシムタ	71	谷畑	ヒヤミズガサコ	129	大瀬戸	オオセト	187	鍋山	ナベヤマ
393	八尻向	ハッジリムカイ	450	小月	オツキ	14	野角平	ノツノヒラ	72	蔵ヶ屋敷	クラガヤシキ	130	上床下り	ウツコクダリ	188	タデノ谷口	タデノタニグチ
394	牛ヶ太郎	ウシガタロウ	451	城南	シロミナミ	15	坂之上	サカノウエ	73	迎ノ平	ムカエノヒラ	131	長谷道下	ナガタニミチシタ	189	タデノ谷上	タデノタニウエ
395	八尻坂口	ハッジリサカグチ	452	里	サト	16	柳村	ヤナギムラ	74	東陣	ヒガシジン	132	池比良	イケヒラ	190	タデノ谷	タデノタニ
396	八尻坂	ハッジリサカ	453	新田	シンデン	17	馬庭	マニワ	75	陣ノ迫	ジンノサコ	133	池	イケ	191	タデノ谷中	タデノタニナカ
397	牛ヶ太郎頭	ウシガタロウカシラ	454	桐ノ前	キリノマエ	18	堀之内	ホリノウチ	76	久保田	クボタ	134	大迫	オオサコ	192	藤ノ尾	フジノオ
398	牛ヶ太郎谷	ウシガタロウタニ	455	桐原	キリハラ	19	善通ノ上	ゼンツウノウエ	77	西ノ陣	ニシノジン	135	大迫比良	オオサコヒラ	193	柿田	カキタ
399	八尻頭	ハッジリカシラ	456	杉ノ上	スギノウエ	20	東善通	ヒガシゼンツウ	78	樽角山	タルツノヤマ	136	立堀	タチホリ	194	瀧ノ上	タキノウエ
400	西屋敷平	ニシヤシキヒラ	457	田代前	ダシロマエ	21	西善通	ニシゼンツウ	79	早馬平	ハヤウマヒラ	137	大丸平	オオマルヒラ	195	日ノ口	ヒノクチ
401	東屋敷平	ヒガシヤシキヒラ	458	中福良	ナカフクラ	22	中洲	ナカス	80	垂門井川前	スイモンノカワマエ	138	草場比良	クサバヒラ	196	山ノ口	ヤマノクチ
402	新地山	ニシチヤマ	459	板木原	イタキハラ	23	本田	ホンダ	81	ラガ山	ラガヤマ	139	野下	ノシタ	197	橋木	タチバナキ
403	西米山	ニシコメヤマ	460	古倉	フルクラ	24	油免鼻	アブラメンハナ	82	後ノ迫	ウシロノサコ	140	村小路	ムラコウジ	198	迎比良	ムカエヒラ
404	米山	コメヤマ	461	三反田	サンタンダ	25	油免	アブラメン	83	彦ヶ下	ヒコガシタ	141	村ノ前	ムラノマエ	199	笠松	カサマツ
405	東米山	ヒガシコメヤマ	462	清木ヶ平	セイタガヒラ	26	菅ヶ原	スガガハラ	84	戸場原	ハシノバル	142	中島	ナカシマ	200	立山	タテヤマ
406	青木	アオキ	463	コアン	コアン	27	西芦茹	シシアカリ	85	別当屋敷	ベツウヤシキ	143	東前比良	ヒガシマエヒラ	201	世谷	セタニ
407	牛ヶ瀬戸	ウシガセト	464	青木ノ鼻	アオキノハナ	28	東芦茹	ヒガシアシガリ	86	鶴ノ山	ツルノヤマ	144	馬ツク子バ前	ウマツクコバマエ	202	鉾木場	ホココバ
408	水之谷	ミズノタニ				29	出口	デグチ	87	加治屋敷	カジヤシキ	145	馬ツク子バ	ウマツクコバ	203	奥山	オクヤマ
409	東土喰	ヒガシツチクレ				30	芦茹比良	アシガリヒラ	88	堂之本	ドウノモト	146	白クエ	シロクエ	204	小道下ノ口	コミチシタノクチ
410	土喰前	ツチクレマエ				31	外之牧	ソトノマキ	89	霞ノ原	カスミノハラ	147	西前比良	ニシマエヒラ	205	小道下ノ下	コミチシタノシタ
411	土喰	ツチクレ				32	宇土	ウト	90	流ノ谷	タレノクチ	148	山助	サンスケ	206	小道下ノ上	コミチシタノウエ
412	土喰上	ツチクレウエ				33	西外之牧	ニシソトノマキ	91	ゴアン	ナガレノタニ	149	入佐	イリサ	207	三本松	サンボンマツ
413	西土喰	ニシツチクレ				34	東外之牧	ヒガシソトノマキ	92	比良瀧	ヒラタキ	150	大谷ノ口	オオタニノクチ	208	田野之頭	タノノカシラ
414	北平	キタヒラ				35	八窪	ハックボ	93	北猪之久保	キタイノシクボ	151	祖父田	ソフデン	209	井手ノ平	イデノヒラ
415	金ヶ堀ノ上	カネガホリノウエ				36	南油免	ミナミアブラメン	94	猪ノ久保	ケンチョク	152	上床北西比良	ウツコキタニシヒラ	210	崩頭	クズレカシラ
416	金ヶ堀	カネガホリ				37	新田	シンデン	95	重ヶ	シゲケ	153	上床南西比良	ウツコキタニシヒラ	211	五反竿	ゴタンザオ
417	金ヶ堀頭	カネガホリカシラ				38	馬上田	ウマウエダ	96	青木ノ鼻	アオキノハナ	154	大戸谷	オオタニ	212	萬ヶ尻	マンガジリ
418	石坂	イシサカ				39	南菊地原	ミナミキクチハラ	97	東青木	ヒガシアオキ	155	手谷	テタニ	213	後ヒラ	ウシロヒラ
419	大小野	オオオノ				40	菊地ヶ原	キクチガハラ	98	青木	アオキ	156	大谷山	オオタニヤマ	214	六ツ辻	ムツツジ
420	木場太郎	コバタロウ				41	馬上田迫	ウマウエダサコ	99	青木	ヒガシアオキ	157	須田野木	スダノキ	215	石塔庵	セキトウアン
421	萩塚	ハギツカ				42	角切	ツノキリ	100	青木	アオキ	158	ナメタン	ナメタン	216	古木場	フルコバ
422	赤仁田	アカニタ				43	三百町	ミモモマチ	101	西青木	ニシアオキ	159	田ノ頭ノ下	タノカシラノシタ	217	鬼ノ穴	オノノアナ
423	下先問ノ谷	シタサキモンノタニ				44	北菊地原	キタキクチハラ	102	喜左衛門屋敷	キザエモンノヤシ	160	田ノ頭ノ上	タノカシラノウエ	218	新ヶ月	アラガヤマ
424	先問ノ谷	サキモンノタニ				45	小鹿倉	コジカクラ	103	堅チヨク西比良	ケンチヨクニシヒラ	161	堂高	ドウタカ	219	秋ヶ月	アキツキ
425	問ノ谷	モンノタニ				46	小堀	コボリ	104	堅直岡北比良	ケンチヨクオカサヒラ	162	芦坂ノ上	アシサカノウエ	220	蟻尻	ニナジリ
426	宇作	ウサク				47	小堀倉枝迫	コジカクラエダサコ	105	牛ガ瀬戸	ウシガセト	163	下ノ平	シモノヒラ	221	下原	シモハラ
427	赤仁田尻	アカニタジリ				48	三百町迫	ミモモマチサコ	106	ミチンタ	ミチンタ	164	餅山平	モチヤマヒラ	222	西原	ニシハラ
428	石頭	イシハラカシラ				49	下小堀倉	シモコジカクラ	107	猪ノ角頭	イノシノカドカシラ	165	栗木山	クリキヤマ	223	小六ツ辻	コムツツジ
429	小武士山	コバシヤマ				50	外戸之口比良	ソトノクチヒラ	108	猪ノ角	イノシノカド	166	上ノ山	ウエノヤマ	224	三郎別当	サブロウベツトウ
430	小河路	コカワジ				51	三百町北迫	ミモモマチサコ	109	小塚	コヅカ	167	岩下	イワシタ	225	野首	ノクビ
431	下小河路	シモコカワジ				52	三百町比良	ミモモマチヒラ	110	小塚ノ岡	コヅカノオカ	168	餅栗迫	モチクリサコ	226	迫ノ上	サコノウエ
432	下堀	シモホリ				53	次郎ヶ角	ジロウガツノ	111	小塚西比良	コヅカニシヒラ	169	種ノ口	ヒノクチ	227	西迫	ニシサコ
433	間伏谷	マフシタニ				54	樟脳山迫	シヨウノウヤマサコ	112	阿野山尻	アノヤマジリ	170	古瀬戸坂ノ下	フルセトサカノシタ	228	大窪	オウクボ
434	奥木場	オクコバ				55	次郎ヶ角平	ジロウガツノヒラ	113	阿野山	アノヤマ	171	池ノ谷ノ口	イケノタニノクチ	229	二重	フタエ
435	石原堀	イシハラホリ				56	中須ヶ原	ナカスガハラ	114	池ノ谷	イケノタニ	172	池ノ谷	イケノタニ	230	川崎	カワサキ
436	穴仁田	アナニタ				57	南山ノ口	ミナミヤマノクチ	115	池ノ谷迫	イケノタニサコ	173	勝目ノ上	カツメノウエ	231	墓ノ平	ハカノヒラ
						58			116			174			232		

タカダ
8. 高田(238)

233	中木場	ナカコバ	1	彼岸田	ヒガンデン	59	角ノ上	カドノウエ
234	西小原	ニシコバル	2	逆瀬川前	サカセガワマエ	60	下町堀	シタマチボリ
235	草場	クサバ	3	下牧田畑	シタマキタハタ	61	源七堀	ゲンシチボリ
236	桑木ヶ平	クワキガヒラ	4	牧田山	マキタヤマ	62	有蘭堀	アリゾノボリ
237	谷山比良	タニヤマヒラ	5	土取	ツチトリ	63	上町堀	ウエマチボリ
238	亀甲山	カメコウヤマ	6	町尻	マチジリ	64	鷹ノ角	タカノカド
239	亀甲	カメコウ	7	新田	シンデン	65	長堀	ナガボリ
240	西論山	ニシロンサン	8	城ノ下	ジョウノシタ	66	新堀	シンボリ
241	尾呂作	オロサク	9	大橋ノ口	オオハシノクチ	67	金左工門迫	キンザエモンヤコ
242	論山	ロンサン	10	砂田出口	スナダデグチ	68	屋敷之平	ヤシキノヒラ
243	ミチンタ比良	ミチンタヒラ	11	橋掛	ハシカケ	69	小堀	コボリ
244	檜ノ木山	ヒノキノキヤマ	12	砂田	スナダ	70	舟ヶ角	フナガカド
245	檜ノ木山	ヒノキノキヤマ	13	牧角	マクスキ	71	角之迫	カドノサコ
246	大久保ノ上	オオクボノウエ	14	小中禮	コチュウレイ	72	東古瀬戸	ヒガシフルセト
247	下平	シモヒラ	15	小倉谷	オグラタニ	73	立古瀬戸	タチフルセト
248	前野	マエノ	16	中礼	チュウレイ	74	南柘神	ミナミハシカミ
249	谷門	タニモン	17	桐木	キリキ	75	西柘神	ニシハシカミ
			18	井料	イリョウ	76	北柘神	キタハシカミ
			19	三角	ミスミ	77	元芝	モトシバ
			20	寺田	テラダ	78	元ヲロ	モトヲロ
			21	有蘭	アリゾノ	79	キワダガ迫	キワダガサコ
			22	南ノ丸	ミナミノマル	80	平渡瀬	ヒラワタセ
			23	樋之下	トイノシタ	81	馬込	マゴメ
			24	池宇都	イケウト	82	南平渡瀬	ミナミヒラワタセ
			25	中池宇都	ナカイケウト	83	滝ノ上古瀬戸	タキノウエフルセト
			26	頭池宇都	カシライケウト	84	湧沢津	ワキサワツ
			27	六反田	ロクタンダ	85	外戸ノ上	ゲドノウエ
			28	堀内	ホリウチ	86	七曲り	ナナマガリ
			29	山下	ハシキハラ	87	柘木原	クウバイボリ
			30	北丸	キタマル	88	休兵衛堀	キウヘイボリ
			31	久保田	クボタ	89	南中野平	ミナミナカノヒラ
			32	飯田	カリダ	90	高原ヶ迫	タカハラガサコ
			33	高田玉	タカタダマ	91	中ノ平	ナカノヒラ
			34	池尻	イケジリ	92	池鼻	イケノヒ
			35	五月田	ゴガツデン	93	鍋ヶ迫	ナベガサコ
			36	サルコロシ	サルコロシ	94	イチノ木ヶ迫	イチノキガサコ
			37	打越	ウチゴシ	95	木屋平	コヤヒラ
			38	川ノ口	カワノクチ	96	北鉄山	キタテツヤマ
			39	修理田	シュウリデン	97	南鉄山	ミナミテツヤマ
			40	五反田	ゴタンダ	98	下長谷	シモナガタニ
			41	宇都	ウト	99	上長谷	ウエナガタニ
			42	中園	ナカソノ	100	へゴ尾	ヘゴオ
			43	畑田	ハタダ	101	長谷	ナガタニ
			44	角	カド	102	東長谷	ヒガシナガタニ
			45	高付	タカツキ	103	東谷	ヒガシタニ
			46	寺下	テラシタ	104	頭割	カシラワリ
			47	元日田	モトヒタ	105	里次郎ヶ角	サトジロウカド
			48	西山寺	ニシヤマデラ	106	鉄山頭	テツヤマカシラ
			49	本庄屋敷	ホンジョウヤヤシキ	107	ハエノキ平	ハエノキヒラ
			50	原田	ハラダ	108	船ヶ迫	フネガサコ
			51	川久保	カワクボ	109	二重瀧	ニジュウタキ
			52	坂下	サカシタ	110	鉄山	テツヤマ
			53	枯松	カレマツ	111	川直し	カワナオン
			54	中水流	ナカツル	112	ケドノ口	ケドノクチ
			55	下庭坂	シモノワサカ	113	南瀬越	ミナミカワツゴシ
			56	上庭坂	ウエニワサカ	114	瀬越	カワウソゴシ
			57	藤野	フジノ	115	外ノ牧	ソノマキ
			58	寺ノ上	テラノウエ	116	杉ヶ迫	スギガサコ

117	空ノ谷	ソラノタニ	175	穴川	アナカワ	233	下道明	シモミチアケ
118	瀬越入口	カワウソゴシノリグチ	176	豆漬	マメヅケ	234	頭道明	カシラミチアケ
119	ニタスリ松	ニタスリマツ	177	湯穴口	ユアナクチ	235	堂山	ドウヤマ
120	城ヶ宇都	ジョウガウト	178	鬼ノ穴上	オニノアナウエ	236	堂山迫	ドウヤマサコ
121	内ノ牧	ウチノマキ	179	田水口	タミズグチ	237	下大笹	シモオオササ
122	東内ノ牧	ヒガシウチノマキ	180	船ヶ尾	フネガオ	238	頭大笹	カシラオオササ
123	東外牧	ヒガシソトマキ	181	中船ヶ尾	ナカフネガオ			
124	後迫	ウシロサコ	182	頭船ヶ尾	カシラフネガオ			
125	北鎌ゲタ	キタカマゲタ	183	一番悪谷	イチバンワルタニ			
126	鎌ゲタ	カマゲタ	184	一番悪谷	イチバンワルタニ			
127	鎌ゲタ入口	カマゲタイリグチ	185	二番悪谷	ニバンワルタニ			
128	北後迫	キタウシロサコ	186	三番悪谷	サンバンワルタニ			
129	東鎌ゲタ	ヒガシカマゲタ	187	四番悪谷	ヨンバンワルタニ			
130	鎌ゲタ下	カマゲタシタ	188	五番悪谷	ゴバンワルタニ			
131	白檜	シラカシ	189	六番悪谷	ロクバンワルタニ			
132	上白檜	ウエシラカシ	190	里池ノ谷	サトイケノタニ			
133	中白檜	ナカシラカシ	191	西ノ谷	ニシノタニ			
134	下白檜	シモシラカシ	192	壹番西ノ谷	イチバンニシノタニ			
135	本白檜	モトシラカシ	193	水之尾	ミズノオ			
136	東ヶ宇都	ヒガシガウト	194	二番西ノ谷	ニバンニシノタニ			
137	サダガ迫	サダガサコ	195	三番西ノ谷	サンバンニシノタニ			
138	西ヶ宇都	ニシガウト	196	西ノ谷四番	ニシノタニヨシバン			
139	重永野坂下	シゲナガノサカシタ	197	西ノ谷五番	ニシノタニゴバン			
140	瀧ヶ瀬戸	タキガセト	198	六番西ノ谷	ロクバンニシノタニ			
141	又メ谷	ヌメタニ	199	中道ノ尾	ナカミチノオ			
142	東瀧ヶ瀬戸	ヒガシタキガセト	200	頭道ノ尾	カシラミチノオ			
143	野下尻	ノシタジリ	201	七番西ノ谷	ナナバンニシノタニ			
144	野下入口	ノシタイリグチ	202	頭ノ角	カシラノカド			
145	里野下	サトノシタ	203	米ヶ野	コメガノ			
146	重永野	シゲナガノ	204	中野角	ナカノカド			
147	山鍋上	ヤマナベウエ	205	芋ヶ迫	イモガサコ			
148	柘木ヶ宇都上	ハシノキガウトウエ	206	後西ノ原	ウシロニシノナル			
149	南重永野	ミナミシゲナガノ	207	河内ヶ谷	カワウチガタニ			
150	山鍋	ヤマナベ	208	下野角	シモノカド			
151	四角目	シカクメ	209	一ツ内	ヒトツウチ			
152	谷長木	タニナガキ	210	中明賀谷	ナカアケガタニ			
153	柘木ヶ宇都	ハシノキガウト	211	頭明賀谷	カシラアケガタニ			
154	弓場山	ユミバヤマ	212	楠ハエ	クスハエ			
155	クリシマ	クリシマ	213	下明賀谷	シモアケガタニ			
156	井手ノ原	イデノハラ	214	楠マケ谷	クスマケタニ			
157	イチガハエ迫	イチガハエサコ	215	頭通山	カシラトオリヤマ			
158	鹿持越	カジコシ	216	下道山	シタミチヤマ			
159	イカタノ迫	イカタノサコ	217	山之口	ヤマノクチ			
160	井手ノ比良	イデノヒラ	218	ヤシカ迫	ヤシカサコ			
161	兵衛ヶ迫	ヘイベイガサコ	219	トスノ平	トスノヒラ			
162	山仁田入口	ヤマニタイリグチ	220	頭小倉谷	カシラオグラタニ			
163	山仁田	ヤマニタ	221	中小倉谷	ナカオグラタニ			
164	西山仁田	ニシヤマニタ	222	城之平	ジョウノヒラ			
165	壹番山仁田	イチバンヤマニタ	223	諏訪ノ平	スワノヒラ			
166	貳番山仁田	ニバンヤマニタ	224	丸保	マルボ			
167	参番山仁田	サンバンヤマニタ	225	時久保	トキクボ			
168	四番山仁田	ヨンバンヤマニタ	226	金割	カナワリ			
169	後山仁田	ウシロヤマニタ	227	水クレ	ミズクレ			
170	頭兵衛ヶ迫	カシラヘイベイガサコ	228	本金割	ホンカナワリ			
171	井手ノ上平	イデノウエヒラ	229	小迫	オサコ			
172	糸目ヶ尾	イトメガオ	230	前迫	マエサコ			
173	長迫	ナガサコ	231	石坂	イシザカ			
174	樋之迫	ヒノサコ	232	金棒作	カナボウサク			

9. 宮(133)

1	手斧瀧	テオノタキ	159	後藤谷迫	ゴトウタニサコ	117	山下	ヤマシタ
2	猿山	サルヤマ	160	達山	タツヤマ	118	元日田	モトヒタ
3	猿山下	サルヤマシタ	161	後藤谷下川原	ゴトウタニサコ	119	焼山	ヤッキヤマ
4	長ヒツ	ナガヒツ	162	榎木小迫	ヒイラキコサコ	120	上焼山	ウエヤッキヤマ
5	手斧瀧下	テオノタキシタ	163	榎木中尾	ヒイラギナカオ	121	七麦	ナナムギ
6	上中堀	ウエナカボリ	164	榎木中尾平	ヒイラギアサヒラ	122	九日田	ココノヒタ
7	原信	ゲンシン	165	スイガ瀬戸	スイガセト	123	迫田	サコダ
8	下中堀	シモナカボリ	166	下金割	シモカナワリ	124	二重	ニンジュウ
9	中堀	ナカボリ	167	金割	カナワリ	125	森ノ上	モリノウエ
10	下長ヒツ	シモナガヒツ	168	金割迫	カナワリサコ	126	園田ノ平	ソノダノヒラ
11	アマロケ尾	アマクチガオ	169	下横尾	シモヨコオ	127	霧島	イシトビグチ
12	小中尾	コナカオ	170	横尾前比良	ヨコオマエヒラ	128	石飛ノ上	イシトビノウエ
13	並松	ナミマツ	171	横尾北比良	ヨコオキタヒラ	129	鳩峯	ハトミネ
14	柴立	シバタテ	172	手斧落	テオノオトシ	130	八久保	ハチクボ
15	枿場	ハシバ	173	猿内	サルウチ	131	寺下	テラシタ
16	落ノ上	オトシノウエ	174	猿内迫	サルウチサコ	132	馬込	マゴメ
17	中尾	ナカオ	175	枿山	ハシヤマ	133		
18	下窟	シモホキ	176	星ヶ久保	ホシガクボ			
19	坂之上	サカノウエ	177	横尾下	ヨコオシタ			
20	刈川堀	カリカワボリ	178	黒岩	クロイワ			
21	横橋	ヨコハシ	179	時久保	トキクボ			
22	長興寺堀	チヨウコウジボリ	180	城ヶ谷	ジョウガタニ			
23	妙現堀	ミョウゲンボリ	181	遠目ヶ尾	トオメガオ			
24	寺之上	テラノウエ	182	中礼山	チュウレイヤマ			
25	大聖寺迫	タイショウジサコ	183	池ノ比良	イケノヒラ			
26	湯穴口	ユアナクチ	184	東竹尾	ヒガシタケオ			
27	南迫	ミナミサコ	185	下馬	ゲバ			
28	路山	ロザン	186	下馬平	ゲバヒラ			
29	樟脳山	ショウノウヤマ	187	下馬迫	ゲバサコ			
30	樟脳山口	ショウノウ	188	ホレン堀	ホレンボリ			
31	大谷	オオタニ	189	松尾北迫	マツオキタサコ			
32	チケン尾	チケンオ	190	西竹尾	ニシタケオ			
33	神明田	ジミダ	191	松尾迫	マツオサコ			
34	加久藤迫	カクトウサコ	192	松尾西迫	マツオニシサコ			
35	片フタ	カタフタ	193	松尾平	マツオデラ			
36	一山跡	イチザンアト	194	池ノ谷	イケノタニ			
37	中木場	ナカコバ	195	中礼ヶ迫	チュウレイガサコ			
38	下古木場	シモフルコバ	196	中礼	チュウレイ			
39	南古木場	ミナミフルコバ	197	別当ヶ迫	ベツドウガサコ			
40	淡島山	アワシヤマ	198	鳥越	トリゴエ			
41	上古木場	カミフルコバ	199	飯倉山	イイクラヤマ			
42	柳ヶ谷	ヤナギガタニ	100	西屋敷	ニシヤシキ			
43	猿山迫	サルヤマサコ	101	山神園	ヤマガミノ			
44	猿山峠	サルヤマトウゲ	102	中島	ナカシマ			
45	虫長尾	ムシナガオ	103	川寄田	カワサキダ			
46	瀬戸	セト	104	道祖神	ドウゾジン			
47	明ヶ谷	ミョウガタニ	105	薬師免	ヤクシメン			
48	長山	ナガヤマ	106	尾込新田	オゴモリシンデン			
49	納四ヶ大筋	ノシガオオスジ	107	御田	オンデン			
50	菜葉ヶ迫	ナハツガサコ	108	桑木迫	クワキサコ			
51	長山迫	ナガヤマサコ	109	咲花園	サキハナソノ			
52	加久藤ノ上	カクトウノウエ	110	月照寺	ゲツショウジ			
53	上横尾	カミヨコオ	111	寺ノ下	テラノシタ			
54	中横尾	ナカヨコオ	112	牧之園	マキノソノ			
55	高塚腰	タカツカコシ	113	外屋敷	ソトヤシキ			
56	高塚	タカツカ	114	久保ノ神	クボノカミ			
57	大柵ヶ迫	オオネガサコ	115	宮之馬場	ミヤノババ			
58	ゴツ谷川原	ゴツタニカワハラ	116	塔之峯	トウノミネ			

10. 小野(63)

1	山ノ川	ヤマノカワ	59	上床	ウワトコ	60	二反尾鼻	ニタオバナ
2	上橋ノ口	カミハシノクチ	60	二反尾	ニタオ	61	上床迫	ウワトコザコ
3	諏訪免	スワメン	61	本寺	モトデラ	62		
4	下橋ノ口	シモハシノクチ	62			63		
5	小野町	オノマチ						
6	新田	シンデン						
7	久保田	クボタ						
8	袴	ハカマ						
9	塔之峯	トウノミネ						
10	川之口	カワノクチ						
11	洗出	アライダシ						
12	拂川	ハライカワ						
13	松山	マツヤマ						
14	砂入	スナイリ						
15	塩入	シオイリ						
16	長崎原	ナガサキバル						
17	園田	ソノダ						
18	南	ミナミ						
19	加覧山	ガラシヤマ						
20	外園	ホカゾノ						
21	谷川	タニガワ						
22	東ノ園	ヒガシノソノ						
23	谷口	タニグチ						
24	曾徳	ソトク						
25	中島ノ上	ナカシマノウエ						
26	山下	ヤマシタ						
27	北比良	キタヒラ						
28	竹山ノ上	タケヤマノウエ						
29	後ノ比良	ウシロノヒラ						
30	前比良	マエヒラ						
31	丸尾	マルオ						
32	草場	クサバ						
33	荒ヶ迫	アラガサコ						
34	荒尾	アラオ						
35	荒ヶ迫口	アラガサコグチ						
36	大坂	ダイザカ						
37	山神	ヤマシカン						
38	黒木山	クロキヤマ						
39	山神迫	ヤマシカンザコ						
40	山神前比良	ヤマシカンマエヒラ						
41	石切迫	イシキリザコ						
42	石場	イシバ						
43	朝日比良	アサヒヒラ						
44	華ヶ峯	ハナガミネ						
45	夫婦岩	メオトイワ						
46	大迫丸尾	オオサコマルオ						
47	枯木ヶ尾	カレキガオ						
48	枯木ヶ迫	カレキガサコ						
49	大迫	オオサコ						
50	谷川比良	タニガワヒラ						
51	瀬戸ノ口	セトノクチ						
52	岡前比良	オカマエヒラ						
53	高小野原	タカオノバル						
54	井手比良	イデヒラ						
55	中堀	ナカボリ						
56	枿場	ハシバ						
57	枿場比良	ハシバヒラ						
58	論山	ロンザン						

11. 今田(43)

1	野間口	ノマグチ						
2	本田	ホンデン						
3	南田	ナンデン						
4	砂入	スナイリ						
5	山下	ヤマシタ						
6	明屋敷	アケヤシキ						
7	七枝	ナナエダ						
8	下七枝	シモナナエダ						
9	加治屋田	カジヤデン						
10	井尻	イジリ						
11	五反田	ゴタンダ						
12	谷川	タニガワ						
13	宇都	ウト						
14	大迫口	オオサコグチ						
15	大迫	オオサコ						
16	大迫飛良	オオサコヒラ						
17	飛良山	ヒラヤマ						
18	中岡	ナカオカ						
19	持留飛良	モチドメヒラ						
20	鳥越	トリゴエ						
21	芝原ノ上	シバハラノウエ						
22	芝原	サコノウエ						
23	芝原	シバハラ						
24	鞆ノ平	トモノヒラ						
25	唐地山	カラチヤマ						
26	白迫	シラサコ						
27	白坂	シラサカ						
28	寺ノ上	テラノウエ						
29	瀬戸ノ上	セトノウエ						
30	瀬戸ノ口	セトノクチ						
31	ホウキノ上	ホウキノウエ						
32	北ノ迫	キタノサコ						
33	中尾	ナカオ						
34	古道	フルミチ						
35	古道ノ上	フルミチノウエ						
36	長割	ナガワリ						
37	中尾ノ上	ナカオノウエ						
38	長割ノ上	ナガワリノウエ						
39	カラチ山ノ上	カラチヤマノウエ						
40	長迫	ナガサコ						
41	長迫ノ上	ナガサコノウエ						
42	荒尾比良	アラオヒラ						
43	極楽比良	ゴクラクヒラ						

12. 両添 (33)

13. 野崎 (178)

1	宮田	ミヤタ
2	前田	マエダ
3	中間元	ナカマモト
4	小田	オダ
5	菊川	カリカワ
6	中川原	ナカガワハラ
7	矢掛松	ヤカケマツ
8	榎木田	エノキダ
9	前川原	マエカワハラ
10	八枝	ハチエダ
11	城之下	ジョウノシタ
12	大正田	ダイショウデン
13	井手元	イデモト
14	杉保	スキタモツ
15	寺下	テラシタ
16	二月田	ニガツダ
17	堂ノ元	ドウノモト
18	櫛引	クシヒキ
19	比良	ヒラ
20	山添	ヤマソエ
21	谷口	タニグチ
22	大迫	オオサコ
23	上之原	ウエノハラ
24	小堀	コボリ
25	貝カラ崎	カイカラザキ
26	越迫	コシサコ
27	丸尾	マルオ
28	桃木比良	モモキヒラ
29	白餅田	シロモチダ
30	字割	アザワリ
31	千代増	チヨマス
32	小丸	コマル
33	石井手	イシイデ

1	川崎堀	カワサキボリ
2	栢場	ハシバ
3	七曲	ナナマガリ
4	徳善ヶ比良	ノリヨシガヒラ
5	徳善ノ口	ノリヨシノクチ
6	徳善ヶ宇都	ノリヨシガウト
7	堂之比良	ドウノヒラ
8	上大丸	カミオオマル
9	西越ヶ迫	ニシヨシガサコ
10	落ノ下	オチノシタ
11	中尾山	ナカオヤマ
12	落ヶ迫	オチガサコ
13	中越ヶ迫	ナカヨシガサコ
14	東越ヶ迫	ヒガシヨシガサコ
15	瀧之元	タキノモト
16	小鶴尾ノ下	コヅルオノシタ
17	前比良	マエヒラ
18	太々良口	タタラヨシグチ
19	豆漬	マメヅケ
20	鶴之頭	ツルノカシラ
21	岩坂	イワザカ
22	八久保山	ハチクボヤマ
23	曾辺引	ソベビキ
24	宇都迫	ウトサコ
25	深谷	フカタニ
26	崎山	サキヤマ
27	門木	ガドキ
28	鳥越	トリゴエ
29	又六	マタロク
30	間伏谷	マフシタニ
31	半助平	ハンスケヒラ
32	西岩崎	ニシイワサキ
33	中岩崎	ナカイワサキ
34	東岩崎	ヒガシイワサキ
35	西峯ヶ比良	ニシミネガヒラ
36	東峯ヶ比良	ヒガシミネガヒラ
37	池比良	イケヒラ
38	岩崎山	イワサキヤマ
39	西太郎ヶ迫	ニシタロウガサコ
40	東太郎ヶ迫	ヒガシタロウガサコ
41	下浦	シモウラ
42	藤ヶ山	フジガヤマ
43	西吉野木場	ニシヨシノコバ
44	高辺野下	タカベノシタ
45	下浦山	シモウラヤマ
46	嶽木場	タケコバ
47	吉野木場山	ヨシノコバヤマ
48	松ヶ谷	マツガタニ
49	東吉野木場	ヒガシヨシノコバ
50	二反尾	ニタオ
51	西大谷	ニシオオタニ
52	東大谷	ヒガシオオタニ
53	ツトガ迫	ツトガサコ
54	安之元	ヤスノモト
55	前波後	マエバウシロ
56	古郷尾	コキョウオ
57	大比良	オオヒラ
58	後箱	ウシロバコ

59	立乃木	タチノギ
60	鎌治山	カマジヤマ
61	中尾筋	ナカオスジ
62	木屋尾ノ牟田	キヤオノムタ
63	木屋尾北迫	キヤオキタサコ
64	木屋尾南迫	キヤオミナサコ
65	東山	ヒガシヤマ
66	木屋尾東迫	キヤオヒガサコ
67	高付	タカツキ
68	北島内	キタシマウチ
69	瀬戸之口	セトノクチ
70	南島内	ミナシマウチ
71	比良	ヒラ
72	砂取	スナトリ
73	竹下	タケシタ
74	前原	マエハラ
75	東嶺引	ヒガシクシヒキ
76	西嶺引	ニシクシヒキ
77	八幡嶺	ハチマンリョウ
78	沖之田	オキノタ
79	馬場田	ババタ
80	柳田	ヤナギダ
81	八反田	ハツタンダ
82	若宮田	ワカミヤタ
83	大坪田	オオツボタ
84	中井手	ナカイデ
85	蔵元	クラモト
86	栢木北	ハシノキ
87	栢木北	ハシノキキタ
88	奥畑	オクハタ
89	五反田	ゴタンダ
90	乙木	オツキ
91	古屋敷	フルヤシキ
92	中須	ナカス
93	馬場	ババ
94	加賀山	ガラヤマ
95	塚之元	ツカノモト
96	全勝時庵	ゼンショウジ
97	吉壽庵	キチジュアン
98	松尾	マツオ
99	川崎	カワサキ
100	北原	キタハラ
101	東城	ヒガシシロ
102	提ノ角	テイノカド
103	堂山	ドウヤマ
104	古川	フルカワ
105	龍泉寺	リウセンジ
106	石井手	イシイデ
107	後泉寺比良	コウセンジヒラ
108	郷ノ口	サトノクチ
109	上之園	ウエノソノ
110	四反田	シタンダ
111	明屋敷	アカヤシキ
112	荒殿前	アラトノマエ
113	迎川原	ムカエカワハラ
114	後原	ウシロハラ
115	外桑水流	ソトクワズル
116	新田	シンデン

14. 清水 (226)

117	柳田川原	ヤナギダカワハラ
118	山中田	ヤマナカタ
119	土ヶ尾迫	ドケンサコ
120	金久曾迫	カナクソサコ
121	佐野前	サノマエ
122	佐野前中平	サノマエナカヒラ
123	尾ヶ山迫	オガヤマサコ
124	瀧ノ山	タキノヤマ
125	瀧ノ山東	タキノヤマヒガシ
126	二床	ニトコ
127	古木場迫	フルコバサコ
128	狩集り	カリアツマリ
129	長尾渡口	ナガオワタリグチ
130	岩塚	イワツカ
131	長尾桂ヶ谷	ナガオカツラガタニ
132	中野比良	ナカノヒラ
133	長尾屋敷平	ナガオヤシキデラ
134	中野迫	ナカノサコ
135	丸山	マルヤマ
136	ホメ杉山	ホメスギヤマ
137	西赤木	ニシアカギ
138	赤木	アカギ
139	西八瀬尾	ニシヤセオ
140	八瀬尾	ヤセオ
141	南八瀬尾	ミナヤセオ
142	黒岩	クロイワ
143	八瀬尾東新田	ヤセオヒガシシンデン
144	瀧坪	タキツボ
145	八瀬尾西新田	ヤセオニシシンデン
146	スゲノ元	スゲノモト
147	新田上	シンデンウエ
148	堀内	ホリウチ
149	桶原平	クハラデラ
150	小中尾	コナカオ
151	木原殿木西	キハラドノコニシ
152	木原殿木東	キハラドノコヒガシ
153	小岩塚	コイワヅカ
154	陣ノ瀬戸	ジンノセト
155	陣ノ前	ジンノマエ
156	杉ノ崎	スギノサキ
157	陣ノ東	ジンノヒガシ
158	陣ノ後	ジンノウシロ
159	砂迫	スナサコ
160	小松ヶ尾前	コマツガオマエ
161	下り山	サガリヤマ
162	上木場	カミコバ
163	佐平屋地	サヒラヤチ
164	小松ヶ尾	コマツガオ
165	遠呂平	エンロビラ
166	鏡石	カガミシ
167	中野西	ナカノニシ
168	中野東	ナカノヒガシ
169	今木場	イマコバ
170	駒返り	コマカエリ
171	寺前	テラマエ
172	西有村	ニシアリムラ
173	六反田	ロクタンダ
174	寄山	サキヤマ
175	石之元	イシノモト
176	陣平	ジンヒラ
177	日カゲノ山	ヒカゲノヤマ
178	大谷	オオタニ

1	中比良	ナカヒラ
2	山野	ヤマノ
3	山野免	ヤマノメン
4	古野迫	フルノサコ
5	馬場ノ上	ババノウエ
6	古野	フルノ
7	水元	ミズモト
8	堂ノ上	ドウノウエ
9	小堀	コボリ
10	中堀	ナカボリ
11	横堀ノ下	ヨコボリノシタ
12	立園ノ上	タチゾノウエ
13	小原	オハラ
14	頼娃殿堀	エイドノボリ
15	南堀	ミナボリ
16	榎堀	サカキボリ
17	三角堀	サンカクボリ
18	長迫	ナガサコ
19	下馬込	シモマゴメ
20	上馬込	カミマゴメ
21	蔵堀	クラボリ
22	並木	ナミキ
23	大堀	オオボリ
24	蔵堀免	クラボリメン
25	中大堀	ナカオボリ
26	下小川添	シモオガワソエ
27	小川添	オガワソエ
28	佛法迫	フツボウザコ
29	横道	ヨコミチ
30	佛法ヶ平	フツボウガヒラ
31	下猿掛	シモサルカケ
32	猿掛	サルカケ
33	中之平	ナカノヒラ
34	青折	アオリ
35	内青折	ウチアオリ
36	下川前	シモカワマエ
37	夫婦池	メオトイケ
38	弥平屋地	ヤヒラヤチ
39	深堀	フカボリ
40	薬師川原	ヤクシカワハラ
41	薬師ノ下	ヤクシノシタ
42	桜元	サクラモト
43	小栗栖	コグルス
44	水元前	ミズモトマエ
45	寺田	テラダ
46	本加賀	モトガラシ
47	クルス	クルス
48	眼流川	ガンリウカワ
49	南屋敷	ミナヤシキ
50	桜田	サクラダ
51	上園	ウエノソノ
52	加治屋	カジャ
53	三月田	ミツキタ
54	原田	ハラダ
55	川原田	カワハラダ
56	北原	キタバル
57	寺前	テラマエ
58	明神	ミョウジン

59	出水ヶ迫	デミズガサコ
60	西ヶ迫	ニシガハサマ
61	宇都ノ迫	ウトノサコ
62	寺ノ跡	テラノアト
63	井手下	イデシタ
64	小俣	コマタ
65	小谷	コタニ
66	大谷	オオタニ
67	花園	ハナソノ
68	宮田	ミヤタ
69	榎木丸	エノキマル
70	湯ノ尻	ユノジリ
71	岩屋園	イワヤソノ
72	白山坂	シロヤマサカ
73	東ヶ迫	ヒガシガサコ
74	大迫	オオサコ
75	大迫川原	オオサコカワハラ
76	八久保	ハチクボ
77	小平	コダイラ
78	長木平	ナガキビラ
79	片平山	カタヒラヤマ
80	馬渡	マワタリ
81	瀧ノ上	タキノウエ
82	火込	ヒゴミ
83	馬渡平	マワタリビラ
84	尾立	オダチ
85	馬渡ノ上	マワタリノウエ
86	風久保	カゼクボ
87	集	アツマリ
88	黒葛木ヶ迫	クロカズラキガサコ
89	鎮守免迫	チンジュメンサコ
90	カケイ迫	カケイサコ
91	本場	コバ
92	上原	ウエハラ
93	上枝迫	ウエエダサコ
94	枝迫下	エダサコシタ
95	雨包	アメツツミ
96	西野平	ニシノヒラ
97	狩集	カリアツマリ
98	上ノ段	ウエノダン
99	崩比良	クズレヒラ
100	シタクズレヒラ	シタクズレヒラ
101	枯木ヶ迫	カレキガサコ
102	古屋敷	フルヤシキ
103	横尾	ヨコオ
104	南野元	ミナミノモト
105	ニツ石	フタツイシ
106	本屋敷	ホンヤシキ
107	木場田	コバンタ
108	木場田後	コバンタウシロ
109	力石ヶ原	チカライシガハラ
110	木場馬込	コバマゴメ
111	海周軒	カイシュウケン
112	堂角迫	ドウカクサコ
113	下タ集	シモタアツマリ
114	伊勢殿木場	イセドノコバ
115	上ノ田	カミノタ
116	井手上	イデウエ

コウドノ
15. 神殿 (226)

117	下悪谷	シモワルタニ	174	外戸ノ口	ケドノクチ	1	横堀	ヨコボリ
118	上悪谷	カミワルタニ	175	シナシ	シナシ	2	横堀西	ヨコボリニシ
119	悪谷比良	ワルタニビラ	176	堂之尾	ドウノオ	3	古殿堀	フルトノボリ
120	中悪谷	ナカワルタニ	177	山伏墓	ヤマブシハカ	4	出口	デグチ
121	上田代	カミタシロ	178	単堂	ネズミドウ	5	中須	ナカス
122	佛谷	ブツタイ	179	膳棚	ゼンダナ	6	今別府	イマベツ
123	佐野	サノ	180	一ツ葉	ヒトツバ	7	上榎	ウエサカキ
124	上佛谷	カミブツタイ	181	下一ツ葉	シモヒトツバ	8	末之元	キノモト
125	佐野前	サノマエ	182	阿弥陀ノ迫	アマダノサコ	9	桶久保	クスクボ
126	脇田	ワキタ	183	スノ小橋	スノコバシ	10	大竿	オオサオ
127	上脇田	カミワキタ	184	当トヤチ	アタリトヤチ	11	内茶折	ウッチャオリ
128	下小原	シモコバル	185	下横道	シタヨコミチ	12	内茶堀ノ上	ウッチャホリ
129	小之口	コノクチ	186	又メガ比良	ヌメガヒラ	13	池ノ目	イケノメ
130	永山迫下	ナガヤマサコシ	187	ツ山	ツヤマ	14	折戸平	オリヒラ
131	小原比良	コバルヒラ	188	上熊ヶ宇都	カミクマガウト	15	木之元上平	キノモトウエヒラ
132	境松	サカイマツ	189	後川添	ウシロカワソエ	16	鳴野池平	ナルノイケヒラ
133	長山迫上	ナガヤマサコウエ	190	下熊ヶ宇都	シモクマガウト	17	小道	コミチ
134	瀧ノ山	タキノヤマ	191	大角	オオカド	18	堂園堀	ドウゾノボリ
135	伊牟田迫	イムタサコ	192	朝鹿倉	アサカクラ	19	下長迫	シモナガサコ
136	小田ノ上	オダノウエ	193	小崎	コザキ	20	下小原	シモコバル
137	木場大迫	コバオオサコ	194	後比良	ウシロヒラ	21	小田	オダ
138	下石坂	シモイシザカ	195	川小路	カワコジ	22	立迫	タチサコ
139	上石坂	カミイシザカ	196	長助川路	チョウスケカワシ	23	鍋谷ノ上	ナベタニノウエ
140	石坂下	イシザカシタ	197	小崎大比良	コザキオオヒラ	24	鍋谷ノ下	ナベタニノシタ
141	米山之入口	コメヤマノイグチ	198	北迫	キタサコ	25	伊勢原	イセハラ
142	日影比良	ヒカゲヒラ	199	久木平	クキヒラ	26	甕ヶ迫	コシキガサコ
143	米山迫	コメヤマサコ	200	久木ノ下	クキノシタ	27	稲荷原	イナリハル
144	米山	コメヤマ	201	福ヶ迫	フクガサコ	28	岸ヶ平	キシガヒラ
145	米杉山谷	コメスギヤマタニ	202	寄手	ヨセテ	29	稲荷田外園	イナリタホカソノ
146	米山上迫	コメヤマウエサコ	203	木寄	キヨセ	30	大前原	オオマエハラ
147	宇津ヶ野平	ウツガノデラ	204	小城平	コジョウタイラ	31	鳴山	ナルヤマ
148	大平	オオヒラ	205	山神谷	ヤマガミタニ	32	久保	クボ
149	越ヶ迫	コシガサコ	206	茨ヶ谷	イバラガタニ	33	床並	トコナミ
150	榎木山	エノキヤマ	207	川路	カワジ	34	近元	カリモト
151	下り山	ウダリヤマ	208	下川路	シモカワジ	35	下園	シモノ
152	二野之宇都	ニノウト	209	古木場	フルコバ	36	肝煎屋敷	キモイリヤシキ
153	小宇都	コウト	210	間伏ヶ尾	マフシガオ	37	神殿寺	コウドノデラ
154	二野之西ノ山	ニノニシヤマ	211	榎木山ノ上	エノキヤマノウエ	38	大蔵	オオクラ
155	中尾平	ナカオデラ	212	桂ヶ谷	カツラガタニ	39	宮田	ミヤタ
156	石川路平	イシカワジデラ	213	池ノ谷	イケノタニ	40	法師原	ホウシバル
157	隼馬平	ハヤウマヒラ	214	池ノ谷比良	イケノタニヒラ	41	板ヶ迫	イタガサコ
158	二野之下	ニノノシモ	215	下別当	シモベツトウ	42	萩久保下	ハギクボシタ
159	二野之	ニノ	216	茅落ノ下	カヤオトシノシタ	43	萩ノ久保上	ハギノクボウエ
160	藪尾野	ソノノ	217	松ヶ角平	マツガカドヒラ	44	高船	タカフネ
161	土橋ヶ迫	ドバシガサコ	218	市崎原	イチサキバル	45	大山	オオヤマ
162	市ノ原上	イチノハラウエ	219	市崎野	イチサキノ	46	上段中須	ウエダナナカス
163	釜山出口	カマヤマデグチ	220	西ノ平後	ニシノヒラウシロ	47	尾鼻	オバナ
164	茶園ヶ尾	チャエンガオ	221	村右衛門川路	ソノウエモンカワジ	48	熊鹿倉	クマシカクラ
165	諸衛ヶ比良	モロエイガマツ	222	グノノキ迫	グノノキサコ	49	小平	コダイラ
166	堂ノ比良	ドウノヒラ	223	水ノ上	ミズモノノウエ	50	中尾	ナカオ
167	市之瀨	イチノセ	224	横道免	ヨコミチメン	51	寺野	テラノ
168	須ノ崎	スノザキ	225	熊ヶ嶽	クマガダケ	52	祢五郎	ネゴロウ
169	市之瀨頭	イチノセカシラ	226	水元	ミズモト	53	堀入ヶ谷	シオイリガタニ
170	茶屋平	チャヤデラ				54	穴瀧	アナタキ
171	茶屋頭	チャヤカシラ				55	風呂谷	フロタニ
172	井戸ノ上	イドノウエ				56	灰原	ハイバル
173						57	八丈	ハチタケ
						58	黒仁田	クロニタ

59	松比良	マツヒラ	116	塩入川	シオイリガワ	174	下比良ノ下	シモヒラノシタ
60	藤ノ元	フジノモト	117	谷ノ迫	タニノサコ	175	戸ノ木道下	トノキミチシタ
61	桑木ヶ瀬戸	クワキガセト	118	山ノ神	ヤマノカミ	176	戸ノ木道上	トノキミチウエ
62	大瀬戸	オオセト	119	猿之内	サルノウチ	177	丸尾迫	マルオサコ
63	躑躅ヶ平	ツツジガヒラ	120	へゴヲ	へゴヲ	178	平野上	ヒラノウエ
64	上府	ジョウフ	121	枯楠	カレクスノキ	179	小富士	コフジ
65	袖ヶ山	ソマガヤマ	122	堂角	ドウカク	180	小富士ノ下	コフジノシタ
66	小栗栖	コグルス	123	小船	コボネ	181	軸屋平	シクヤヒラ
67	林ヶ谷	ハヤシガタニ	124	菊比良	キクヒラ	182	軸屋井川本	シクヤイガワモト
68	灰床	ハイトコ	125	山之口	ヤマノクチ	183	上比良木	カミヒラキ
69	南比良	ミナミヒラ	126	園田	ソノダ	184	軸屋下比良	シクヤシモヒラ
70	赤生木	アカウギ	127	九玉	クダマ	185	真那田本屋敷	マナダ
71	長崎野	ナガサキノ	128	中服良	ナカフクラ	186	野切迫	ノクリサコ
72	石神	イシガミ	129	袖木	ユノキ	187	山神北平	ヤマガミキタヒラ
73	四角目	シカクメ	130	寺上ノ原	テラウエノハラ	188	山神迫	ヤマガミサコ
74	深谷	フカタニ	131	小松ヶ尾	コマツガオ	189	軸屋山神之下	シクヤマカミノシタ
75	小谷之口	コタニノクチ	132	多々良ヶ迫	タタラガサコ	190	堂免	ドウメン
76	神之下	カミノシタ	133	岩船	イワブネ	191	上小原	カミコバル
77	塩面	シオツラ	134	後ノ迫	ウシロノサコ	192	砂取坂	スナトリザカ
78	西神之下	ニシカミノシタ	135	北	キタ	193	朽木馬場	ハシノキババ
79	浅付之谷	アサツキノタニ	136	門田	カダ	194	前元	クズレモト
80	日笠	ヒガサ	137	京ノ塚	キョウノツカ	195	出水屋敷	デミズヤシキ
81	権ヶ尻	ゴンガジリ	138	花田	ハナダ	196	花田	ハナダ
82	駒軽	コマガル	139	堀切	ホリキリ	197	出水	デミズ
83	瀧坪	タキツボ	140	有村	アリムラ	198	上五反田	カミゴタンダ
84	瀧松	オマツ	141	池船	イケブネ	199	下段	シモゴタンダ
85	尾松下り	オマツタリ	142	渋ノ木	シブノキ	200	稲荷町	イナリマチ
86	尾松ノ上	オマツノウエ	143	日陰比良	ヒカゲヒラ	201	平木場	ヒラコバ
87	霜下	シモシタ	144	柿木ヶ瀬戸	カキキガセト	202	門田山	カダヤマ
88	霜ノ尻	シモシタジリ	145	加寛	ガラシ	203	湯道山	ユドウヤマ
89	イロ口	イロクチ	146	加寛比良	ガラシヒラ	204	餅田	モチダ
90	十二夜山	ジュウニヤヤマ	147	荒谷	アラタニ	205	福田	フクダ
91	茶屋	チャヤ	148	前平	マエヒラ	206	溜池ノ下	タメイケノシタ
92	米山	コメヤマ	149	空ヶ橋	ソラガバシ	207	湯穴口	ユアナグチ
93	荒比良	アラヒラ	150	大丸	オオマル	208	宮田	ミヤタ
94	大迫野	オオサコノ	151	南外園	ミナミホカソノ	209	神田	カンダ
95	中原	ナカハラ	152	軸屋外園	シクヤホカソノ	210	中村	ナカムラ
96	長九郎	チョウククロウ	153	軸屋山	シクヤヤマ	211	寺田	テラダ
97	田代	タシロ	154	八切迫	ハチキリサコ	212	八ボキ	ハボキ
98	中ノ谷	ナカノタニ	155	池平	イケヒラ	213	若宮田	ワカミヤタ
99	甕原	コシキバル	156	早間伏	ハヤマブシ	214	下五反田	シモゴタンダ
100	橋ノ口	ハシノクチ	157	元場所	モトバシ	215	塚田	ツカタ
101	石ノ野	イシノ	158	大木場西迫	オオコバニシヤコ	216	小原田	コバルタ
102	金山堀	キンザンボリ	159	桶前平	クスマエヒラ	217	高田	タカタ
103	金園堀	ソノダボリ	160	引曲谷	ヒキマカリタニ	218	南祝太郎	ミナミイワタロウ
104	金山	キンザン	161	大木場竹山	オオコバノケヤマ	219	祝太郎	イワイタロウ
105	岩塚	イワツカ	162	大木場	オオコバ	220	川建	トタテ
106	朝追	アサオイ	163	登尾道	ノボリオミチ	221	戸原田	カワハラダ
107	中山	ナカヤマ	164	中神ノ下	ナカカミノシタ	222	久木田	クキタ
108	後平	ウシロヒラ	165	鷹取道	タカトリミチ	223	九郎左衛門堀上	クワサエモンノウエ
109	迎之平	ムカエノヒラ	166	大木場前迫	オオコバマエサコ	224	八枝山神	ヤエヤマガミ
110	樋渡	ヒワタリ	167	犬殺	イヌコロシ	225	八枝山神	ヤエヤマガミ
111	八反田	ハチタンダ	168	奈小路ノ谷	ナオウジノタニ	226	中原	ナカハラ
112	迎之丸	ムカエノマル	169	柗加野	モミジカノ			
113	園田山	ソノダヤマ	170	泉水谷	センスイタニ			
114	三反田	サンタンダ	171	越迫	コシサコ			
115	前田	マエダ	172	戸ノ木橋山上	トノキツバヤマノ上			
			173	下比良野道上	シモヒラノ上			

川辺町大字別小字分布数(計2600)

大字	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
分類	平山	田部	永田	下山田	中山田	上山田	本別府	高田	宮	小野	今田	西添	野崎	清水	神殿	古殿	野間
1 信仰地名	4	2	3	9	8	12	4	13	15	5	1	2	10	27	28	5	9
2 城郭集落	10	7	2	0	1	13	15	5	2	1	1	1	14	6	10	6	6
3 土地区画	3	1	1	1	3	2	1	0	4	1	0	0	1	3	1	1	1
4 市街交通	10	4	4	10	1	5	13	14	7	3	4	2	7	27	16	2	3
5 水利川池	5	5	5	5	5	7	9	20	5	6	2	3	7	16	13	1	15
6 人名職掌	8	3	5	2	1	10	8	5	1	0	0	0	4	7	11	0	8
7 開発地名	2	2	1	5	7	15	9	15	20	3	0	3	11	19	18	3	5
8 職業産業	2	1	1	0	3	6	8	3	0	3	0	0	5	4	4	1	6
9 田畑地名	7	7	8	11	3	14	8	16	9	5	5	5	14	21	28	9	8
10 瑞祥地名	3	0	0	0	0	3	9	1	0	0	1	1	3	2	2	0	3
11 景観自然	14	7	6	20	7	95	33	7	5	0	0	0	5	5	4	3	4
12 位置地名	28	16	39	14	18	118	65	86	30	12	13	3	36	68	46	12	140
13 形状地名	17	4	9	6	4	22	61	31	25	18	14	5	35	93	65	9	48
14 目印地名	12	0	4	5	2	8	48	4	9	0	0	0	7	2	6	1	1
15 侵食崩壊	0	0	0	0	0	0	2	0	0	1	1	0	0	2	1	0	4
16 川原湿原	5	0	2	4	0	4	2	0	2	0	0	2	3	3	1	3	2
17 天体気象	0	0	0	0	0	4	1	0	1	1	0	0	1	2	4	0	0
18 歴史伝承	5	0	4	14	0	12	2	0	0	0	0	1	0	3	8	0	0
19 動植物名	4	0	2	15	7	12	24	1	14	2	1	4	9	16	21	4	5
20 意味不明	4	22	6	10	9	36	30	3	20	4	3	5	21	16	35	2	13

16. 古殿(55)

17. 野間(124)

1 大坪	オオツボ	1 外戸ノ口	ケドノクチ	59 草場	クサバ
2 前田	マエダ	2 佛坂	ホトケザカ	60 下原	シモハラ
3 西之園	ニシノソノ	3 坂下	サカシタ	61 屋形久保平	ヤカタクボヒラ
4 瀬戸口	セトグチ	4 荒比良	アラヒラ	62 屋形久保	ヤカタクボ
5 原田	ハラダ	5 下り山	サガリヤマ	63 立山下迫	タチヤマシモサコ
6 杉下	スギシタ	6 堺柵	サカイハセ	64 立山中迫	タチヤマナカサコ
7 田畑	タバタ	7 大田尾	オオダオ	65 立山上迫	タチヤマカミサコ
8 柿田	カキタ	8 荒比良下	アラヒラシタ	66 小堀	コボリ
9 下垣内	シモカキウチ	9 井戸ノ下	イドノシタ	67 榎木迫	エノキサコ
10 蔵前	クラマエ	10 山神	ヤマガミ	68 上之迫	ウエノサコ
11 野守	ノモリ	11 甚兵衛堀	ジンバイボリ	69 神原	カミハラ
12 肝煎屋敷	キモイリヤシキ	12 屋鋪平	ヤシキヒラ	70 チケンジ原	チケンジハラ
13 中間	ナカマ	13 屋敷下り	ヤシキクダリ	71 新右工門堀	シンウエモンボリ
14 内園	ウチノノ	14 完ノ足形	カンノアシガタ	72 狩集	カリアツマリ
15 池崎	イケザキ	15 梅木山	ウメキヤマ	73 小原	コバル
16 蔵前山野	クラマエヤマ	16 崎之巢	サキノス	74 狐ヶ平	キツネガヒラ
17 水溜	ミズタマリ	17 高塚北比良	タカツカキタヒラ	75 狐平後比良	キツネヒラウシロビラ
18 牟田比良	ムタヒラ	18 高塚後比良	タカツカウシロヒラ	76 小山ヶ迫	コヤマガサコ
19 堂園	ドウゾノ	19 中平	ナカヒラ	77 大迫平	オオサコヒラ
20 山野	ヤマノ	20 高塚西比良	タカツカニシヒラ	78 小宇都	コウト
21 石ノ元	イシノモト	21 柳ヶ迫ノ上	ハシガサコノウエ	79 浦田	ウラタ
22 松久保	マツクボ	22 善亀ヶ尾	ヨシカメガオ	80 大迫	オオサコ
23 加治屋敷	カヂヤシキ	23 柳ヶ迫	ハシガサコ	81 篠口	シノクチ
24 小グルス	コグルス	24 水道	ミズミチ	82 陣之尾	ジンノオ
25 諏訪	スワ	25 行司牟田	ギョウジムタ	83 江田	エダ
26 山下	ヤマシタ	26 弓張木	ユミハリキ	84 川崎	カワサキ
27 宮ノ原	ミヤノハラ	27 雨包	アメツツミ	85 後ヶ迫	ウシロガサコ
28 中之堀	ナカノホリ	28 丸岡	マルオカ	86 園師田堀	ズシデンボリ
29 妙現下	ミョウゲンシタ	29 岩川ノ上	イワカワノウエ	87 大平原	オオヒラハラ
30 妙現	ミョウゲン	30 岩川	イワカワ	88 梨木畠	ナシキハタ
31 山下比良	ヤマシタヒラ	31 丸岡前比良	マルオカマエヒラ	89 瀧之比良	タキノヒラ
32 下横尾	シモヨコオ	32 川路ヶ迫	カワジガサコ	90 石走	イシハシリ
33 後迫(ウシロサコ)	ウシロガサコ	33 行司牟田前迫	ギョウジムタマエサコ	91 黒鳥	クロトリ
34 下中原	シモナカハラ	34 柏段	カシワダン	92 山下	ヤマシタ
35 中原	ナカハラ	35 水道前迫	ミズミチマエサコ	93 宮田	ミヤタ
36 陣	ジン	36 金ノ穴	カネノアナ	94 城之下	ジョウノシタ
37 中之迫	ナカノサコ	37 高塚	タカツカ	95 前田	マエダ
38 内陣	ウチジン	38 小高塚	コタカツカ	96 松木田	マツキダ
39 太夫堀	タイフボリ	39 高塚瀬戸	タカツカセト	97 中袋	ナカフクロ
40 大堀	オオボリ	40 重信迫	シゲノブサコ	98 宮之脇	ミヤノワキ
41 山崎鼻	ヤマサキバナ	41 小高塚北比良	コタカツカキタヒラ	99 野間田	ノマダ
42 淵曲(淵田?)	フチマガリ	42 外キ	メキ	100 川原	カワハラ
43 下比良野	シモヒラノ	43 外キ下り	メキクダリ	101 上川原	カミカワハラ
44 後川原	ウシロカワ	44 外キ	ホキ	102 中川原	ナカカワハラ
45 北比良野	キタヒラノ	45 外キ中迫	ホキナカサコ	103 クルスガ比良	クルスガヒラ
46 山出比良	ヤマデヒラ	46 外キ楠木下ノ迫	ホキクスノキツササコ	104 カイノ田	カイノタ
47 山出	ヤマデ	47 外キ春田迫	ホキハルタサコ	105 上原	ウエハラ
48 後比良	ウシロヒラ	48 小高塚前比良	コタカツカマエヒラ	106 クノス	クノス
49 登山上	ノボリノボリ	49 外キ北比良	ホキキタヒラ	107 松ヶ迫	マツガサコ
50 橋山	ツバキヤマ	50 福寿山	フクジュヤマ	108 宇都迫	ウトサコ
51 牟田	ムタ	51 高塚下迫	タカツカシモサコ	109 鎮守山	チンジュヤマ
52 七拾田	ナナジュウタ	52 西堀	ニシボリ	110 琵琶迫	ビワサコ
53 下前田	シモマエダ	53 中條迫	ナカジョウサコ	111 樋之口	ヒノクチ
54 修理田	シユウリデン	54 金之穴前比良	カネノアナマエヒラ	112 木落	キオトシ
55 橋原	ハシノハラ	55 赤牟田	アカムタ	113 鍋山	ナベヤマ
		56 赤牟田中迫	アカムタナカサコ	114 井手ノ比良	イデノヒラ
		57 赤牟田久保	アカムタクボ	115 米山	コメヤマ
		58 小高塚	コタカツカミネ	116 新田井手ノ上	シンデン

川辺町の地名

2007年6月3日
松浪 由安

1. 調査手順と方法

(1)小字の読み方は町役場(町教委・新地氏)に大字別の一覧表を作成してもらい、小字の意味・由来や分類の仕方でも助力を得た。

(2)参考資料

㊦川辺町郷土史(町・昭51編)

㊧角川地名大辞典(鹿県委員・平成3編)

㊨川辺町の城跡(町教委・史談会・昭57編)

㊩川辺町全図(川辺町役場・平成14)

㊪川辺町風土記(青屋昌興・2006年)

㊫南日本の地名(小川亥三郎・1997年)

㊬地名どくほん(山崎盛隆・昭51)

㊭南九州の中福良(内山美成・平成13)

— 県立図書館蔵書

※現地を直接歩いて調査して回ることができなかった。

※「川辺」の参考資料が少なく、調査しにくかった。

※正しく分類できないものが多く、重複掲上した小字数は380に上った。

(例)「景観地名」と「形状地名」、「人名・職掌地名」と「職業・産業地名」、「開発地名」と「田畑地名」、「信仰地名」と「瑞祥地名」

※「意味不明」の地名も多い(全体の1割以上もある)

2. 川辺町の地名

(1)「川辺」の名称の由来

「河辺郡」の名称の初見は735(天平7)年「薩摩国正税帳」に——角川・地誌編・町郷土史㊦㊧, また、「河辺郡」の設置は「和名抄」(河辺郡稻積郷)には「加波乃倍」とある。㊦島津荘(1024~1028)は保元・平治の乱(1156・1159)の後、平氏の支配下に入ったのだが、摂関政治から院政となり、平氏が実権を握っていた平安末(1130頃)薩摩守平忠度時代、河辺氏の始祖・村岡平氏一族(長男・道房)が、父・良道(伊作郡司)とともに薩摩に下向し、拠点をこの地(河辺)に置いた。

道房が河辺姓を名乗ったことから河辺氏誕生の1100年代前半には、この地方は既に「河辺」と呼ばれていたことは確実(河辺平氏)である。広い万之瀬川流域は、この名称が最も適切である。

小字の分類			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
大字名	小字数	信仰地名	城郭集落	土地区画	市街交通	水利川池	人名職掌	開発地名	田畑地名	職業産業	瑞祥地名	景観自然	位置地名	形状地名	目印地名	侵食崩壊	川原湿原	天体気象	歴史伝承	動植物名	意味不明	
1	平山	136	4	10	3	10	5	8	2	7	2	3	14	28	17	12	0	5	0	5	4	4
2	田部田	140	2	7	1	4	5	3	2	7	1	0	7	16	4	0	0	0	0	0	0	22
3	永田	100	3	2	1	4	5	5	1	8	1	0	6	39	9	4	0	2	0	4	2	6
4	下山田	121	9	0	1	10	5	2	5	11	0	0	20	14	6	5	0	4	0	14	15	10
5	中山田	71	8	1	3	1	5	1	7	3	3	0	7	18	4	2	0	0	0	0	7	9
6	上山田	464	12	13	2	5	7	10	15	14	6	3	95	118	22	8	0	4	4	12	12	36
7	本別府	249	4	15	1	13	9	8	9	8	8	9	33	65	61	48	2	2	1	2	24	30
8	高田	238	13	5	0	14	20	5	15	16	3	1	7	86	31	4	0	0	0	0	18	37
9	宮	133	15	2	4	7	5	1	20	9	0	0	5	30	25	9	0	2	1	0	14	20
10	小野	63	5	1	1	3	6	0	3	5	3	0	0	12	18	0	1	0	1	0	2	4
11	今田	43	1	1	0	4	2	0	0	5	0	1	0	13	14	0	1	0	0	0	1	3
12	両添	33	2	1	0	2	3	0	3	5	0	1	0	3	5	0	0	2	0	1	4	5
13	野崎	178	10	14	1	7	7	4	11	14	5	3	5	36	35	7	0	3	1	0	9	21
14	清水	223	27	6	3	27	16	7	19	21	4	2	5	68	93	2	2	3	2	3	16	16
15	神殿	226	28	10	1	16	13	11	18	28	4	2	4	46	65	6	1	1	4	8	21	35
16	古殿	55	5	6	1	2	1	0	3	9	1	0	3	12	9	1	0	3	0	0	4	2
17	野間	124	9	6	1	3	15	8	5	8	6	3	4	40	48	1	4	2	0	0	5	13
	合計	2600	157	100	24	132	129	73	138	178	47	28	215	644	466	111	11	33	14	49	158	273
	割合(%)	100	6	0.3	0.9	5	5	2.8	5.3	6.8	1.8	1	8	24	18	4	0.4	1.2	0.5	1.8	6	10
	順位		5	11	17	8	8	12	7	4	13	16	3	1	2	10	19	15	18	13	5	

(2) 水の豊かな川辺盆地

始良カルデラによって形成された台地も多く（鳴野原、野間原、松崎原、藤野原、大戸原、君野原など）、特に鳴野原台地下には清水の湧水が豊富に湧き出る場所が多い。町の上水道の水も、ここから採取している。—川辺町風土記④

また、町内には河川の流水を水田に導くための井堰や疎水や用水路も多く（計15～16ヶ所）、水神（碑）も28基が現存し、河川・水利・田畑などに関する地名が各所に見られる。

○水源を意味する小字…水元（上山田1，永田1，清水2），水ヶ元（下山田）

○流水を意味する小字…水流（中山田），出水（神殿），出水ヶ迫（清水）

○田や水に関わる地名…田代（上山田，神殿，野崎）

中福良（上山田，高田，宮，永田，野崎，神殿＝「服」）

○「田」や「水」がつく大字…上山田，中山田，下山田，永田，田部田，高田，今田，清水（8／17）

○「田」や「水」がつく小字の例

- ・…田 原田・福田・前田・迫田・平田・宮田・本田・浦田・有田・柿田・餅田・園田・永田・荒田・御田・柳田・畑田・門田・蒲田・脇田・小田・白田・早田・新田・元日田・九日田・二月田・三月田・牟田・五月田・七拾田・野間田・松木田・小原田・川原田・山中田・上田・白餅田・伽覧田・彼岸田・仁久田・修理田・大正田・木場田・椎木田・榎木田・豊木田・神名田・羽祢田・先ノ田など（約50）
- ・…牟田 佐牟田・中牟田・西牟田・芹牟田・正牟田・深牟田・飯牟田・蒲牟田・赤牟田など（約10）
- ・…反田 二反田・三反田・四反田・五反田・六反田・八反田など（約10）
- ・…仁田 山仁田・赤仁田・黒仁田・穴仁田など（5）
- ・…水 米水・水道・水溜・水之谷・水ノ尾・水クレなど（6）
- ・…川・河 川口・谷川・古川・穴川・苧川・払川・山ノ川・川路・眼流川・塩入川・芋洗河など（11）
- ・…井 井料・井奥・井手元・井手上など（4）

※大字が違えば同名の小字はいくつもあるから、上記を総計すると120（5%）以上に上る。

また、一覧表で「水利・川・池」と「田畑」地名を合計すると約300（12%）となる。

※水田耕作に適し、生活しやすい場所を意味する「中福良」の地名は県内の市町村に17ヶ所あるが、1市町村には各1～2ヶ所（鹿児島市は3ヶ所）だけなのに、川辺町内には6ヶ所も集中している（南九州の中福良）

(3) 河辺氏と川辺の文化遺産

およそ270年に亘る河辺氏の川辺統治時代、河辺氏は土着豪族化して、その勢力も安定し、特有の仏教文化が栄えた。僅かに残る寺社跡や館跡、墓碑などと、周辺に見られる小字によって、平氏の仏教文化が川辺に根づいたことが推測できる。

※河辺氏の川辺統治時代1130年～1380年頃

<「清水」に残る仏教文化遺産>

①居館「桜の館」（1100年頃）跡

②菩提寺「宝光院」跡とその西方にある
歴代僧侶墓（石仏30数基）
五輪塔 月輪塔

③岩屋磨崖仏と桜並木（河辺氏を頼って
流れ落ちてきた平家の残党たちが植樹）
月輪梵字（鎌倉中期）
岩崖に刻した五輪塔と線刻の宝篋印塔
（鎌倉末期）

<周辺にある小字>

桜元，桜田，南屋敷，本伽覧，堂ノ上，堂之尾，寺の前，寺ノ跡，寺前，寺田，阿弥陀ノ迫，仏谷上仏谷，仏法迫，仏法ヶ平，下別当など（以上は清水）堂角（神殿），堂高（本別別），仏坂（平山）堂免，堂之元，伽覧田（田部田），堂之比良，伽覧山（野崎），寺ノ下，月照寺，寺下（宮），寺上ノ原，伽覧田，寺田（神殿），寺ノ上，寺ノ下（高田），神殿寺（神殿），光明寺，宝正寺，寺中高仏（中山田），供養塚，西供養塚，堂山（下山田），仏淵，堂跡（上山田），寺野（清水），堂園（古殿），薬師免（宮），飯森塚，中塚，西塚，飯森塚後ノ迫，飯森塚後比良など（計48）

《神事に関わる小字》

河辺氏が川辺に入る前までは川辺の地も神を祭っていたはずで、飯森塚山(平山)周辺には次のような地名(小字)が残っている。

諏訪・諏訪尾・諏訪下・佐別当・道正堀・天神坊・天神城・宮田・道正堀前比良など（計14）

上記（平山）以外の地域の神事に関わる小字

宮田・神田・九玉(神殿)，宮之馬場・道祖神・稻荷町（神殿），諏訪（古殿），天神山（中山田），権現ノ上，権現谷（上山田）など（計10）

※以上の小字数の合計は（72）だが京ノ塚（神殿），石塔庵（本別府），兎堂（清水），山伏墓（同），柴立（上山田）…とか後泉寺（野崎），善勝寺（同），西山寺（高田）など南北朝以後創建の寺社や民間信仰のお宮まで数えると信仰地名の総数は分類集計表のとおり（157）である。

(4) 川辺町の城跡と地名

河辺氏が築いたとされる「川辺城（平山城）」は中世城郭としてはトップクラスの本格的なもので、本城（本丸）花見城（出城）天神城（二の丸）西側に隣接する新城（戦国時代に追加増強）から成る川辺の中核城だった。14世紀に入って統治権が島津氏に移って以降は、島津家所領内の本城だった。諏訪台地に築かれた要害であり、1.5km北東に位置する松尾城とともに2回に及ぶ川辺動乱では戦いの中心舞台となった。県内にあった中世城郭は約840。薩摩国には約50あったが、そのうちの1/3（17）は川辺町にあったことになる。従って町内には城郭地名も多く、小字の数にして86（3%）ある。

※主な城郭名と関係小字名は別綴の「川辺町城跡位置図」と下掲の「城跡一覧表」（何れも町教委史談会編⑦）を参照のこと。

※「勝目城」は戦国形態の城郭だが、それ以前すでに砦らしいものが造られており、後に島津氏によって修築増強されたもののようで、島津支配下となり戦乱に登場することはなかった。

二三	二二	二一	二〇	一九	一八	一七	一六	一五	一四	一三	一二	一一	一〇	九	八	七	六	五	四	三	二	一	
大田尾館	野間陣之尾城	古殿諏訪陣	河辺氏居館	内青折城	市崎野小城	楠原陣	野崎陣	松尾城	衣刃ヶ城	猿山陣	高田古城	高田堀之内	高田城（佐多城）	本別府城	野首城	城ヶ南風城	有木堀之内	上山田陣之尾城	勝目城	兎ヶ城	田部田城	平山城	城跡名
野間	野間	古殿	清水	清水	清水	野崎	野崎	野崎	小野	宮	高田	高田	高田	本別府	本別府・上山田	上山田	上山田	上山田	中山田	永田	田部田	平山	所在地
尾形久保・屋形久保平	陣之尾	陣・内陣	南屋敷	池ノ谷・池ノ谷比良	小城平	陣ノ前・陣ノ東・陣ノ後・陣ノ瀬戸	陣平	東城	二反尾鼻	猿山	城ノ平	堀内・北丸・南丸	城ノ下	東陣・西陣・陣ノ迫	野首	城ヶ南風・城ヶ南風頭	堀之内	城戸坂・陣ノ尾	城内	兎ヶ城・上兎ヶ城	陣・東小城・西小城	本城・花見城・天神城・新城・大杉平・蔵ヶ迫	関係小字名
〔居館〕			〔平地居館〕	〔古城〕	〔古城〕	〔棧敷〕		〔高城〕	〔古城〕				〔牧之城〕						〔山田城〕	〔古城〕	〔茶磨ヶ陣〕	〔内城〕	備考

川辺町の城跡一覧
(町教委・史談会編冊子より)

※備考欄の（古城）は阿多ハヤト時代の山城（山寨）と推定される。他は中世の城塞跡。

(5) 川辺町の地名の特色

①大字地名について

文永の役（1274年）後、九州西岸警備に当たる地頭・郡司の監督のために、薩南方面に派遣されていた幕府御家人千竈時家が、嘉元4（1306）年にその嗣子に宛てた譲状が、仮名書きの村名（郷名）で残されている。（町郷土史⑦）川辺の大字に当たる地名は次の資料のとおり。

さつまのくにかのへのこほりのちとう御代官ならひにくんし職の事	
川 辺 郡	地頭 並び 郡司
一、かうとののむら（神 殿）	一、しもやまたのむら（下山田）
一、きよミつのむら（清 水）	一、なかたのむら（永 田）
一、のまのむら（野 間）	一、のさきのむら（野 崎）
一、たへたのむら（田部田）	一、ひらやまのむら（平 山）
一、おののむら（小 野）	一、かみやまたのむら（上山田）
一、ふるとののむら（古 殿）	一、みやしたのむら（宮 下）
嘉元四年四月十四日 左衛門尉時家（花 押）	

江戸期には「川辺郷」は12村、「山田郷」は3村（上山田・中山田・下山田）あり、明治3年の郷名変更で山田郷は「勝目郷」に、明治22年の村制で「勝目村」、更に昭和31年、川辺町に合併し現在に至っている。またこの譲状に名前が出ていない村や、これにはあるのに現在の大字にはないもの（宮下村）、それ以後にできたり合併したりなどの変遷を経て、現在は17字に確定している。地名の呼び方までが殆んどそのままの形で残っており、制度の変更さえなければこれから先も同じ形・同じ呼び方で続いていくだろう。大字の地名の発生理由については、田部田・永田・両添など今後更に調査検証する必要がある。

②小字地名について

ア) { ○景観（自然）地名…（「…平（比良・飛良）」「…原」「…迫」「…宇都」「…谷」「…久保」）
○位置・形状地名 …（「…頭」「…鼻」「…尾」「…尻」）
※「…瀬戸」「…渡瀬」や「…角」「…俣」など少数のものは除外する。
平山・田部田・永田・下山田・中山田の例と町内全体の集計

<景観（自然）地名の例>

- ・「平」…荒平・江平・二本平・越ヶ平・大平・後平・大杉平
- ・「比良」…岩塚比良・馬立比良・三本比良・馬越比良・大迫比良・宇都ヶ比良
- ・「飛良」…小丸ヶ飛良・大迫飛良・持留飛良・前飛良迫・次郎ヶ迫
- ・「原」…芝原・ススコ原・今市原・諏訪原・山下原・馬越原・中川原
- ・「迫」…池ノ迫・矢倉ヶ迫・榊木迫・中之迫・狩俣迫・次平ヶ迫・悪谷迫
- ・「宇都」…十郎ヶ宇都・田部田ヶ宇都・谷之宇都・宇都・南田部田ヶ宇都
- ・「谷」…琵琶ノ谷・大倉野谷・人落谷・権助谷・下柳ヶ谷・芹ヶ谷
- ・「久保」…大久保・八久保・天ヶ久保・久保・猪ノ久保（本別府）・時久保（高田）

※「…比良」「…飛良」は何れも「…平」と同じで、平地・台地の傾斜面につく。

<位置・形状地名の例>

- ・「頭」…池ノ頭・塘ノ頭（上山田）・鉄山頭（高田）
 - ・「鼻」…犬之塔鼻・青木ノ鼻（上山田）・油免鼻（本別府）・灰床ノ鼻（同）
 - ・「尾」…小松ヶ尾・獅子見ヶ尾・遠見ヶ尾・番屋ヶ尾・陣ノ尾（上山田）
 - ・「尻」…岩川尻・池尻・井川尻・切出尻（上山田）・釜ヶ平尻（同）・入谷尻（同）
- ※位置地名には頭に「東・西・南・北」や「上・中・下」・「前・後」のつく小字地名も多い。

川辺町全体の集計

大字 語尾	平山	田部田	永田	下山田	中山田	上山田	本別府	高田	宮	小野	今田	両添	野崎	清水	神殿	古殿	野間	合計
平	4	3	1	5	4	20	12	9	3	0	1	0	6	16	11	0	2	96
比良	7	5	3	0	0	0	17	1	2	9	2	2	7	8	5	6	12	87
飛良	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	4
原	3	4	1	6	2	8	11	2	1	2	1	3	3	3	8	3	8	69
迫	22	13	16	4	5	14	17	20	17	5	3	2	16	17	9	1	20	201
宇都	1	2	0	2	0	2	0	8	0	0	1	0	1	4	0	0	1	22
谷	0	1	0	3	1	27	7	25	1	1	1	1	8	9	8	0	0	90
久保	0	1	0	1	2	2	3	2	4	1	0	0	0	2	1	0	4	23
頭	0	0	1	0	1	21	2	1	0	0	0	0	1	2	0	0	0	29
鼻	1	0	0	0	0	1	3	1	0	1	0	0	0	0	1	1	0	9
尾	2	1	0	9	2	2	1	6	10	4	1	1	7	2	2	1	0	51
尻	3	3	0	0	0	15	3	1	0	0	0	0	0	0	2	0	2	29
計	43	33	24	30	17	112	76	76	38	23	12	9	49	63	39	12	49	710
率	6	4.7	3.4	4.2	2.4	15.8	10.7	10.7	5.4	3.2	1.7	1.2	7	8.8	5.5	1.7	7	100
順位	7	10	12	11	14	1	2	2	9	13	15	17	5	4	8	15	5	

前掲の表のように<景観（自然）地名>と<位置・形状地名>を大字ごとに集計すると、面積の大小と地勢・地形の如何によって順位がついてくる。「…平（比良）」や「…迫・谷」地名が多いのは、県内では川辺町だけとは限られないだろうが、シラス台地が多い所為だろう。

川辺は山間の盆地で、地域も可成り広く、水の便もあり、昔から人の住みやすい環境だったから人も集まり人口も増えてきたにちがいない。面積・人口も割合に多く、小字の数が多い（2600）のも肯ける。

イ) 人文地名

<城郭・集落地名の例>

○「城」・「陣」（計23）…「城跡一覧表」（P. 4）のとおり

○「堀」…堀之内（上山田）、堀内（高田）以上（計2）

※城跡の堀は空堀になっているものが多い。堀には城堀のほかに牧場の周囲など台地上に分布し、また、田圃の区画になったものもある。

○「丸」…北丸、南丸、（以上計2・何れも高田）

※「…丸」は丸型（円形）の狭い田や山の名、人名のあとにつく「丸」もある。

（例）苗代丸（田部田）、大丸（本別府）、小丸（同）、堂ノ丸（下山田）、丸尾（小野）

<開発地名の例>

○「堀」…道正堀（平山）、地頭堀（田部田）早馬堀（下山田）、牧堀（本別府）など（60）

○「木場」…鉾木場、古木場（本別府）、中木場（宮）、大木場（神殿）、など（15以上）

※「…木場」は木を伐り出す場所、薪を切り落とす、焼畑用、山裾の場所に多い。

○「割」・「作」…金割（高田）、頭割（同）、字割（両添）、長割（今田）、尾呂作（本別府）など（8）

※「割・作」は共同で開発された農作業する畑に付けられている。金棒作（高田）

○「塘」…塘池・塘尻・村塘（以上は上山田）、塘ノ頭（中山田）、古塘（下山田）

※塘（とも）は土手を築いて水をためた池のことを意味する。「塘」がつく小字は（6）

ウ) <動植物地名の例>（動物50、植物60、鳥10、その他2~3）

○犬の塔、猫山、牛本、馬庭、狐ヶ平、狸ヶ平、猿掛、猪ノ角、獺越、熊ヶ内、小鹿倉、兎堂など

○笠松、境杉、桧木山、楠木比良、桐原、栗野、椎木田、榎木田、柚木、栢木、藤野、菊比良、橋木、柏段、桜田、榊堀、柳田、桃木原、菖蒲谷、芹ヶ谷、柿木迫、へゴ尾、竹山、桑木迫など

○鳩峯、鶴之頭、鷹取、黒鳥、鳥淵谷、蛇野、貝カラ崎、獅子見ヶ尾、鳥越など

エ) 特異・希少・独特・意味不明の地名例

○「悪谷」（永田・清水・高田・上山田）立ち入らぬように

○「論山」（本別府・小野）境界問題論争から

○「…免」（寺社の田圃で年貢を免除）油免（本別府）、薬師免（宮）、鎮守免（清水）、堂免（平山）、諏訪免（小野）

○「庭月野」（上山田）戦乱に破れて入った武将（安藤氏）が庭を照らす月光を神助として名づけた。

○「雨包」（平山・清水）雨雲に包まれた湿気の多い所（気象地名）

○意味不明の小字…諸麦・雨里・菅元・案之元・土喰（上山田）、源去堀（下山田）

馬ツク子バ・ゴアン（本別府）・納四ヶ大筋（宮）・中礼・七麦（宮）・鞆ノ平（今田）・曾辺

引・提ノ角（野崎）・海周軒・内青折・諸衛ヶ松（清水）・十二夜山（神殿）・猿氏（上山田）・

先問ノ谷（上山田）・忍口尻（平山）など「猿氏（打）」・「猿掛（上山田）」猿を撃った所

「灰…」灰塚（上山田）灰床（本別府・神殿）灰原（神殿）人骨・死体を焼いた所？

「案之元・ゴアン（御庵）」、「…軒」庵・軒は小さな寺のこと「諸麦（もろむぎ）」イヌガヤの別名

3. まとめ（反省）

（1）研究・勉強不足で初歩的・一般論的な報告しかできていない。

（2）調査期間は断続的で2~3年に及んだが諸事情で実地よりも主として町郷土史その他の資料を参考に調査した。

（3）調査結果は川辺の特徴・特色を前面に出して項目を立て、整理することにした。

（4）広い川辺町とはこれまで殆んど縁もなく、調査手順も実地調査も整理も責任をよく果たせないままで終わったが、川辺に親しみが深まった。

（5）調査不足や整理不十分なところがまだ多いが止むを得ない。

地名研究会報

第 98 号

平成 19 年 12 月 2 日

鹿児島地名研究会

- I. 第 98 回例会 平成 19 年 9 月 2 日 (日) 於西郷南洲顕彰館研修室
(出会者) 青柳俊二・今村誠一・入来院貞子・上野堯史・内山憲一・川野雄一・
久米雅章・永坂芳彦・浜田良知・脇岡修一郎・平田信芳・二見剛史・
松波由安・米原正晃 (計 14 名)

- II. 大日本地名辞書読会 P. 574~P. 575

大隅郡、大隅郷、始臈郷、禰寝郷

[問題となった地名および事項] 伊地知氏と白山信仰、西南戦争と二川、垂水岳、
大隅郡大隅郷、始良、白銀坂

- III. 薩摩藩の参観交替

「参観交替」か「参勤交代」か、薩摩藩参観交替の 3 ルート、
参観交替はいつ始まったか、参観交替の規則、参観交替にかかった日数
参観交替の免除、参観交替の終わり、生麦事件、島津斉彬の参観交替、
写真撮影と記録の方法、東海道を歩いて、薩英戦争の古戦場、
東海道の一里塚、本陣と歴史的景観、西南戦争と古道。

伊地知氏と白山信仰

平田 あるでしょう。

久米 大隅郷の所で垂水のことだ、と。そ
して此处は伊地知氏の治所だった、と書いて
ありました。しかも伊地知氏は越前国にルー
ツがあるとのことでした。

久米 本山は越前ですね。
平田 そうです。越前から加賀。伊地知氏
は持って来たでしょうね。

平田 越前島津氏の家来だったのです。

久米 此处に「故あって」と書いてあるの
で、どういう故かなと思って。

久米 垂水を調べた時に気付いたのですが
此处には白山神社があるのです。民俗行事の
オンダコラ祭りのことを聞いた時、伊地知氏
は白山信仰を持っていたのじゃないかな、と
思ったのです。鹿児島市の中山に白山神社が
ありますね。そこら辺の関係がどうなるかな
と思って、お尋ねします。

平田 「故あって」というのは仕えていた
越前島津氏の当主が戦死して断絶したので、
その家来たちは行き場がなくなった。越前島
津氏の兄に当たる薩摩に行けば使ってくれる
と思って頼って来た。はるばる頼って来たとい
うことで用いられた。それが伊地知氏にな
る。

平田 白山神社は調べてはいませんが、吉
野の雀が宮にもあります。

久米 伊地知氏だけでなく鹿児島にやって
来たという人たちは、いろんな縁があって関
東から来たり大坂の方から来たりとか、いろ
んなことが考えられる。

久米 白山信仰というのは日本の津々浦々
にあります。

平田 鎌倉時代は平家追討や元寇に対する恩賞として土地があまりなかったのです。薩摩や大隅に平家の領地があったので、鎌倉の御家人たちにこまごまとした土地が与えられた。その一端として越前国に土地を与えられていた連中が、仕えていた家がなくなると遠い親戚ということで薩摩を頼って来たと考えられる。

久米 今だったら遠くても飛行機でやって来られますけど、当時の交通手段を考えてみると、越前から来るのは大変な距離。

平田 船でやって来るわけです。陸地を来るのは大変ですよ。案外古くから海上ルートはあったと思うのです。その辺の証拠はないけど、他に考えられないのです。

久米 伊地知氏の白山信仰は自分で満足していただけだったので、ありがとうございました。

西南戦争と二川

上野 牛根の二川ですね。

平田 二つの川が流れている処。

上野 此処は私が見たのでは、確か西南戦争の・・・

平田 戦場だった。

上野 今まで此の人（吉田東伍）は、それぞれの処で西南戦争のことを書いていますが此処だけ書いていないのです。

平田 ああ、そうか。記事に気付かなかったのでしよう。

上野 本人の洩れでしょう。

平田 うーん、そうだと思うけど。

上野 此処だけないのが、ちょっと不思議

平田 二川は牛根麓の中心になります。

上野 そうですね。

垂水岳

内山 垂水岳というのが全然わからない。

平田 ああ、そうですか。

内山 白岳というのがあるのです。さっきの白山と関係があるのかなという気がするのですが。

大隅郡大隅郷

平田 和名抄の郷名で、鹿児島県のもので最も難しいのが大隅郡です。大隅国大隅郡大隅郷と三拍子揃ったのがあるのです。そこが大隅国の中心地だったと思うのです。また、申ト（申良）が大隅郡であったことは大隅国風土記逸文にあるわけですから、申良が大隅郡所属だったことは間違いなさだろうと思うのです。そして、申良・高山・大崎に大型古墳がありますから、そこに大隅直（おおすみ）のあたえという豪族がいたのだろうと考えます。そうすると、どういうことが考えられるかということ、贈於郡と大隅郡と肝属郡があった所に始羅郡というのが割り込んで来て、大隅国建国時の四郡になるわけです。

始羅の語義は不確定だが、「始」という文字は国字くさいのです。漢和辞典に出て来ない。贈於郡と大隅郡の間にあったのか、それとも大隅郡と肝属郡の間にあったのか。中間の郡という意味で始羅郡の表現が出来たと思うのです。始鵜郷というクサクムリのもものはパソコンの外字にはないのです。その次に出て来る表記が始羅です。現在の始良郡の「良」という読みは、漢和辞典には出て来ない。「良」は呉音も漢音もリョウで、ラの読みはない。「良」は日本の草書体で「ら」になる。それで「ら」と読むようになった。

始良（あいら）

上野 話は別ですが、今度やっと合併して始良市になるそうです。錦江市というのは止

めて始良市となるそうです。

平田 始良郡が脚光を浴びるのですね。

上野 これでやっと始良町の人たちが満足するのではないのでしょうか。始良市になるというのですが、地名的にいうとあすこは「始良」じゃないわけです。

平田 それは、そうだな。

上野 ですよ。

平田 始羅郡から始まった間違いが続いているわけだから。

上野 元々は始羅郡ですからね。何故始良郡なのか判らないけども、始羅郡で確か出て来ますよね。

平田 始羅郡が消滅していたから島津氏がこっちに持って来たのです。そして右筆が間違っ「始羅」と書いた。それ（始羅）でも恐らく「あいら」と読んだでしょうけど。

上野 その間違っ「始羅」というのを使ったら、その合併は間違いということにはならないでしょうね。それは、大変なことだから。

平田 それは考えない方がよい。

白銀坂（しろがねざか）

平田 一般に行政の人たちは地名に対する考え方が甘い。例えば白銀坂（しろがねざか）。始良町の文化財審議委員、県文化財課、文化庁も皆地元の読みに乗っかってしまった。地元の人々が「しろがねざか」と呼んでいるので、そのままになってしまった。薩隅日地理纂考を見ると、間違っ読み「シラカネ」の元凶と気付く。鹿児島市大竜小学校の所に内城（うちじょう）があったのだが、これにも「ウチシロ」のルビを振っている。その他にも間違いが十数か所あります。教育会が出した郷土史の原典なので、小学校の先生たち

が鵜呑みにして1世紀かかって教え続ければ白銀坂（しろがねざか）の読みは根付きます。

しかし、古典を開くと「しろがね」と読む例はない。ほとんどが「しろがね」。

銀も黄金も玉もなにせむに

まされる宝子にしめやも

有名な山上憶良の歌との矛盾をどのように説明するのだろうか。そもそも「しろ」とは何か。鹿児島県の各地で見られるシラスは、白洲（白砂）から来ている。白魚（しらうお）の読みもあり、「しら」は古い日本語だと気付く。「しろ」は斯盧国すなわち新羅の呼び名からきている。日本では「しらぎ」と呼んだが、朝鮮では「シロ」国だった。シロ国から伝来した金属だったから「しろがね」と呼んだ。昔「白銀：しろがね」は貴重品だった。同様に海を渡って来た真っ白い織物が、白妙（しろたえ）だった。決して「しらたえ」とは云わなかった。持統天皇の歌

春過ぎて夏来にけらし白妙の

衣干すてふ天香具山

白妙を干しているのは庶民ではなく、貴族や豪族の庭先に干してあった。好い天気が続いて一斉に洗濯物が干してあるという状況を詠んだ歌。昔の天皇の役割は、好天に恵まれるのを祈ることだった。白妙が一斉に干してあるのは私の治世がうまく行っている証だと見ているのです。ただ単なる風物詩でないことを考える必要がある。「しろ」という表現は昔は重い表現だった。白無垢は花嫁が着る衣装、白装束は切腹する時の装いを考えるとよい。

重富の「しろがね」という表現は長く使われていたのです。西暦1500年の平松水田坪付帳という古文書に「しろがね」の表記は随所

に出て来ます。長く使われて来た表記です。それを明治維新後に、樺山資雄たち国学者がルビを振って白銀坂（しらかねざか）の呼び名を作り出した。

大日本地名辞書、角川地名大辞典46、日本歴史地名大系鹿児島県の地名などは、すべて「しろがねざか」で立項している。これとの整合を関係当局はどのように考えるのか。歴史の道百選の名称としては拙速に過ぎた。

上野 その頃「アイラ」はどのように書いていたのですか。

平田 最初は始鵬、それから始羅、そして吾平。これらは大隅半島の方。そして此方へ移って来て始羅、明治の中頃に始良（編集時後期：大隅半島に江戸時代、大始良郷があっ

た）。先程も云いましたが「良」の崩し字が「ら」だったので「ラ」と読んだだけのことで、本来的に「ラ」の音はないのです。

話は別ですが、昨日内山君が九州山脈の尾根伝いを歩いて130年前の9月1日を記念して鹿児島に帰り着いたのです。今回は踏破した体験を話してもらいます。

実は7月半ばから腰を痛めています。座骨神経痛という病名が付けられ、痛み止めの薬を貰っています。はかばかしくなくて一昨日から点滴を受け、少し歩けるようになりました。現在コルセットを付けて歩いています。こんな状態なので3月例会で打ち切るのが、体力から見てチャンスだと思います。ご諒承ください。ちょっと休憩しましょう。

薩摩藩の参観交替

上野堯史

薩摩藩の参観交替路の实地踏査記録とC.D.とを作っているのですが、日置市から出水市までと、水俣市から八代市そして母校熊大までと、進呈しなければならぬので皆様に差し上げることが出来ないのです。これは非売品で、私が自費出版したものです。

これを回しますので興味のある方はご覧になってください。C.D.も付けて県立図書館に寄贈してありますので、図書館で見ることが出来るだろうと思います。

これは私が歩いた時に使った地図です。東海道は専門家の図がありましたので、それに自分で線を引き直して使いました。地図は国土地理院にアクセスすれば容易にとれます。それを自分でコピーして、線を入れて、判らない所は拡大の地図や市販の地図を使いまし

た。地図は上から見たものですが、現実には水平に歩くわけですから道を間違ったりして大変苦労しました。これはほんの一部ですが、回しますのでご覧ください。

「参観交替」か「参勤交代」か

参観交替と参勤交代、二通りの表記があり私の本は参観交替と難しい文字の方を使用してあります。私が研究した範囲では「参観交替」が本来じゃないかなと思います。普通、教科書なんかで使われている参勤交代はやはり作られたと思っています。

また参観交替という四つの文字は私が史料を見る限り、見たことがないのです。参観と交替と別々に出ることはあっても参観交替が四文字で出て来るのは多分、1635年家光が全大名に一斉に命じた武家諸法度の中、あるい

は1615年にしても、その中には出て来るけれども、島津の史料の中には参観交替で行ったという言葉は直接には出て来ないのです。

本当はどっちでも良いのですが、一応格好をつけて、ちょっと難しそうな文字を使う方が良くはないかということで使ったので、こっちを使った方が良かったのじゃないかと云われ、ばそれまでのことです。

実は前の方の文字：参観交替を私が豊学校にいる時に小学校6年生と一緒に簡単な地図を作りました。校長が回って来て勝手に参勤交代に書き変えて私はむかついて来たのですが上司に逆らってはいけませんので、その時はそのままにしておきました。両方使用されているのです。私は参観交替を使いました。

薩摩藩の参観交替の3コース

今日、皆さんに是非理解して頂きたいのは参観交替は三つのコースがあったということです。荒っぽく描きます。普通皆さんが考えておられるのは、三太郎峠を越えてず一つと歩いて、博多に長崎道がありますからそこを通過して小倉に出て、船で下関に渡る。そして下関から、また歩いて行く。これが一般的というか、普通いわれる参観交替の一番まともな道です。

しかしこれは後半であって、初めは日奈久を通過して瀬戸内海に入り、大坂あるいはその近辺に上陸するのが一般的なルートです。

もう一つは陸路を日向細島、現在の日向市です。今でも日向市にはフェリーが着いています。この細島から船に乗って瀬戸内海から大坂に向かいます。三つのルートがあることから私はこれに西海路と名付けたのです。船のルートを(2)西海路、(3)を九州路、(1)を日向路と名付けました。

鹿児島南高校の内之倉先生が2年程前、黎明館での発表の記録に同じようなことを書いておられました。細かい記憶はないのですがそれには名称は書いておられなかったような気がします。

三つのコースを設定して、私が実際に歩いたコースは日向のコースです。細島まで歩いて、細島から船で行く道は、船に乗るお金がありませんので、鹿児島からず一つ行って赤穂から歩きました。坂越(さこし)という港があります。坂越から峠を越えて出て行きますと、相生(あいおい)に出ます。相生という所は皆さん憶えておられませんか。2年程前、大根が道端から芽を出し評判になった、ど根性大根の相生です。相生を出て山陽路を大坂に向かい、そして後は東海道ということになります。

日向市までは2002年でしたか、実際に歩いてこの会で発表しています(編集時後記：平成15年3月、会報79号)。一応歩いています。私が一番自信がないのは福山から日向市までのルートです。正しい参観交替路を歩いたのかどうか、自信がありません。熊本の図書館にこの本を配る時に、謝りながら間違っているかも知れませんが、まあ見て下さいというようなことで配りました。

確実なのは東海道だけです。東海道は多くの方が書いてルートもはっきりしているし、道順も書いてあります。

九州の道は何もありません。三太郎峠も、最初の津奈木太郎の入口までは行ったのですが、見上げて止めました。現在の道は海岸線を日奈久まで通っています。西南戦争に関連して八代までと、さらに川尻まで歩きましたが、もう一遍歩こうと思っています。

何故、日向路を最初に歩いたかという、これが一番費用が安くて済む。出発点まで汽車で行って歩いて帰って来れると考えたからです。そういうことで、昨年6月から9月にほとんど歩きました。10月はたった1日でしたけど歩いて、あとは今年の3月と9月に仕上げとして日本橋まで行きました。

歩いた話よりは研究のレジュメの方を見て頂きましょう。皆さんにこの三つのルートがあるんだということを理解して頂きたい、と思っています。

ほとんどは、皆、九州路だと、あの三太郎峠を越えたのだと思っていますが、九州路も三太郎峠はやっぱり苦手だったでしょうね。出だしにあんな山を越えて行けば疲れますからね。だから米之津から船に乗って佐敷に出るのです。佐敷から行って赤松峠を越える分は歩けます。先日私も赤松峠を歩きました。散歩ルートとあったので喜んで行ったら、えらい道で間違っただけ溝に落ちました。カメラを濡らし大変でした。ちょっと大変ですけど、あとの二つの峠に比べると、たいしたことはないのです。

佐敷までは船で、あるいは場合によっては日奈久まで船で行って、それから歩くというのが九州路で、三太郎峠を歩くというのは、現実にどれだけ歩いたのか私も判りません。記録も見ていません。歩いたろうとは思っていますけど。

ですから、三つのルートがあり、九州路にしても途中船を使っているのだ、ということです。その辺をご理解頂ければと思います。

それからいろんな地域の資料に、参観交替の道だと勝手に書いておられます。加治木の龍門司坂を参観交替で通ったことにしてくれ

と云わんばかりの意見を聞いたりするので、実際に通ったという記録はない。ただ1回か2回、戻って来る時に通った記録はあるような気がします。

だから、いろんな所で参観交替の道と云われますけど、参観道はすべて幕府に届け出てそれ以外の道は歩いてはいかんわけですから簡単に大名行列の道は出来るものではない。ただ帰りの場合は幕府もとくに云わなかったのじゃないかと思えます。とくに領内に入れば、あり得たと思えます。それを参観交替の戻りの道：下国の道として云われていいかも知れませんが。

行く時の道としては、普通に水上坂(みづかみ)を通って川内(せんだい)まで歩くというのが本来の道であって、初期は川内から船に乗って平戸～大里に廻って行ったのだと思えます。

参観交替はいつ始まったか、ということちょっとレジュメをご覧になって下さい。5～6ページです。今まで話したことが1ページから4ページまでの分です。●点を打っているのは、史料に実際に出て来た地名です。私は参観だけを取り上げて地名としています。下国の分まで入れますと、そこに例えば日向路は29回使っていますが、29回のうち24回、細島という文字が出て来ますので、細島がポイント(重要な地点)であったということが判ります。他の地名も出ては来るんですけどね。下国の方にあるので、参観には●印は付けていません。数値としては、例えば高岡が1回しか●印がないのに、5となっておるのは、下って来る時に高岡と書いた記録があるということです。私の本には全記録を載せてあります。

それから西海路の場合はさすがに数が多く川内(せんだい)・水引(みずひき)、大小路(おおしょうじ)・向田(むこうだ)・京泊(きょうどまり)・船間島(ふなまじま)・久見崎(くみざき)、それから薩の西浦と書いてあるのです。西浦というのは。

平田 西方(にしかた)でしょう。

上野 西浦というのは薩摩の西海岸という意味だろうと思えます。

平田 西方に御飯屋があつて、殿様が休憩していた。

上野 西方はどうなんですかね。あすこは船の着く場所になりますかね。

平田 まあ、港はある。

上野 そうかも知れませんが、私は薩摩全体の西海岸ということで受け取ったのですけど。それから平島(ひらしま)、引水とありますが、これは水引のことですね。たまたまそういう表現があつた。その表現を見て行きますと、船間島とかですね。先日、初めて船間島という所へ行ってみました。すぐ目の前に原子力発電所があるという感じの場所です。此処には現在、火力発電所があります。船間島に行つて、この辺にも西郷軍と政府軍が戦争をした場所もこの島の一角にありますので、その辺を見ながら歩きました。

九州路がさすがに多いですが、見て頂きますと判ります。最初の参観が1681年です。明らかに九州路だと思います。18世紀から19世紀になると九州路になるということで、大体中期から後半にかけてこうなるということ。前半は日向ルートと西海ルート、後半からは九州路だ、と。九州路は小倉まで。小倉に大里(たいり)という所がある。中には大裏としたものもあつたような気がします。(編集時

後記：現在北九州市門司区大里になる。安徳天皇の内裏があつたことに由来する地名という)。小倉から船が出るのですが、その船が下関に渡る船だけじゃなくて、そのまま瀬戸内海を通って行く場合もあります。その例が4ページです。そこに船の例。これは島津重豪が1770年に乗った大里発の船です。これは大坂まで直接行きました。すごい船団構成です。これは右に文章があります。この文章をもとに私がこうだろうと船を並べてみたものです。

御座船、2列目の真ん中にあります。御台所とありますが、これは奥方が乗っていたのかと、ちょっとそこまでは書いてないもんですからね。ただ船の呼び名にそういうふうを書いてあつたということです(編集時後記：調理のための台所用の船に御を付けた?)。多分こういう船団の形で瀬戸内海を行つたんだろうな、と。これは大変なことですね。船を呼び集めて並べ変えて、これは全部鹿児島船と見ていいですから。そうすると、これを並べ立てて行くということは、大変な苦勞で、後になったら山陽道に行くのです。何故最初から行かなかつたか。最初は山陽道も九州道も整備が出来ていなかった。しかも加藤さんの処は、島津は通りたくないわけです。下手をすると昔の怨みということで、やられないでもないわけです。幕府の体制が落ち着いて来たら道路も整備されて、九州路・山陽道・東海道と行くことが出来た。東海道は昔から整備されており安全だった。また、要所要所に譜代大名が居て抑えていました。

参観交替はいつ始まったか

私が本を送つたら、ある人から反論が来ました。参観交替は一体何かということですが

5ページの下の方を見て下さい。(1)参観交替とは大名が江戸に行くこと。島津家久が大名になったのはいつなのかが問題になるわけですが、その意味では1617年だということなんです。その反論した方に云わせると、もっと早いのではないかと。私にとっては大名に、何時になったのかは関係ないのです。大名として参観交替をしたこと、二つをセットにした1617年をその接合時点と見るべきで、二つの条件が揃ったということです。

それから参観交替について、私が「観」の文字にこだわったのはこれなんです。よく書いてあるのは「述職(じゅつしょく)の為」と書いてあるのです。「職を述べる」、私はこれをどのように理解しているかということと日本銀行鹿児島支店長が支店長会議で東京に行きます。私はそんな感じだと見ています。鹿児島支店長が島津氏なんです。江戸幕府はそのようにしてしまったのです。述職の為とは自分の仕事の内容を述べる為ということですが、挨拶に行くのだから「見る」の文字が付いた「観」がよいのではないかと、私が使った理由の一つです。

大名になったのは1617年とした。これが問題だと云われているのですが、私は1617年のこれを大名と解釈して、それ以降を参観交替と考えた。ところで最初、奥方は江戸に居なかった。これを島津が実行したのは1624年です。1624年に初めて奥方と子供を連れて行きますが、これは通常の約3倍ぐらいの日数をかけて行っております。11月に生まれて146日ですから、1年の3分の1を旅行に費やしたようなものです。子供連れだったのでゆっくり疲れないようにして行ったのかなと考えております。これは冬から春にかけての旅で

よかったのではないのでしょうか。春から夏にかけて行くと、途中でくたばるのではないかと思います。

(3)参観交替というのは江戸・国元を1年おきに往復する。それを考えると、1617年頃には1年おきが確立して行く。それまでは必ずしもそれは徹底されていない。

参観交替で行って江戸から帰って来ます。これを下国という。帰って来ると、必ず挨拶に行くのです。無事帰って参りましたと云って、土産を持って家老が挨拶に行くのです。それで初めて下国は終わるのです。それが1626年から始まっています。いろんな形式を考えて行くと、1635年に幕府が参観交替をはっきり打ち出して来ます。その少し前、1630年頃から確立して行ったのではないかと、私は島津氏の場合を見て考えます。

他の藩の例が早いからとの反論も頂いておりますが、私は島津氏の場合を考えておりますので、これでいいのではないかなと思っております。

そこに、連れて行ったという内容の資料をあげておりますので、それをご覧になれば判ると思えます。

参観交替の規則

7ページ以降に行きたいと思えます。実際は夏4月中に参観となっているのです。これは教科書で皆習うのです。4月に行っているかを調べたのがこの表です。昔の4月は今の5月ですから、4月に着くためには、大体50日から60日ぐらいかかるとしたら、3月つまり今の2月に出なきゃいけない。島津の殿様はぼやいているのです。2月頃船で玄界灘を通過して行くと荒れる、大変だ、と。ちょっと遅らせてくれんか、と。よかろうということ

で、そういうのも認められた時もあります。

時期を整理しますと、4月までに着いたのは、その表でご覧になって頂ければいいと思います。何月に出て何月に着いたかが、ページで出してあります。昔は閏月があります。閏12月というのは普通の1月ですから、1月に含める。閏1月は2月に含めるという計算で、これを1月、2月としてあります。すべて出発日は旧暦の月です。

上米というのをご存知でしょうか。8代将軍吉宗。あだ名は米将軍です。参観交替は半分にするから、その代わり米を供出しなさいという命令です。本当にそうしたのかを見ると、島津は大体命令通りに供出しています。そして、後の方の資料を見て下さい。お米もちゃんとして規定どおりに出しております。しかも、われわれ島津は薩摩・大隅・日向の一部だけではなく、琉球も持っている。琉球を含めての石高から半分ということにしてくれと、わざわざ多く納める方を選んでいくのです。あくまでも琉球は自分のものであると強調するためだったのでしょうか。幕府が琉球を入れずに割り当てて来たのを、いずれ取り上げるのかなと勘ぐったのでしょうか。いろんな政治的論理があったのではないかと、ちょっと楽しい感じがします。本心は米を出したくないのです。これは結果的には大名にとって非常に有利だったのです。

交替ですが、実際はこういうことです。行ったら半年で戻って来ます。戻って来たら1年半、国に居れるのです。それが交替ですからね。国に居れば銭はかからんわけです。これは大名にとって有利であったから、後に幕府はこれを廃止するのです。

8ページをちょっと見て下さい。参観交替

というのは、実は大名だけではないのです。大名の父(元大名)、次の大名になる子供、その子孫も行っているのです。それがこの例です。島津光久、20代綱貴。これは孫です。それから島津綱久。これは代が書いてありませんが、光久の子で次の大名になる予定でしたが、親父があんまり長生きして止めないものだから、大名になることなく40代で死んでしまいます。いっずいでん社長が頑張って、そんなに次の社長は死んでしまつたと、あつちこつちでそういう例がありますよね。そこで20代になる孫の綱貴が加わってきます。要するに光久と息子と孫の三代で参観交替をしているのです。

それで此方から行く時は、向こうから江戸を出るのです。でないと屋敷は三つはないのです。屋敷は二つしかないから、一人は必ずあぶれるのです。三人一緒に来た時には必ず途中で出会いますから、そこでちょっと短い話をします。浜松でしたり、伏見でしたりですね。伏見・大坂では大体二日か三日滞在します。これは資金集めだという説もありますけど。金を借りて旅をせねばならんということもありますが、そこで話し合いをして、そして又、お互いに江戸・国元に別れて行きます。兎に角、父子で参観、時には孫もという例もあったのです。これは大体17世紀のことで、18世紀になったらほとんど大名だけになります。

幕府から竹姫を嫁に貰った殿様は誰ですかね。綱貴でしたかね(継豊が正しい)。鹿児島に戻って来たら動かない。江戸に居ては病氣と云って国に帰らない。女性の方は居られないですね、竹姫は行かず後家みたいな方です。それを貰ってやったわけですから、わが

ままが利いたのかなと思っていますけど、そんな例もあります。

島津重豪もしょっちゅう体の調子が悪いと云って休んでいます。ただし別の方は調子がいいのか、子供はその間にどんどん作っています。これは他の殿様も同様ですね。光久だけです。ほぼ真面目に往復したのは。まだ島津の財政が豊かであったと見ていいのではないかと思います。

参観交替にかかった日数

9ページに行きます。私が一番聞かれるのは、これです。何日かかって行ったのですかと。これは私の主要テーマでした。参観が平均57.0日。参観全部の資料に統計が出てるわけじゃなくて、書いてないものもありますが、行程にある出発日と帰国日が書いてあれば統計ができますので、それで見ると57日です。このうち7日ぐらいいは大阪と伏見で休んでいますので、50日ぐらいいと見ていいです。

下国の方は平均が51.9日です。この違いは何かというと、下国は4月に江戸を離れると仮定すると、夏場に帰って来ますが、海が割合穏やか。冬場でなくて玄界灘も荒れないから戻って来易いという面もあります。夏場の方が動き易かったのじゃないか。

もっとも中には、夏場にすごい時間がかかっているのを調べて見ると、あまりに暑くて船の中が臭くて気分が悪くなり、もう歩がということになった。広島で歩くことになったけど、下関に着くまですごく時間がかかっているのです。一か月ぐらいい。私の想像では急遽の変更ですからあ、少なくとも大坂城代に変更願を出す。早馬で江戸まで往復して、又早馬または早船で知らせて来るのを待っていたのかな、と。あるいは近辺の藩がありま

すから、そこの許可を待つとか。それとも誰か病気をしたのか、ちょっと判りません。時間をかけて下関まで帰って来た例もあります。時期によっては船旅もあまり楽ではないということだと思います。平均してこういうことになります。

参観交替の免除

先程出て来たのは5代継豊でした。5代というのは島津家久を初代として見た時の5代です。5代継豊は身体不調を理由に、数年に亘って在府しています。サボったのですね。帰って来た時にも数年に亘って在国しています。この方は子供が死んだ後まで生き残っています。

有名な薩摩義士の話がある加治木出身の殿様：重年公は若年24才で死にますから、あわてて息子を跡継ぎにということになります。木曾川の堤が出来た時は、息子を連れて行ったのです。自分が視察する時に、幼い息子も一緒に視察さしたのですが、その息子がまだ11才でしたかね。藩主になった時はまだガキだもんですから、幕府が参観交替とか、そういうことには及ばずということに在府させた：江戸に置かせた。その間、島津氏は参観交替をしていないのです。私は財政難を考慮して旅をさせなかったと思うのです。江戸にいる費用は、参観交替の費用と変わらないのです。本当に11才を考慮したのか、財政難を考慮したのか、そこはちょっと判りません。

数年間江戸に在府させて、その代わり幕府から監国使という国を監督する使節を派遣します。ずーっと家来の家を廻ったりして見定めているのです。

同じような役目の巡察使という幕府の役人が時々廻って来ます。大体廻るコースは決ま

ってますけどね。出水に巡察使が廻って来る道路があって・・・

平田 巡見使道路。

上野 巡見使道路があって、それが部分的に残っているのです。

参観交替の終り

最後の藩主である12代忠義公（家久から数えた江戸時代だけの12代）が初入部したのが1859年です。次の年：1860年、福岡の松崎という処まで行きましたら桜田門事件の知らせが来まして、これはやばいということで其処から引き返したのです。その時の理由はやっぱり病気ということにしなければならなかったのです。その後、実は江戸の藩邸を意図的に焼いて屋敷がないから行けないという理由で行かなかった次第です。1859年に戻ってからは行っていませんし、その後幕府の政策が変わって3年に一遍の参観交替になります。幕府はそれを又旧制に戻すと云ったのですがもう出来ませんでした。3年に一遍を約束させたのが、久光なんです。1862年に久光が江戸に行きますが、これは参観交替ではありません。そして、その帰りに例の生麦事件を引き起こしています。

生麦事件

生麦に入ったので歩きながら生麦事件の碑を探したのです。道のすぐ脇にあるのですがそれが見つからんのです。

浜田 2カ所ある。

上野 はい、2カ所あるのです。それが見つからずにマンションから出て来た人に聞いたら、あの先ですよというので、引き返しました。私の参観交替路道中では、引き返した時は記録上「休憩」としています。休憩が長い時や休憩を2回も取っている時は、大抵道

を間違っって引き返している時です。計測のやり直しをしているので、休憩という便法をとりました。

引き返して2カ所目の碑を見つけました。2カ所目が本当の場所なんです。1カ所目は顕彰碑などがありますけど、あれは後から造られたもので、2カ所目は民家の軒先に案内所の札が下がっています。これが本当の場所だということです。

私が何故最初見逃したか。その理由はキリンビールの工場の所為なんです。見学者には飲ませるとの話聞いていたのですよ。その気はなかったのだけど、私のさもしい心が見逃したのだと思っています。生麦はずーっとキリンビールの工場が続きます。生麦とビールと何の関係があるのかなとちょっと考えました。

浜田 酒屋をやっておられる方が個人的に生麦事件の資料館を営んでおられる。

上野 全く民間の方が造っておられるのですね。そういうのがあるのです。インターネットでも資料が出ています。

浜田 その方が現場へ連れて行ってくれるのです。久木村治休が此処でやった、とか。

上野 そこに行けば生麦事件の方が中心です。キリンビールの方は行かれないようにして頂きたい。

島津斉彬の参観交替

最後の方に載せてあるのは、安政元年（1854）の島津斉彬の参観交替です。斉彬公記というのがありますので、これに載っているのはそのまま載せてあります。これが貴重なのは斉彬がこまめに西洋式時計、皆さんが持っておられる時計：アナログ式の時計を彼は持っていて、それで計っているのです。

記録してあるのが「三時過二時過発」とあるのです。どういう意味かという、三時過ぎは判ります。次の二時過ぎは10分のことです。3時10分のことを三時過二時過と表現している。これを基本にして作ったのが、この表です。大体、鹿児島県の主な地名は出ています。

この時に、水俣から貫村そして貫峠（津奈木太郎）。これは明らかに三太郎峠を通っています。そして佐鋪（佐敷）、佐敷峠を通っている。佐敷峠は大変だと思うのです。現在山道は確か通行止めになっています。私は何度行っても通行止めでした。佐敷峠を通じてそのまま赤松峠ですから、二つの峠を一日で越えているのです。齊彬は恐らく駕籠に乗っているのでしょうけど、歩く連中は大変だと思います。

辺見十郎太は此処を越える時に転んだ奴は他人の刀や鉄砲を持ってと気合を入れたら辺見自身が転んでしまい、皆が喜んで辺見に持たせたとか云う話を聞いたことがあります。

そんなことで三太郎峠は使われていたらしく、私は此処でいう貫峠、津奈木の千代女塚(?)というのがあるのです。そこから登るのですが、津奈木の出口の方に行って聞いたのです。そしたら以前は参観交替の道ということで尋ねる人が多かったけど、最近は誰も尋ねて来ないし道は藪で駄目です、と。こういう処は冬場がいいのです。だけど冬場は山に狐師が入っているのです。私なんか猪と間違われて(笑い)一発で終わりですからね。冬場は何人かで歌でも歌いながら登らないとちょっと怖いと思います。目印を付けて行く必要があります。是非挑戦して欲しいと思っています。

齊彬の記録も大坂を過ぎて、草津・坂之下に着いた所までの記録しかないのです。時計の記録がない。此処から後の記録は、一緒に行った山田為正という人物の記録を基に私がまとめたものです。

この時の参観はちょうど幕末のせわしい時ですから、フランスの船が来たと江戸から早馬で知らせがくるのです。参観交替の途中でいろいろな情報を聞きながら行くのです。

それと此処では述べませんでしたが、実は鹿児島と江戸の間はしょっちゅう武士が往来しているのです。専門の町飛脚みたいなものを使ったりするのがありますが、重要機密を持った人たちが絶えず往来していたのです。情報連絡のついでに人が交代したのでしょうけど、そういうのがありました。

それから、時々将軍が鶴をくれるのです。鶴を獲ったで、はい、鹿児島に送って殿様に食べさせろ、と。これが又難儀ですよ。途中で殺すわけにいかんですからね。途中で死んだ時はどうしたのか、私も知りません。鶴を運ぶために何人か団体を組んで江戸から帰って来るのです。余計なものをくいやんと多分皆思っただろうと思います。殿様が江戸に居れば、その場でこしらえて食べるのですけどね。

逆にこちらで鶴を獲って江戸に送った例もあります。そうした場合は非常に早いのです。つまり儀式はいらんわけですから。猛スピードです。そういう時は多分宿を出て1日50kmぐらい歩いたとか、40kmぐらい歩いたとかはそういう時で、よく出て来ます。

先日もテレビで参観交替の時は走るようにして行つたと出ていました。走るようにして皆行つた、と。走るようにしてとは一体どう

いうことなのか。私は赤穂から歩いて40日ぐらいですから、東海道だけだったら40日かかっていないわけです。昔の人はマラソンをするように走って行つたんだとするならば、もっと短い参観交替だったはずですが、実際は朝出て昼着いた例も多い。道中の日数は表にありますから見て下さい。40kmという例は沢山ありません。

よく出て来る専門家と称する人がテレビによく出て来て走るようにしてと云ったりするのですが、実際にそんな例はない。そんなことをしておつたら体がもたんですよ。私の発表は大体以上でよろしいのじゃないかなと思っています。

写真撮影と記録の方法

これは回してありませんが、実は写真を4千枚以上撮っているのです。歩きながら記録する。例えば5,494歩と記録する。そして〇〇商店の前とか書いて、そして写真を撮って、宿に着いて飯を食いながら、ビールを飲みながら、パソコンを打って、その日のうちに一定のまとめをして置かないと記録もれが出て来ます。東海道は大体1週間旅して、帰って来てまとめる。まとめに2週間かかります。写真もこのようにしてまとめました。

インターネットのグーグルに、アルバムを作る機能があります。二つ機能があります。これは2行間隔で、この写真は福山を出た所です。

平田 宮浦神社だね。

上野 はい、宮浦神社ですね。今、此処に登る道があるのです。私が数年前歩いた時は標識は何もなかったのです。今は標識などが非常によく出来ています。多分自衛隊演習地の真ん中を道は通っていたと思うのですが、

今は山道の方が昔の道だと紹介しています。

鹿屋に行く道に出て、それからはほとんど10号線。私が以前歩いたのは、全部10号線でした。去年12月、いろんな所を聞きながら歩いて、だいたい道順を変えて歩き直した部分があります。

新田原基地のど真ん中を通ろうと思ったのですが、これは無理ですので廻りました。ど真ん中に確か道があったはずだと思いました。

参観交替の道を歩いていて、判るのです。大体広さがこれ(長机)よりもちょっと広い道。出来るだけ樹木が茂っていること。歩くのですから、太陽の下では歩きたくないですからね。だからそれを目安にして探します。それから道は大体真っ直ぐです。坂があろうが、なかろうが。ですから真っ直ぐ見据えて10号線はこっちゃやっどん、此ん道が真っ直ぐ行っちゃっど、と。それがやっぱり正解だろうと思います。歩いていると、お宅が歩いている此処は昔の10号線ですよ、と聞いたりしますから、やっぱり正解だったなというようなことです。

実を云うと、先程云いましたが、宮崎までは自信がありません。本を読まれて、これはうそばかり書きちゃつと云われてもしょうがないと思います。

私は参観交替の道を歩いたのじゃなくて、私が歩いた道が参観交替の道だと思わないととてもじゃないが昔の道は判りません。

東海道を歩いて

東海道に關しましては、いろんな先生が地図に書いています。昔、日経におられた今井さんという方の有名な本があります。今井さんの本に使われている2万5千分1図、

あれは5万分1図かな、この地図は現在の地図と違っているのです。道路もなくなったりしているのです。造り変られたりされていてそれを現在の地図に書き直すのは大変な作業でした。それもなんとかこなしました。

最後に皆さんに云いたいのは、東海道を歩くのだったら、私みたいに西から歩いて下さい。楽です。箱根すら楽です。東からだ、箱根も大変、鈴鹿も大変。箱根も鈴鹿もまさにハシゴを登るような感じの部分がありますから。これは年輩になったら無理です。西からはまだ大丈夫だと思います。西からのルートで気を付けて欲しいのは道順が大体東から中心にしてあることです。西から行ったら、こっちに曲がるというルートは、気を付けないと失敗します。私は豊橋でその通りに歩いていたら、また元の位置に戻って来ました。肝腎な所では道しるべがないのです。東からだ、道しるべがあるので。東海道をこっちから行く人には道海東なんです。東海道を東から来る人を考えているのです。そうじゃなくて、西から行く道も整備して欲しいな、と。もう愚痴ですけどね。

桑名からは今は船が時々出るのがあるのだそうです。それから天竜川は歩いて渡ろうと思いましたが、とても無理なので橋を渡ろうと思いましたが、天竜川の橋は歩道がないのです。下から自転車で来る女の子が居ったので、「あなたは自転車で行くの」と聞いたら「はい」と云いましたから「気を付けて」と本当に云いました。女の子は橋の上をすっくと行きましたよ。その子も考えていました。対抗車線を自転車で行きましたよ。後から越されるといかんということで、前から来るのを見てましたからね。大型車が並んだら、

歩く余地もないぐらいの橋です。天竜川の橋は。あれは困りますね。仕方がないので私はバスに乗りました。

それから、大井川は渡れました。安倍川も渡れました。あとは橋があります。是非皆さんも挑戦してみてください。

箱根は西から登って行ったら楽だと聞いていたので、登って行くと最後は竹藪みたいな道になり、行けども行けども天まで行くのじゃないかと思うほどの道でした。最後に平坦な所に出ましたが道が判らなくなりました。そのこのスタンドの兄ちゃんに聞いたら、知らない。タクシーが通ったので聞いても知らない。地元の人には知らないのです。仕方がないので適当に道を見付けて下りました。下りの道に行ったら、そこに道標がありました。途中は、多分、道標が消えたのだらうと思います。その道を見付けてやっと下って行きました。箱根の町まで行って三島の宿に引き返し、次の日は三島の宿からバスで行って、そこから又小田原まで歩いたというようなこともありました。

まあ、そういうようなことです。此処に居られる方だけですが、山陽道を歩きたいのだからとか、どこを歩きたいのだからという時は、そうですね、500円ぐらい入れて送って頂ければ、私がC.D.を作って送り返しますので、それを見ながら研究されて歩かれたら、多分間違いなく歩けるとと思います。地図もひょっとしたら入るかも知れません。

是非挑戦してみてください。私に案内を頼むのだったら、是非旅費を出して下さい(笑い)。もう時間がきましたので、これで説明は終わります。

【質疑応答】

薩英戦争の古戦場

平田 この報告の中で、参観交替の終りが生麦事件の直後だとの説明がありました。生麦事件の爪痕が薩英戦争。先日南新聞のひろば欄(投書欄)に書きましたが、鹿児島湾は薩英戦争の古戦場という視点が必要だと思います。すごい史跡：世界的な史跡です。その方が容易に歴史に結び付けられます。

ヨーロッパ勢力のアジア進出に直面して、薩摩は抵抗したけど刃が立たないことを知って、国内態勢の建て直しが先決として幕府を倒す明治維新の方向に向います。参観交替の終わりと薩英戦争を結びつけて考えると、鹿児島が明治維新の先頭を切ったことが理解出来ます。

上野 花火大会なんか止めて、あすこに偽物の大砲を並べて外国の船みたいなのを並べて海戦をやってる処がありますね。あれを英国艦隊に見立てて、どーんとやると(笑い)

平田 ポストン=ティーパーティーみたいにやるか。

上野 それはバーンと音が出て煙が出るだけの装置だけでも作ったらよい。1回引いたら千円としたら皆喜んでどーんとやるんですけどね。ポストン=ティーパーティーは茶箱を投げ込んだと云って、今でも観光客が投げ込むのでしょう。観光は歴史を生かしてますよね。

平田 歴史は活用しなければね。

東海道の一里塚

浜田 東海道の一里塚が残ってるのは？

上野 一里塚なんかはもう専門家がおってインターネットにも発表されています。東経〇〇度、北緯〇〇度と書いてあります。そう

いうのを発表した人も居ります。判っている限りは「一里塚」にアクセスすれば大体出て来るはずですよ。そういうのがあります。東経〇〇度というのが一番大切です。

私は行く時は歩いて、帰りはバスで2回通ったけど、それでも見逃しました。写真があるんですけど、見付からない。そういう処もあります。

それからジョイフルというのがあります。あれは愛知県あたりが最初かも知れません。ジョイフルを見付けて、腹ごしらえと同時にトイレに入らなきゃいけない、今日はどうしても寄ってトイレに入らなきゃいけないと思った瞬間、見逃したのがありました。そのジョイフルの手前に一里塚があったみたいで後で気付きました。

そういうのもありますが、ある処は非常によく手入れされています。しかし中には気を付けて見ないと判らんのもあります。だから、それぞれです。事前の情報がないと絶対無理だ、と思います。

浜田 西日本筋はどうですか。

上野 鹿児島からのルートですか。これは全然ないですよ。

平田 歴史の道調査をやっても判らない処が多い。

上野 恐らく全然ないと思います。

浜田 残っている処もあるのでは。

上野 一里塚は拝見していませんけど。

浜田 加治木町に、二里塚というバス停がありますけど。

上野 はい。

平田 あれは加治木から北に行く大口へ向かう道です。

上野 大口に行く道ですね。

二見 質問でもないのですが、参観交替の道は観光ルートにすればと思う。昔の道があるのか、ないのか。東海道については今の説明で判りました。私も先日箱根のあたりを案内してもらって歩きました。東海道はよく判っているので行けるのでしょうか。

上野 はい、東海道は沢山案内の標識があります。

二見 向こうに習って、とくに日向路なんかを整備して観光ルートに乗せればと思う。それは可能ではないのか。

上野 宮崎までのルートはわれわれは鹿児島県内は判るのです。宮崎県は判りません。宮崎の方に専門家が居られますので、そういう方は宮崎県を整理して、われわれは鹿児島県を整理してお互いに連携すればうまく行くと思います。

本陣と歴史的景観

久米 参観交替の場合、薩摩藩が利用した本陣、その当時のもので残っている所があるのですか。

上野 本陣は、東海道では、大体整備されています。他のところも本陣がありますが、整備されていません。本陣跡という表示が立ったりしています。東海道になると昔のものが残されています。皆さんへのお薦めの本陣は亀山市。シャープの工場で有名です。亀山市に「関」という家があります。この関宿、私は此処が一番感激しました。アスファルトになっていますが、昔の道路があつて両脇に昔の建物を残すように特別に条例が来ています。歩いていてコンクリートの建物が見えなかったのは、そこだけでした。郵便局や銀行も昔風の古風な木造に造り変えてある。二階建てから上は絶対にはないのです。見ると

空と二階建てと道路しかない。昔のままという感じで観光客も多いとのことでした。

平田 昔のままの景観の見直しが云われるようになった。

上野 鹿児島もそういう処を残さにかいかんと思います。ほんの百メートルでいい。昔の町。そこに恐らく沢山の人が来ると思います。どこへ行っても、加治木でも始良でも蒲生でも、全く同じような町並みであれば、皆何の興味を持たないと思います。東海道の町を見て、そのように思います。歴史を背景にして呼びかけないと。鹿児島は何でも壊しますからね。

西南戦争と古道

平田 今出た話、次の12月例会では内山君が歩いた道：薩軍が可愛岳から帰って来た道を話してもらいます。とくに鹿児島県の場合は吉松→牧園→溝辺→竹山→山田→蒲生→佐山峠→帯迫→実方を通ります。これを整備すると、よい観光ルート：ピクニック道になると思うのです。

それともう一つ、九州の古代官道がどこを通ったかを研究しながら整備しようとの話が出始めています。近世の道よりも古い形態で注目を浴びるだろうと思うのです。

二見 やっぱり考古学の方で時間をかけてやらなければいかんと思います。大隅国の古代官道の確認を一日も早くやって欲しい。

平田 そのための研究が必要になって来ますが、薩摩国と比べて大隅国は大筋が固まって来ている。

生麦は行ってないのですが、リチャードソンが殺されるのは、一番最初に奈良原喜左衛門が斬っているのです。そして傷を負いながらも逃げて行くのを久木村治休が二の太刀

を浴びせている。それでもまだ逃げて、三度目は落馬したリチャードソンのとどめを刺すのが有村俊斎。馬乗りに跨って苦しんでいるのを早く楽にさせてやると云つてとどめを刺す。だからリチャードソンが斬られた場所が三カ所あるのです。さきほど2カ所との説明があり、いささか疑問を持ちました。生麦事件の後始末をするのが大久保利通です。

奈良原喜左衛門は責任を問われて、京都の藩邸で切腹させられます。その弟の奈良原繁と有村俊斎：その後、海江田信義を名乗りますが、この二人と西郷隆盛がどうも反発するようになるらしいのです。奈良原も有村も精忠派のメンバーですが、西郷隆盛と反りが合わなくなるらしい。現在「桐野利秋夢物語」を読んでいます。とくに奈良原繁が西郷隆盛をつけ狙うとの話になるのです。桐野は西郷隆盛の身の護衛に気を配ったとみられるのです。西郷隆盛は早くから暗殺者に狙われていたとの伏線があった。「西南記伝」では奈良原は〇〇〇と伏字であったが、「桐野利秋夢物語」では実名で出て来るのです。警視庁の警部や巡査たちが帰郷したら暗殺団との噂が出て来るのも必然だったと思うのです。

上野 私が今読んでいるのに、矢野という男ですけど、警視庁の連中が二月中旬の段階で船に乗せられるのです。六百名ぐらいの巡査を、どこへ行くとも知らずに。着いたら長崎だった。聞くと西南戦争への投入だと。私は郷里の連中と戦争するわけにはいかんと彼は逃げ出すのです。脱走したら、警視庁の巡査だから徹底して調べられるのです。何度も調べられてはつきりした、これは間諜ではないということで、それから西南戦争に参加している。そんな人物がいる。

平田 だから疑心暗鬼だったということ。桐野利秋が語ったとの記録にそういうのが出て来る。西南戦争の原因・経緯についてまだ取り残し部分があるな、ということ。

上野 私は今、西南戦争で懲役に行った、生き残った人たちのことを調べています。半隊長以上の方です、例外もありますけど。その人たちが懲役に行って、西南戦争から4～5ヶ月後ですが、刑務所で申告書というか申上書を書かされたのです。どういうことだったのか、どういうことをしたのか、と。県史料の第二巻ですが、千ページぐらいの本です。これをスキャナーでとって、それを書き直して行く。今大体半分ぐらい行っています。

それを見ると、今云ったようなことなどがよく判って来ます。中原尚雄の名前がしょっちゅう出て来ます。それを信じ込んで行ったのだなというのが、よく判ります。それと同時に、脅されて戦場に行ったというのも結構あるのです。これが本当なのか嘘なのか。

私が西南戦争にこだわる理由は、曾祖父が行っているのです。もし死んどったら、私はこの世にいないわけです。だから西郷さんにも聞きたいなあ。若者を死なせて、何も感じないの、と。

平田 内山君、次回をお願いします。

鹿児島地名研究会員名簿

青柳 俊二	西田 春人
安楽 芳久	長谷川順一
池田 純	浜田 良知
今村 誠一	原口 泉
入来院貞子	繁昌 正幸
	肱岡修一郎
上野 堯史	
内山 憲一	平田 信芳
小山田 稔	福元 忠良
納 栄蔵	
唐鎌 祐祥	二見 剛史
川野 雄一	
	堀之口良吉
霧島 一浩	本田 碩孝
久米 雅章	松田 誠
小原 親英	松浪 由安
	三善喜一郎
小山 更	村山 謙一
下野 敏見	山崎 盛隆
築地 成郎	吉原 林昭
永井 啓介	
永坂 芳彦	米原 正晃

物故会員

小川玄三郎・片岡八郎・上赤一豊・桐野利彦・郡山政雄・木場武明・永田典男・
浜崎盛雄・原口虎雄・肥後芳尚・銚之原矢七・本田親虎・山田慶晴

地名研究会用資料 薩摩藩の参観交替 上野堯史(UenoTakafumi)

- 「参観交替」か「参勤交代」か……………両方使用される
- 薩摩藩の参観交替は大きく3コース ⇒資料(2~5ページ)
 - 日向路……………鹿児島→福山→都城→高城(タカジョウ)→(去川関)→高岡→佐土原→高鍋→都農→細島~~~~~坂越・室津
※私が歩いたコース
 - 西海路……………鹿児島→伊集院→川内(京泊・船間島など) ~~~平戸~~~大里(小倉) ~~~坂越・室津
 - 九州路……………鹿児島→伊集院→川内(向田)→西方→阿久根→出水→米之津① ~~~日奈久→八代 ②→水俣→津奈木→佐敷→田浦→日奈久→八代
- いつ始まったのか……………私は1624年鹿児島発に始まるとする
⇒資料(6~7ページ)
- 参観交替の規則……………四月中に参観できたか。実は大名だけでなく親子3代で参観交替したりしたこと等
⇒資料(8~9ページ)
- 参観交替にかかった日数は……………平均は? 最長は? 最短は?
⇒資料(10ページ)
- 参観交替しないこともあった、いつ終わったか
⇒資料(11ページ)
- 島津齊彬の参観の例……………江戸まで45日掛った。33日目まで彼は西洋式時計で時間を計り記録している。
⇒資料(12~最終15ページ)
- 最後に、
私は宮崎細島まで5日(鹿児島-福山含まず)、赤穂市坂越(サコシ)から大津まで13日、東海道28日総計46日で歩きました。
東海道は有名で道筋もほぼ分かります。しかし、大坂までは果たして正確であったか自信はありません。
……………ついでに……………
①今九州路は日奈久まで来ています。ただし、津奈木・佐敷の二太郎は海岸線を歩き、赤松太郎だけは越えました。
②今は西南戦争の懲役人申上書をパソコンに打込んでいます。

(日向路)

年代順	年代	藩主	参観	下国	日数	経路	要地	加治木	国分	福山	都之城	都於郡	高岡	高城	佐土原	都濃	日州細島	美々津	鶴崎	豊前小倉
4	1647年(正保4)	光久	参観		49	日向	細島										●			
6	1655年(承応4)	光久	参観		55	日向	細島										●			
9	1661年(万治4)	光久	参観		52	日向	細島										●			
10	1662年(寛文2)	綱久	参観		55	日向	細島										●			
11	1669年(寛文9)	光久	参観		63	日向	細島										●			
12	1671年(寛文)	綱貴	参観		67	日向	細島										●			
13	1672年(寛文)	綱久	参観		55	日向	細島										●			
14	1673年(寛文)	光久	参観		71	日向	細島										●			
16	1676年(延宝4)	綱貴	参観		41	日向	細島					●					●			
19	1684年(天和4)	綱貴	参観		47	日向	細島										●			
20	1689年(元禄2)	綱貴	参観		45	日向	細島										●			
21	1693年(元禄6)	綱貴	参観		46	日向	細島										●			
22	1696年(元禄9)	吉貴	参観		44	日向	細島										●			

29回 1 2 2 2 2 5 2 3 1 24 1 1 2

(西海路)

年代順	年代	藩主	参観	下国	日数	経路	要地	加治木	大口路	高城	向田	京泊・船間島	久見崎	薩之西浦	平島引水	阿久根	脇元	出水瀬	長崎平戸	豊前小倉	豊州大里	下関	赤間關	
7	1624年(寛永1)	家久	参観		147	西海	出水瀬(瀬之浦)											●						
9	1637年(寛永14)	光久	参観		38	西海	阿久根								●									●
10	1646年(寛永23)	光久	参観		54	西海																		●
11	1647年(寛永24)	光久	参観		60	西海	海路干西洋																	●
13	1649年(寛永26)	光久	参観		53	西海	薩之西浦							●										
16	1651年(慶安4)	光久	参観		45	西海	薩西岸							●						●				
18	1657年(明暦3)	光久	参観		64	西海	平戸							●						●				●
20	1659年(万治2)	光久	参観		55	西海	薩西地							●										
22	1663年(寛文3)	光久	参観		54	西海	薩西岸							●										
24	1664年(寛文4)	綱久	参観		49	西海	薩西岸							●										

25	1665年(寛文5)	光久	参観		52	西海	薩西岸																	●
27	1667年(寛文7)	光久	参観		61	西海	薩西津																	●
29	1670年(寛文)	綱久	参観		44	西海																		●
31	1671年(寛文)	光久	参観		53	西海	京泊津																	●
35	1675年(寛文12)	綱貴	参観		41	西海	薩州高城郡京泊津					●												●
37	1674年(延宝2)	綱貴	参観		45	西海	京泊																	●
39	1675年(延宝3)	光久	参観		161	西海	京泊																	●
41	1677年(延宝5)	光久	参観		64	西海	平島引水																	●
43	1678年(延宝6)	綱貴	参観		39	西海	久見崎																	●
44	1679年(延宝7)	光久	参観		98	西海	久見崎																	●
46	1680年(延宝8)	綱貴	参観		32	西海	京泊																	●
48	1681年(延宝9)	光久	参観		64	西海	平島																	●
49	1682年(天和2)	綱貴	参観		61	西海	京泊																	●
51	1683年(天和3)	光久	参観		61	西海	平島																	●
54	1685年(貞享2)	光久	参観		65	西海	京泊																	●
56	1686年(貞享3)	綱貴	参観		42	西海	川内向田																	●
58	1687年(貞享4)	光久	参観		68	西海	京泊																	●
61	1688年(貞享5)	光久	参観		68	西海	京泊																	●
63	1690年(元禄3)	光久	参観		71	西海	薩西岸																	●
65	1691年(元禄4)	綱貴	参観		60	西海	京泊																	●
67	1692年(元禄5)	光久	参観		72	西海	薩西岸																	●
69	1695年(元禄8)	綱貴	参観		43	西海																		●
72	1697年(元禄10)	綱貴	参観		41	西海	京泊																	●
74	1698年(元禄11)	吉貴	参観		50	西海	阿久根																	●
75	1700年(元禄13)	綱貴	参観		53	西海	京泊																	●
77	1702年(元禄15)	綱貴	参観		33	西海	京泊																	●
78	1706年(宝永3)	吉貴	参観		56	西海	播州室津																	●
79	1708年(宝永5)	吉貴	参観		54	西海	播州室津																	●
80	1721年(享保6)	繼豊	参観		53	西海	川内																	●
82	1748年(寛延1)	宗信	参観		121	西海	久見崎																	●
83	1702年(宝暦12)	重豪	参観		72	西海	阿久根																	●
86	1778年(安永7)	重豪	参観		42	西海	山陽																	●
87	1792年(天明2)	斉興	参観		75	西海	川内																	●

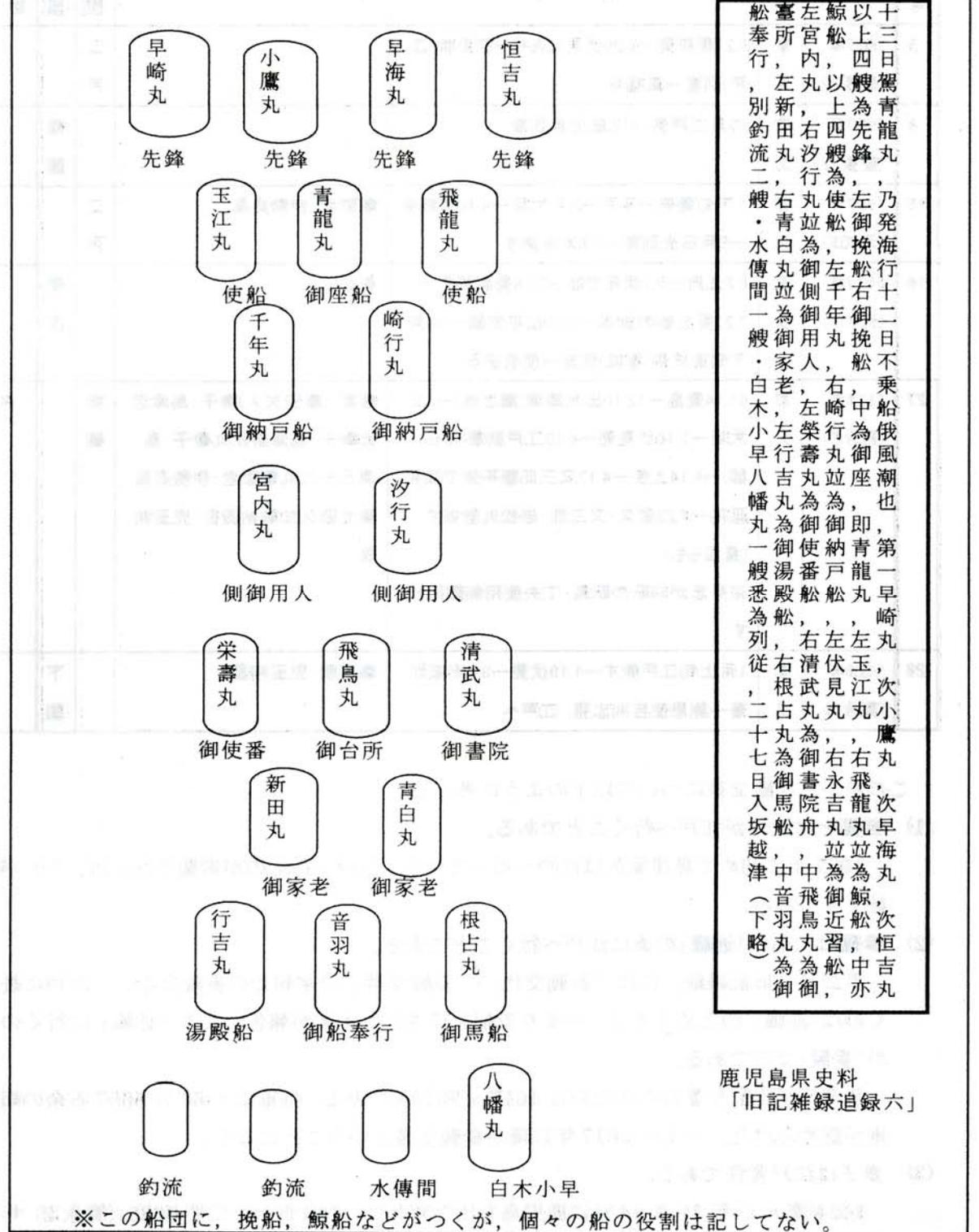
87回 1 1 2 3 2 25 6 13 10 6 8 6 6 2 1 1 13

(九州路)

年代順	年代	藩主	参観	下国	日数	経路	要地	山野金山	大口路	豊前田之浦	向田	京泊・船間島	久見崎	薩之西浦	阿久根	臨元	出水瀬	米之津	日奈久	肥後佐敷	八代	天草中軍浦	肥前寺井川	筑前木更之瀬	柳川	福岡	豊前小倉	豊州大里	下関	赤間關	
1	1681年(天和1)	吉良	参観		82	九州	出水																								
3	1701年(元禄14)	吉良	参観		58	九州	大里																								
6	1703年(元禄16)	吉良	参観		59	九州	大里																								
8	1704年(元禄17)	綱吉	参観		39	九州	大里																								
10	1704年(宝永1)	吉良	参観		29	九州	大里																								
14	1710年(宝永7)	吉良	参観		74	九州	大里																								
16	1714年(正徳4)	吉良	参観		77	九州	大里																								
18	1716年(享保1)	吉良	参観		58	九州	大里																								
20	1718年(享保3)	吉良	参観		67	九州	大里																								
22	1720年(享保5)	吉良	参観		78	九州	中国																								
24	1723年(享保6)	綱吉	参観		61	九州	大里																								
26	1724年(享保9)	綱吉	参観		60	九州	大里																								
28	1727年(享保12)	綱吉	参観		60	九州	大里																								
30	1729年(享保14)	綱吉	参観		60	九州	大里																								
32	1732年(享保17)	綱吉	参観		60	九州	大里																								
34	1734年(享保19)	綱吉	参観		59	九州	大里																								
36	1736年(享保21)	綱吉	参観		74	九州	大里																								
38	1746年(延享3)	宗徳	参観		59	九州	大里																								
42	1749年(寛延2)	重豪	参観		55	九州	大里																								
44	1752年(宝暦2)	重豪	参観		81	九州	大里																								
45	1754年(宝暦4)	重豪	参観		70	九州	大里																								
49	1764年(宝暦14)	重豪	参観		52	九州	大里																								
51	1766年(明和3)	重豪	参観		56	九州	大里																								
52	1768年(明和5)	重豪	参観		53	九州	大里																								
54	1770年(明和7)	重豪	参観		63	九州	大里																								
55	1772年(明和9)	重豪	参観		60	九州	大里																								
57	1774年(安永3)	重豪	参観		44	九州	大里																								
59	1776年(安永5)	重豪	参観		44	九州	豊前州大里																								
61	1780年(安永9)	重豪	参観		40	九州	大里																								
63	1782年(天明1)	重豪	参観		37	九州	山陽																								
65	1784年(天明4)	重豪	参観		48	九州	大里																								
67	1787年(天明7)	重豪	参観		57	九州	小倉																								
68	1790年(寛政2)	斉宣	参観		75	九州																									
70	1813年(文化10)	重豪	参観		38	九州	大里山陽																								
71	1844年(天保15)	斉興	参観		50	九州	小倉																								
72	1847年(弘化4)	斉彬	参観		55	九州	大里山陽																								
73	1848年(嘉永1)	斉興	参観		49	九州	大里山陽																								
75	1852年(嘉永5)	斉彬	参観		46	九州	大里山陽																								
77	1854年(嘉永7)	斉彬	参観		45	九州	大里山陽																								
78回								1	2	1	7	1	1	2	3	3	2	24	4	2	1	2	1	1	1	1	1	14	50	2	19

資料：参観船の例(記事を元に図にしたもの)

島津重豪の参観船構成図：明和7年(1770)2月13日，大里発



十三日駕青龍丸，乃發海行十二日不乘船俄風潮也，第一早崎丸，次小鷹丸，次早海丸，次恒吉丸，亦以上四艘為先鋒，左御挽船右御挽船，中為御座船，即青龍丸，左伏見丸，右永吉丸，並為御船，中飛鳥丸，左宮内丸，右汐行丸，並為御船，右清武丸，右根占丸，為御船，中音羽丸，為御船，左新田丸，右馬船，並為御船，別釣流二艘，水傳間一艘，白木小早八幡丸，為御船，悉為列從，二十七日入坂越津(下略)

鹿児島県史料「旧記雜録追録六」

※この船団に、挽船、鯨船などがつくが、個々の船の役割は記してない。

●参観交替はいつ始まるのか

番号	年代	藩主	参観交替の内容	主な御供ほか	参観	下国	日数
5	1607年 (慶長12)	家久	6.27麓府発→8.26伏見にあり→初武都(江戸)到着→真福寺		江戸		
6	1607年 (慶長12)	家久	10月江戸発→12.鹿児島到着			帰国	
15	1617年 (元和3)	家久	1下旬麓府→平戸→2月大坂→4.18京都発→5月日光到着→5.9本多謝す	●家老:伊勢貞昌	江戸		
16	1617年 (元和3)	家久	6.8江府→7.7伏見で能→7.18秀忠謁見→7.21秀忠参内御供→10.8松平定綱→10月下旬鹿児島(著城)到着→使者を送る	●なし		帰国	
27	1624年 (寛永1)	家久	11.14麓島→12.10出水瀬浦(瀬之浦)→2.2大坂→3.18伏見発→4.13江戸到着(桜田邸)→4.14上使→4.17又三郎腹不快で謁見延期→4.23家久・又三郎・岩松丸登城す(貞昌らも) ※秀忠が53駅の駅馬・丁夫使用無制限とす	●妻:(慶安夫人)●子:島津忠元●子:島津岩松丸●子:島津万千代丸●家老:伊勢貞昌●北郷久加●納殿役:児玉利昌	参観		147
28	1626年 (寛永3)	家久	1月上旬江戸発→1.19伏見→3.1府城到着→謝恩使吉利忠張, 江戸へ	●不明:児玉利昌		下国	

この表から参観交替について以下のように考える。

(1) 参観とは大名が江戸へ行くことである。

1607年に初めて島津家久は江戸へ行っている。江戸へ行くのが参観であれば、これが始まりである。

(2) 参観は大名が「述職」の為に江戸へ行くことである。

県公刊「旧記雑録」には「参勤交代」・「参観交替」の字句での表現はない。江戸に赴くのは「述職」のためとする。つまり支配を任された大名が報告つまり「述職」に行くのが「参観」なのである。

島津氏が支配を委ねられたのは1617(元和3)年である。將軍より60万5607石余の領地が認められた。つまり1617年以降が参観交替ということになる。

(3) 妻子は江戸常住である。

1624(寛永元)年11月14日に鹿児島を出た家久は、146日かけて翌1625(寛永2)年

4月13日に江戸に入った。実はこの時には妻子を伴っており、妻子人質政策の先鞭をつけた。この時家老伊勢貞昌も同様にして御供している。下記史料からは、妻子を伴うことを、家久自ら提案、率先実行したことがわかる。妻子江戸常住は1625(寛永2)年に始まることになる。このことは参観交替制度成立の要点である。

(4) 交替とは江戸・国元を1年おきに往復することである。

このようなことを島津氏が始めたのは1620(元和6)年以降である。ただ1621(元和7)年には帰国、また参観そして帰国と年2回しており、必ずしもその原則が確立していない。ほぼ確立するのは1627(寛永4)年以降である。この年、家久は10月19日麓府(鹿児島)を発し、11月28日江戸に到着した。翌年9月28日江戸を発し、10月下旬鹿児島に着した。以降毎年参観交替するようになる。

(5) 帰国後はお礼の使者を送る。

家久は1625(寛永2)年、江戸から京都に行き、また江戸へ引き返す。鹿児島へは翌1626(寛永3)年に帰国した。即日帰国御礼の使者吉利忠張を江戸に送った。このように、帰国を感謝し、御礼の使者を送ることは以後参観交替下国(帰国)の際の慣習となる。

(6) 交替は4月中に行う。

1635(寛永12)年の武家諸法度改正の時に、大名は毎年4月を交替の時期とした。家久は1630年以降ほぼその時期に江戸へ着している。

以上の(1)から(6)の何を参観交替の本旨と考えるかで、成立時期は違うことになるが、私は家久が妻子を連れて江戸に到着した1625(寛永2)年をその成立としたい。そしてそれが確立するのは1630年ごろと考えたい。こうして制度化された参観交替制度は以後230年余に渡って続くことになる。

関係史料(鹿児島県史料「旧記雑録後編四」P822『家久公御譜中』)

「家久嘗蒙 大権現殊恩、欲報無由、顧今天下漸治、然闔國諸侯唯置質於江府、各々還領國、未可謂安泰之術、我此時率妻子而奉仕于武江、僅可報厚恩之萬一乎、家臣伊勢貞昌者土井大炊頭利勝之莫逆也、乃以貞昌蜜談此旨於利勝而后上言、秀忠公大感之曰、泰平之基豈過之乎、家久之忠不可忘矣、於是今茲冬十一月、家久率夫人及息男兄弟三人又三郎・岩松丸・萬千代丸、發麓島日不知(十一月一四日)、赴武都、時伊勢貞昌亦率妻子為供奉、十二月十日出船從薩州出水瀬之浦、翌年二月二日着船于大坂、少間憩息船中之寢窟、而至伏見淹留越年于茲矣」

●参観交替の規則

(1) 参観交替の時期について

表1：[参観の発月・着月]※発月のみ、着月のみの記事も含む

参観	発月	発月	発月	発月	発月	発月	発月	発月	発月	発月	発月	発月	129
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
	27	29	19	12	8	4	3	5	13	6	2	1	126
	20.9%	22.5%	14.7%	9.3%	6.2%	3.1%	2.3%	3.9%	10.1%	4.7%	1.6%	0.8%	
	着月	着月	着月	着月	着月	着月	着月	着月	着月	着月	着月	着月	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
1	5	32	26	15	7	8	3	6	8	10	5		
0.8%	4.0%	25.4%	20.6%	11.9%	5.6%	6.3%	2.4%	4.8%	6.3%	7.9%	4.0%		

表2：[下国の発月・着月]※発月のみ、着月のみの記事もある

下国	発月	発月	発月	発月	発月	発月	発月	発月	発月	発月	発月	発月	135
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
	4	8	12	34	28	20	8	8	8	4	1	0	134
	3.0%	5.9%	8.9%	25.2%	20.7%	14.8%	5.9%	5.9%	5.9%	3.0%	0.7%	0.0%	
	着月	着月	着月	着月	着月	着月	着月	着月	着月	着月	着月	着月	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
1	1	6	5	16	44	20	16	7	8	6	4		
0.7%	0.7%	4.5%	3.7%	11.9%	32.8%	14.9%	11.9%	5.2%	6.0%	4.5%	3.0%		

表3：[上米期間中の参観交替]

藩主	西暦	閏月	年号	発年	発月	発日	参観	下国	着年	着月	着日
22代継豊	1723		享保	8	1	3	●		8	3	4
22代継豊	1723		享保	8	9	27		●	8	12	1
22代継豊	1724		享保	9	12	26	●		10	2	25
22代継豊	1725		享保	10	10	11		●	10	12	26
22代継豊	1727	閏1	享保	12	1	27	●		12	2	26
22代継豊	1727		享保	12	10	9		●	12	12	5
22代継豊	1729		享保	14	1	5	●		14	3	5
22代継豊	1730		享保	15	5	13		●	15	7	1

※享保16年(1731)年には参観はせず、次の参観は享保17年(1732)年であった。

※なお、この期間の上米についてその経緯等を以下記す。

《享保7年(1722)》

●7月3日江戸城に万石以上が登城す(薩摩藩は代理として佐土原藩主島津忠雅が登城した)。ここで

「1万石に米100石づつ春秋両度上ヶ米する」、「大坂か江戸で納める」、「金納ははり紙直による」との3条が示された。

●7月4日江戸家老伊集院久矩・島津久武が国元家老へ書を出した。その中で「在府半年・在国1

年半とす」「反って物入り減かと思ゆ」とした。

※国元家老：島津久貫(内記)・島津久兵(内膳)・北郷久嘉(作左衛門)・名越恒渡(右膳)(家老)

●11月7日大坂御蔵奉行より継豊宛に「請取申米之事」と受取証が出された。それには「米合3647石5斗(但京升)、内618石5斗は琉球国高之分」とある。

表4：[親子での参観交替例](表では島津氏の家系順で記してある)

藩主	年齢	西暦	閏月	年号	発年	発月	発日	参観	下国	着年	着月	着日
19代光久	54	1670		寛文	10	4	25		●	10	6	11
20代綱貴	21		6			10		●	7		25	
20代綱貴	22	1671		寛文	11	2	16	●		11	5	4
19代光久	55		5			28	●		7		21	
島津綱久	40		6			3		●	7		25	
島津綱久	41	1672	閏6	寛文	12	3	21	●		12	5	16
19代光久	56					4	18		●		6	14
20代綱貴	23					6	18		●		閏6	30
島津綱久	42	1673		寛文	13	2	19	江戸で死去		13		
20代綱貴	24		3			6	●		4		16	
19代光久	57		4			16	●		6		28	

※島津綱久は死の前年の1672年(寛文12)年の参観の時、伏見で帰国途次の父光久と会っている。

綱久

は襲封前の1673年(寛文13)年死去、享年42。従って藩主の座はその子綱貴が継ぐことになる。

●参観交替にかかった日数

参観

日数	九州	西海	日向	(空白)	総計
161		1			1
147		1			1
121		1			1
98		1			1
82	1				1
81	1				1
78	1				1
77	1				1
75	1	1		1	3
74	2				2
72		2			2
71		1	1		2
70	1				1
69				1	1
68		2			2
67	1		1	1	3
65		1			1
64		3			3
63	1		1	2	4
61	1	3			4
60	5	2			7
59	3				3
58	2			2	4
57	1				1
56	1	1			2
55	2	1	3		6
54		3		1	4
53	1	4		1	6
52	1	1	1	2	5
50	1	1		3	5
49	1	1	1	2	5
48	1			3	4
47			1	1	2
46	1		1	1	3
45	1	2	1	2	6
44	2	1	1	1	5
43		1		3	4
42		2			2
41		2	1		3
40	1			1	2
39	1	1			2
38	1	1			2
37	1				1
33		1			1
32		1			1
29	1				1
(空白)				9	9
総計	39	43	13	37	132

参観平均：57.0日

下国

日数	九州	西海	日向	(空白)	総計
131	1				1
84	1	1			2
79		1			1
78	1	1			2
77	1				1
75	1	1			2
73	1				1
72		1			1
71		1			1
70		1			1
69	1				1
67				1	1
66		2			2
65		1			1
64	1	1			2
63	1	2			3
60	4	2			6
58		2			2
57	2			2	4
56	2	1		3	6
55		1			1
54				2	2
53	3	1		1	5
52	2	2	1	1	6
51		1	2	3	6
50	1			2	3
49	4			2	6
48	1	1		5	7
47	1			5	6
46	1	3	1	3	8
45	3		2	2	7
44		1		4	5
43	1			1	2
42		1			1
41	1				1
40	2	1		2	5
39		1	1	1	3
38		1			1
37				1	1
35		1			1
34			2		2
33		3	1	1	5
32				1	1
21			1		1
18	1				1
(空白)		1		6	7
総計	38	37	11	49	135

下国：平均51.9日

●参観交替の免除の場合

幕府の重要政策である参観交替政策に従わないことなどできそうもないと考えるが、実際は、病気などを理由に在府・在国を願う例はあった。

5代継豊は、身体不調を理由に数年にわたって在府した。1737(元文2)年3月16日に「病氣今以全快不仕」「長途之旅難仕」と申し出て「願之通滞府可被致候」と許可を得た。

8代重豪はまだ11歳であった。幕府は重豪を滞府させたまま、薩摩に翌年(1756)「監國使」2人を送り込んだ。

●参観交替の終り

薩摩藩主の参観交替(「下国」)は1859(安政6)年5月19日に12代忠義(茂久)が初入部したのが最後となった。そして「参観」は、翌1860(安政7)年の参観の途中で桜田門外の変の報に接し、筑後松崎駅から引返し、参観は中止となり、以後は参観猶予を出し、2度と行くことはなかった。江戸藩邸を意図的に焼いて、住むところがないとの理由で延引を図ったからである。こうして薩摩藩にとっては1860年が結果的には参観交替は終りとなった。

薩摩藩最後の藩主12代忠義(茂久)の父である「国父」島津久光が国事周旋を済ませて江戸を発ったのが1862(文久2)年8月21日、一行はこの日横浜で生麦事件を引き起こす。参観交替制度はその1月後の閏8月22日に劇的に改変された。「3年に1回、妻子は帰国可」となる。

●参観实例：島津齊彬の安政元年(1854)の参観

旅程	日付	天候	宿駅名	着時間	発時間	休憩時間	里	町	間
1日目	1月21日	晴	鹿児島		10:24 AM		0	0	0
			水上	11:14 AM	12:08 PM	0:54:00	0.5	12	17
			横井	1:47 PM	2:20 PM	0:33:00	1.5	8	49
			五本松	3:30 PM	3:40 PM	0:10:00	1	6	36
			苗代川	5:25 PM			1.5	15	18
			合計	経過7:01	歩行5:24	休憩1:37	4.5	0	0
2日目	1月22日	晴	苗代川		6:40 AM				
			妙見嶽	8:00 AM	8:00 AM	0:00:00	1	9	58
			市来湊御飯屋	9:25 AM	10:17 AM	0:52:00			記事なし
			五反田茶屋	11:20 AM	11:44 AM	0:24:00	1	1	10
			木場御茶屋	12:55 PM	1:30 PM	0:35:00	1	13	53
			向田	2:57 PM			1.5	4	40
合計	経過8:17	歩行6:26	休憩1:51						
3日目	1月23日	晴	向田		6:13 AM				
			高城終平御水茶屋	8:23 AM	9:00 AM	0:37:00	1.5	10	2
			西方御飯屋	9:53 AM	11:40 AM	1:47:00	1.5	10	57
			阿久根伏森口	1:54 PM	2:05 PM	0:11:00	1.5	16	39
			阿久根御飯屋	3:33 PM			1	15	24
合計	経過9:07	歩行6:32	休憩2:35	5.5	0	0			
4日目	1月24日	朝雨(昼晴)	阿久根御飯屋		8:00 AM				
			柴山	9:14 AM	9:30 AM	0:16:00	1	0	45
			野田	10:42 AM	11:35 AM	0:53:00	1	0	44
			高尾野西之平御水茶屋	12:35 PM	1:04 PM	0:29:00	1	0	19
			出水御飯屋	2:19 PM			1	9	48
合計	経過6:19	歩行4:41	休憩1:38	4	0	0			
5日目	1月25日	風雨雪蔽	出水御飯屋		5:40 AM				
			米之津御茶屋	7:16 AM	8:45 AM	1:29:00	1.5	11	7
			笹原御水茶屋	9:09 AM	9:45 AM	0:36:00	1	11	56
			水俣	12:21 PM	1:15 PM	0:54:00	2	0	0
			貫村	3:10 PM	3:37 PM	0:27:00	1.5	0	0
			貫峠(御野立)				0	0	0
			湯浦	6:32 PM	6:53 PM	0:21:00	1	0	0
			佐鋪	8:23 PM			1	0	0
合計	経過14:43	歩行10:56	休憩3:47	8	0	0			
6日目	1月26日	微雪	佐鋪		6:05 AM				
			佐敷峠				0	26	0
			田之浦	8:30 AM	9:03 AM	0:33:00	1.5	0	0
			赤松峠				0	26	0
			二見村	11:10 AM	11:33 AM	0:23:00	1	0	0
			日奈久	12:50 PM	1:47 PM	0:57:00	1	4	0
			平山村				1	0	0
八代	4:05 PM			1.5	0	0			
合計	経過10:00	歩行8:07	休憩1:53	6	0	0			
7日目	1月27日	曇(雪まじり)	八代		8:18 AM				
			種子山村	9:19 AM	9:48 AM	0:29:00	2	0	0
			小川本陣	11:30 AM	12:17 PM	0:47:00	1	20	0
			豊福村	1:44 PM	2:08 PM	0:24:00	1	10	0
			古保里	3:30 PM	3:50 PM	0:20:00	1	10	0
			川尻本陣	5:55 PM			2	0	0
合計	経過9:37	歩行7:37	休憩2:00	7	0	0			

8日目	1月28日	朝雪	川尻本陣		6:35 AM				
			熊本入口	8:07 AM	8:49 AM	0:42:00	1.5	0	0
			同所出切	9:51 AM	10:22 AM	0:31:00	1	0	0
			御馬下村	11:22 AM	11:42 AM	0:20:00	1	5	0
			植木御茶屋	12:37 PM	1:20 PM	0:43:00	1	0	0
			廣野町	3:19 PM	3:40 PM	0:21:00	2	0	0
			山鹿御茶屋	4:57 PM			1	0	0
合計	経過10:22	歩行7:45	休憩2:37	7.5	0	0			
9日目	1月29日	晴	山鹿御茶屋		6:36 AM				
			岩村	8:08 AM	8:29 AM	0:21:00	1.5	0	0
			肥猪村	9:49 AM	10:09 AM	0:20:00	1.5	0	0
			南之關御茶屋	11:29 AM	12:15 PM	0:46:00	2	0	0
			原之町	2:02 PM	2:22 PM	0:20:00	2	0	0
			瀬高御茶屋	4:14 PM			2	0	0
合計	経過9:38	歩行7:51	休憩1:47	9	0	0			
10日目	2月01日	曇(雨少し)	瀬高御茶屋		5:15 AM				
			羽犬塚	8:13 AM	8:38 AM	0:25:00	2	0	0
			一條町(村)	9:24 AM	9:46 AM	0:22:00	1	0	0
			府中久留米侯御茶屋	11:41 AM	12:43 PM	1:02:00	2	0	0
			古賀茶屋	1:52 PM	2:10 PM	0:18:00	1	0	0
			松崎久留米侯御茶屋	3:40 PM	4:00 PM	0:20:00	2	0	0
			乙隈				0	0	0
			山家	6:30 PM			3	0	0
合計	経過13:15	歩行10:48	休憩2:27	11	0	0			
11日目	2月02日	晴	山家		2:31 AM				
			西山村	4:00 AM	4:35 AM	0:35:00	1	12	0
			内野	6:00 AM	6:28 AM	0:28:00	1.5	0	0
			天道村				1	0	0
			飯塚	4:50 PM	※対面のため待つ(昼9ツ来る)		1	7	0
			小竹	6:30 PM	6:45 PM	0:15:00	1	26	0
			直方			0:00:00	1	2	0
			木屋之瀬	9:45 PM			1	6	0
合計	経過19:14		休憩1:18	7.5	0	0			
12日目	2月03日	曇	木屋之瀬		7:45 AM				
			石坂	8:53 AM	9:16 AM	0:23:00	1	0	0
			黒崎	11:13 AM	11:55 AM	0:42:00	2	0	0
			大倉村	1:15 PM	1:32 PM	0:17:00	1.5	0	0
			小倉	2:55 PM			1.5	0	0
			合計	経過7:10	歩行5:48	休憩1:22	6	0	0
13日目	2月04日	晴	小倉		5:28 AM				
			大里	7:02 AM	7:18 AM	0:16:00	1	0	0
			下之關(下ノ関)	9:30 AM	10:12 AM	0:42:00	1	0	0
			長府	11:57 AM	12:22 PM	0:25:00	2	0	0
			清末鞍馬町	2:10 PM	2:35 PM	0:25:00	1.5	7	0
			吉田	4:05 PM			1	11	0
合計	経過10:37	歩行8:49	休憩1:48	6.5	0	0			

14日目	2月05日	晴	吉田 小郡 合計	5:35 AM 5:23 PM 経過11:48	5:35 AM 歩行9:50						
15日目	2月06日	晴雨	小郡 福川 合計	5:55 AM 5:00 PM 経過11:05	5:55 AM 歩行8:56					8	0 0
16日目	2月07日	朝雨	福川 玖河 合計	6:19 AM 5:45 PM 経過11:26	6:19 AM 歩行9:26					7.5	0 0
17日目	2月08日	朝雨	玖河 廿日市 合計	4:30 AM 7:00 PM 経過14:30	4:30 AM 歩行12:18					9.5	0 0
18日目	2月09日	晴	廿日市 西條四日市 合計	5:24 AM 7:53 PM 経過14:29	5:24 AM 歩行11:47					10.5	0 0
19日目	2月10日	晴	西條四日市 尾之道 合計	4:34 AM 7:22 PM 経過14:48	4:34 AM 歩行12:27					11	0 0
20日目	2月11日	晴	尾之道 矢掛 合計	4:20 AM 6:00 PM 経過13:40	4:20 AM 歩行11:42					9.5	0 0
21日目	2月12日	晴	矢掛 藤井 合計	5:25 AM 5:45 PM 経過12:20	5:25 AM 歩行9:56					8.5	0 0
22日目	2月13日	晴	藤井 有年(うね) 合計	5:22 AM 5:47 PM 経過12:25	5:22 AM 歩行10:03					9	0 0
23日目	2月14日	晴	有年(うね) 姫路 合計	5:53 AM 3:36 PM 経過9:43	5:53 AM 歩行7:43					6.5	0 0
24日目	2月15日	微雨	姫路 大蔵谷 合計	6:22 AM 5:12 PM 経過10:50	6:22 AM 歩行8:52					8.5	0 0
25日目	2月16日	曇	大蔵谷 西ノ宮 合計	5:20 AM 4:10 PM 経過10:50	5:20 AM 歩行8:35					7.5	0 0
26日目	2月17日	曇	西ノ宮 大坂屋敷 合計	3:55 AM 11:22 AM 経過7:27	3:55 AM 歩行5:52					4.5	0 0
27日目	2月18日	雨	大坂滞在								
28日目	2月19日	晴	大坂滞在								
29日目	2月20日	晴	大坂屋敷 伏見御飯屋 合計								
30日目	2月21日	晴	伏見滞在								
31日目	2月22日	晴	伏見滞在	齊彬が所司代へ(8:23~9:00), 近衛邸へ(9:32~午後8:27)							
32日目	2月23日	曇	伏見御飯屋 草津 合計	8:00 AM 5:12 PM 経過9:12	8:00 AM 歩行7:02					6.5	0 0
33日目	2月24日	晴	草津 坂之下 合計	5:00 AM 6:20 PM 経過13:20	5:00 AM 歩行10:37					10.5	0 0

34日目	2月25日	記事なし	坂之下 桑名 合計								
35日目	2月26日	晴	桑名 宮								
36日目	2月27日	晴	宮 藤川 合計							10	0 0
37日目	2月28日	晴	藤川 新井 合計							8	0 0
38日目	2月29日	晴	新井 袋井 合計							8.5	0 0
39日目	2月30日	晴	袋井 藤枝 合計							7	0 0
40日目	3月01日	晴	藤枝 興津 合計							7.5	0 0
41日目	3月02日	晴	興津 沼津 合計							9.5	0 0
42日目	3月03日	朝雨	沼津 小田原 合計							8.5	0 0
43日目	3月04日	晴	小田原 戸塚 合計							8.5	0 0
44日目	3月05日	晴	戸塚 品川 合計							8	0 0
45日目	3月06日	晴	品川 芝藩邸 合計							1.5	0 0

※興津の文字不明部分「8ツ半3時過着(山田清見寺見る)」

※山田爲正(御供衆)

地名研究会報

第 99 号

平成 20 年 3 月 2 日

鹿児島地名研究会

I. 第 99 回例会 平成 19 年 1 月 2 日 (日) 於 西郷南洲顕彰館研修室
(出会者) 今村誠一・入来院貞子・上野堯史・内山憲一・川野雄一・築地成郎・
西田春人・濱田良知・脇岡修一郎・平田信芳・二見剛史・松浪由安・
米原正晃 (計 13 名)

II. 大日本地名辞書読会 P. 576~P. 577
岐刀郷・大阿郷・佐多・大隅海峡・小根占

III. 薩軍退路一百里を歩いて

(II. 大日本地名辞書読会は録音ミス。以下の事柄が話題となった)。

祢寝院

平田 大根占と小根占は古代末~中世では祢寝院と呼ばれ、12世紀末の建久因田帳では祢寝北侯(大根占)・祢寝南侯(小根占)に分かれている。平安末には大隅国の在庁官人建部氏が祢寝院に勢力を伸ばしていた。建部氏は平氏全盛期には平氏を名乗り、平氏滅亡後は土着豪族として祢寝氏を名乗った。

祢寝北侯と祢寝南侯の分裂した歴史が尾を引いているのか、平成の合併では両者は統合することなく錦江町(大根占・田代)と南大隅町(小根占・佐多)となった。ねじめ市または南大隅市が出来るかと考えたが希望的観測に終わった。

垂水港から根占・佐多方面に向う路線バスは1日2便もしくは3便になっている。これでは過疎化に拍車がかかるし、観光客誘致は先細りになるのは必然。大隅半島南部は景色がすばらしいのだが。

根占・山川間のフェリー廃止が話題となったが、人の流れから見ると採算はとれない。

岐刀郷

平田 県史は「フナド」と読み、湊の所在

地を想定している。大隅郡にも始羅郡にも岐刀郷があるので両郡の接点を考えるとよい。また「キト」「キタ」の読みが考えられるが決め手がない。

大阿郷

平田 従来、大始良と考えられていた。始羅郷・大阿郷・岐刀郷と続く大隅郡の郷名であり、始羅郷の中に大始良が含まれていたとも考えられるので、大日本地名辞書がこれを大河の誤記と見ている考え方は面白い。小字大河が佐多にあるのは気付かなかった。

大隅海峡

平田 地理学の常識では、黒潮は台湾の北から沖縄本島の西側に入り、トカラ海峡を通過して太平洋に出て、種子島の東を北上するとなっているのだが、昨年口永良部島に行った時舟のピッチングが激しく浪しぶきを頻りに浴びたので同乗の人に尋ねると、こんな穏やかな日は年に二・三度だとのことだった。その時、黒潮の分流が口永良部島と屋久島の間を流れていると直感した。江戸時代、琉球から薩摩に向う船は必ず口永良部島に立寄り、薩摩から琉球に帰る船も口永良部島に寄港し

たという。時代を遡れば、明州（寧波）から帰国の途についた遣唐使船はこの黒潮分流に乗ったと見るのが自然。対馬海流に乗って日本を目指したとすれば五島・老岐・対馬の方に帰り着くことになる。

大日本地名辞書の大隅海峡の記述に「此海峡を流れる黒潮」とあるのは、その裏付けの一つになる。

薩軍退路一百里を歩いて

元々山登りが趣味で、歴史には全然興味はなかったのですが此の会に入って話を聞いたり、鹿児島検定でいろいろ勉強しました。今年の初めに此処で西郷南洲顕彰会のシニアガイド養成講座というのがあり、10回ほど西郷さんの話を勉強させていただきました。それで歴史に興味を持つようになりました。すごく面白いなと思っています。

急に西郷さんが好きになって、歩こうかと思ったのです。その契機というのは明治6年のいわゆる征韓論です。知事が遣韓論を併記せよとか記者団に発表したりという話になって来て、本当の話はどんなことがあったのかと思うようになりました。研究もいろいろ進んでいますけど、やはり西郷さんが正しくて大久保とか伊藤博文とか、あの人たちの陰謀があったのじゃないか。それが原因となり発展して西南之役になったのじゃないかと私は考えます。

実際に歩いてみて、いろいろ感じたことを今日はお話します。此処に地名が掲げてあります。最初、俵野(ヒヨノ)という処からスタートしました。そして此処に日付が書いてあり

佐多辺塚

平田 内之浦辺塚は大隅半島を横断する時バスで通ったけど、佐多辺塚には行ったことがない。黒潮が洗う海岸を見たいものだ。

内山 中国産のペットボトルや発泡スチロール製品が数多く流れ着いて汚い。過疎化でそれを処置する人がいない。うず高く積もったゴミの山にイメージを壊されるだけです。

内山憲一

ます。8月17日というのは実際に西郷さんが歩いた日付です。私なんかは休みがなかったものですから、大体ほぼ同じ行程で歩こうということで、西郷さんが15日で歩いた処を、1日だけ合わせられなくて、16日かかってしまいました。

そういう日程で3月3日に最初歩き出して最後は西郷さんが鹿児島に入った9月1日、その日に合わせて鹿児島に帰ることが出来ました。

歩いた感想としては昔の人は脚が丈夫だったなということでした。私は山登りをしていきますから多少脚には自信があるのですが、それでもやっとなんとか、よくこんな距離を歩いたなと思いました。

そして今は車が主ですから車で簡単に行けますが、昔は山越えだったのです。峠を越える道がメインルートだったのです。今は誰も通らないので峠はもう滅茶苦茶になっています。すごく苦勞しました。こう言ったことが感想です。

2ページ以降に私の話と記者の方が調べて頂いたことを夕刊に5回シリーズで載せて貰

いました。これを見て頂ければ概要が判ります。それに地図が載っています。大まかに言うと、小林まではずーっと山の中を官軍に見付からないように行くのですが、小林から先はほぼ普通の道を歩いています。

それでは写真を見ながら説明します。此処が最初の俵野という処です。此処に児玉熊四郎さんという方の屋敷があって、西郷さんが3日ぐらい居たのです。その時まで西郷さんは陸軍大将の制服を持って行かれたのですが、此処でその制服を焼いたり、いろんな重要書類を焼いたと言います。当時の建物が残っており、コの字型の建物で、その中庭で西郷さんがそういうのを焼いたという話でした。資料館もあって、立派な所でした。全行程の中で、此処が最も西南之役の資料が整っている所でした。

此処は可愛岳の登山口になっています。普通の登山路は歩き易いのですが、西郷さん達が登った道は岩山の道で、途中の此処ら辺から直接頂上へ行かれたと聞きました。

済みません、いきなり可愛岳の頂上に出ました。途中はもの凄く藪で、普通の人はとても行けないような処です。今は林道がありますが、西郷さん達は夜に此処を通って行っているのです。凄く処です。地元の猟師や樵夫たちの道案内で真っ暗な処を行ったと言います。

次の日、この頂上には当然官軍がいましたから、官軍をやっつけて西郷さん達は更に進んだのです。私が歩いた時はちょうどツツジが咲いていましたが、こういうような道なき道を行ったのだと思います。

此処には和久塚(ワクヅカ)という岩山があります。書いてないのですが、あつ、書いてあ

りますね。18日の大台場山(オホダイバヤマ)の次にある和久塚です。そこのすぐ近くが西郷さんの宿営地の地蔵谷(ジゾウガニ)という処です。此処(写真の場所)は、実は地蔵谷じゃないのです。地蔵谷を下って来て道路に出た処が此処だったのです。川の下流に地蔵谷という記念碑が建っています。

地蔵谷というのは山の中に広い谷間がありそこに薩軍600人が誰にも気付かれずに野営が出来るような場所でした。

さらに下に降りて道路を行くと、鬼ノ目山(オノメヤマ)という山、奥の方に大崩山(オホキレヤマ)有名な山があります。凄い岩山です。そこに行く途中になります。

これは祝子川(イハカリ)という川です。そこに現在ダムがあります。この辺が大崩山で、薩軍は鬼ノ目山と大崩山の間の峠を越えます

これが鹿川越(シカワゴエ)。西郷さんは上祝子(カミイハカリ)という処で一泊しています。友納さんのお宅の跡があります。今は建物がないのですが、表示板が立っています。

此処から山に入って鹿川越に行きます。此処が鹿川越です。私が行った頃は雪が残っていました。さらに下って此処はさっきの鬼ノ目山を裏側から見た処で、鹿川という集落になります。鹿川越は北川町と北方町の境になり、鹿川溪谷は北川町にあります。北方町から日ノ影町に入る処が鹿川峠になります。

西郷さんは8月20日に鹿川峠の八合目に泊ります。これは登山口の所にあった宿営地の表示です。これは鹿川峠に行く途中でうしろを振り返ったところです。山の中に宿営地という表示が一本立っています。此処には西郷さんが官軍から分捕った牛を引っ張って来て屠殺して皆で食べたという話が残っており、

戦争に慣れていた西郷さんは塩を持っていたので振りかけて食べた、と。竹筒に塩を入れていたそうです。それは鹿川峠での話です。

鹿川峠を下って行くと、道の跡があるのですけど、崩れてしまって全然使えない状態です。

これは川の向こう岸に出た21日の高橋という処です。橋を渡って湾洞越(ワズゴエ)という処を越えます。湾洞越が全行程の中で、一番の難所といわれる処です。こういう黄色い目印が所々にあります。以前に歩いた人が付けた目印です。これは湾洞越の手前、此処が湾洞越です。大きな岩があって、その間を通り抜けます。詩吟「城山」に百里を帰って来るといふのがあり、その中に壘壁之間といふのがあります。そういう感じの所です。そこを降った処が赤水峠になります。

此処を越えると岩戸(イワト)です。西郷さんは三田井まで行ったのですが、われわれは日没時間切れで岩戸まででした。此処には焼酎工場があり、車マークの焼酎でした。それと岩戸神社といふのでしょうか、立派な神社がありました。

此処は高千穂町です。神様が居られるとのもので一年中注連縄を飾っていました。高千穂町だけでなく、周辺の村も民家は注連縄を飾っています。此処は特別な店で、立派な注連縄を飾っていました。

これは岩戸神社です。岩戸神社は対岸の所と山の所と二カ所あります。もう一つ岩戸越(イワゴエ)という所があります。これは岩戸から三田井へ行く途中の峠ですが、此処に西郷さんが通ったということが書いてあります。ちょうどこの頃は、鯉のぼりにシーズンでした。

此処はアサカベ(浅壁?)という地区で、祠が沢山あって八十八カ所巡りが通るといふ処です。

此処は高千穂線の線路です。トンネルに表示があって、入って行けないようになっています。この時はまだ廃線ではなかったのですが、運行は止まっていた。トンネルの向こうは高千穂線の終着駅です。

これは高千穂峯です。宿营地一覧の所に、三田井には×印が書いてあります。三田井は結構大きな町で、町の真ん中にある農協の横あたりに三田井の区長：そこを治める人の宿舎があったらしいのです。そこに西郷さんは泊ったのですが、泊ったという表示はなかったということです。

高千穂を昔は三田井と呼んでいたのです。三田井は交通の要所で、官軍も配置されていたのですが、少人数だったので簡単にやつつけられます。そしてどこへ行くのか判らないように分捕った米を大分の方に送ったと言います。そして自分たちは南の方に向かったのです。

次は三田井から坂本に行くのです。坂本というのは熊本寄りなんです。真っ直ぐ鹿児島に行くと見せないで、わざとフェイントで坂本に向かったのじゃないか。これも私の推測です。(編集時後記：長井村での論議に熊本隊の面々が熊本城攻撃を主張し、桐野利秋もその気になっていたらしいが、西郷さんの反対でその論は立ち消えとなった。坂本に向かったのはフェイントと見てよいだろう)。

此処は高千穂峽です。おなじみの光景です。これはバス停です。こういう所にも祠があり、信仰の厚い所です。これは二上山(フカヤマ)と言います。此処の横の峠を通過

坂本へ行ったとのこと。南洲顕彰館からこの旗を借りて、背中に付けて歩きました。これは二上山の裏側になります。

此処が専光寺というお寺です。坂本の寺でこういう立派な碑が立っています。誰が通ったというの、ずーっと名前が書いてありました。此処が寺の庫裡で西郷さんも泊ったと言います。外側は造り変えてありますが、部屋の障子だけは代々当時のまま残しているということでした。黒ずんだ障子です。

次に飯干峠(イハシツケ)を越えます。国道が通っていて立派な峠でした。峠に西郷さんが通ったという碑が立っておりました。これは峠を下っているところですが、どこへ行っても此の辺は誰も通らない、人が少ない所で水がきれいな川があります。

此処は諸塚村(モツカムラ)です。諸塚村にも石碑がありました。最後はまた登るのですが、整備された下りの楽な道でした。宮崎県の山奥に行けばよくあるのですが、山の上の方とか中腹に集落があります。鹿児島育ちから見ると不思議なことです。

此処は、耳川という川を堰き止めた大きなダムです。そのダムの下からの道を二・三百メートル上った所に、23日に泊まった松ノ平(マツノヒラ)という集落があります。その中の一軒の庭先に宿泊したという碑があり、説明文が残っています。他人の家の庭先に行かないと見られないのです。建物は全く建て替えてあります。

此処は耳川を渡るところです。ダムの下流ですが水が少ない状態です。此処からは反対に登りになります。此処はもう全く道がなくなって、沢を登って行きました。いわゆる沢登りでした。

越えた所が小麦の越(コムギノシ)という所で24日のところに書いてあります。現在は、地図上では六方ヶ辻(ロホウカツジ)という地名になっています。六方ヶ辻というぐらいですから、いろんな道があるのですが、実際使っているのは一本ぐらいです。ほとんど廃道になっています。林道を造っては放置という感じです。その壊れた林道を通って下に降りて行きました。

此処は、又江の原(マタノハラ)という所です。南洲寺という寺があります。これは24日に泊まった所です。尾迎(オムケ)という所にあつたのですが、二・三百メートル移設されています。西郷さんは泊まらなかったのですが、薩軍が沢山泊まったと言います。ここで官軍を捕虜にしています。その中に軍医がいて、小林あたりまで一緒に連れて行き、怪我人の治療をして貰っています。西郷さんが泊まったのはすぐ近くですが、建物は残っておらずこういう碑が立っています。

さらに南に下って25日の茶屋越(チャヤゴシ)に向かうところです。このように林道も崩れたりしています。また川があって、此の日は五郎越(ゴロウゴシ)というのあって、二つ峠を越えます。此処らあたりはかなり長距離の歩きになります。道自体はそんなにきびしくないのですが、距離がすごく長い。多分1日に30km歩いています。現在は立派な国道になって大した苦労はありませんでした。

此処は銀鏡(シロミ)の手前の所：25日の征矢貫(サヤキ)という所です。菊池家がこの辺にあるらしいのです。

此処は銀鏡の神社。社務所が建て直されています。こう言った所で西郷さんが昼食を食べたとの伝えがあります。此処の神社はいわ

れがあるらしく、鬼の仮面があります。

此処は銀鏡の宿营地。建物は変わっていませんが、西郷さんが泊まった所です。

これは銀鏡から出発して棚倉峠(ナクワトケ)に向かうところです。今までと違ってちょっと怪しい二人がいるのですが、右翼の方で富士華道会(?)の人たちです。百周年の時と今度の百三十年の時も、この人たちはリアルタイムというか、8月17日に俵野を出発して9月1日に城山にと、ぶっ通しで歩いた人たちです。私が歩いているのを知って、一緒に行動しました。西郷さんの御魂を祀った笈というのですか、背中に背負っていました。

これは棚倉峠の場面です。此処までは普通のなんということもない道ですが此処は全然道もなかったりして大変な所でした。一応登ったのですが、下りがひどい処で全然道がなくて大変な目に遭いました。ダニに噛まれて、ひどい目に遭いました。

此処は次の小川(カガリ)という所です。銀鏡の神社裏からちょっと下った所に小川城址という資料館が出来ています。村所(ムラシヨ)と銀鏡と小川に菊池家の屋敷があったとの説明がありました。此処は地図でははっきりしませんが、なだらかな山で、これが天包山(テンホウザン)です(編集時後記：地名の由来からは雨が多い雨包山アツツミヤマで、それが天包山に変化して音読みに変わったのか?)。

天包山には戦場になったという説明板もあります。西南戦争之碑という立派な碑が立っています。裏にはいろいろな説明文がありますが日付が違ったり間違っている所があったりします。此処の駐車場からちょっと登った所ですが、坊主岩(ホウスイイ)というのがありますが凄く大きな岩です。私学校跡と同じように

鉄砲の弾丸の痕が二・三カ所残っています。西郷さんは此処を通ったのですが、それ以前に薩軍が官軍と戦闘をした所です。ですから此処は薩軍が2回来たという所です。此処は車で頂上まで行けるので、途中の道は歩かなくなって滅茶苦茶な道になっていました。此処には菊池氏墓というのが登山道のすぐ脇にありました。登山道というか、村所の中心部に役場があって、役場の上に八幡神社があります。その裏山が菊池家墓になります。

此処が役場の手前です。これは一ツ瀬川です。村所の中心ですが、この家に西郷さんは泊まったと言います。しかし、此処も表示はありませんでした。菊池家の家老の家だったらしく、外観は藁葺きだったらしいのです。外側は造り替えています、中は昔のままということでした。家老の家ということで殿様も泊まりに来るので、どんでん返しがあるということです。近くに中武正親さんという詳しい方がおられて、いろいろ話を聞きました。

国道からさらに中に入って登って行く所ですが、全く道が壊れていて大変な山の中の道を歩いて槻木(ツキキ)という所に来ました。

ずーっと宮崎県を歩いていましたが、此処は熊本県です。普通、県境というのは山があって、山のあっちとこっちに分かれているのですが、槻木は分水嶺よりも宮崎寄りです。出っ張った形の所で、熊本県多良期木町の一部です。

この川はまだ熊本県です。新西郷橋という名が書いてあります。西郷さんが渡るために部下が大木を切り倒して丸木橋を造ったのです。逃げる途中ですから渡り終えたら橋を流すのが通常ですが、流そうとしたら西郷さんが待て、村の人たち役にたつから残せという

ことで橋は残ったと言います。それで西郷橋となって、近くに別の橋を架ける時に新西郷橋と名付けられた。西郷さんの名前が残ったということです。綾北川です。渡ると、いきなり、こういう道が続きます。

此処は須木村堂屋敷(スギムラドウヤシキ)です。此処は宮崎県にもどります。新西郷橋の少し先に川があって、もう一つ橋があります。それを渡ると宮崎県です。

此処は夏木(ナツキ)という場所です。夏木にも西郷宿营地という立派な碑があり、説明が書いてあります。

此処から最後の大変な場所があります。小妻木越(コウマキゴエ)という処です。こういう踏分道がかろうじてあるのです。小妻木越に来ると此処で初めて霧島が見えました。帰って来たとの気分になります。私たちが此処を歩いた時は夏の真っ盛りでした。暑いところに夕立が降って、湯気が立っていました。

石氷川(イシコウリカガリ)というのは小林盆地を流れます。小林は西郷さんが2回通っています。人吉から都城に向かう時に通ったのと、鹿児島に向かう時です。道の看板には子供向けに「西郷どんの道」とルビが振ってあります。2回通ったと書いてあります。その隣が小林城址です。

町の真ん中の歯医者さんの駐車場が宿营地跡で、時任為秀宅に2泊と書いてあります。それはさっき述べたように2回通った時、此処に西郷さんが泊まったということです。

此処ら辺は果樹園があって梨とかブドウの観光農園という形で宣伝しています。道の横に石氷橋というのがあって、そのいわれを書いた表示板がありました。国道を通ったのですが非常に危ない所で歩道もない処でした。

今度は小林からえびのに向かいます。えびのの町は「丸の十の字」があちこちに見られ歴史を感じる所でした(編集時後記：飯野に島津義弘の居城があり、木崎原の戦いで伊東氏を破った歴史がその背景になる)。

これは川内川の上流です。これは国道から見た霧島の眺めです。これは西郷さんとは関係ないのですが、飯野駅ということで里程標がありました。

此処は高速道をくぐる所です。こっち側に越えたところに、現在、コココーラの工場があります。

さらに行くと、このように川を利用したプールがあります。すぐその脇に、富満城址(編集時後記：永享2年・1430年、島津久林が追いつめられて富満城で自害、総州家島津氏の断絶となった)という山城があったということです。

普通の道路はコココーラの手前で川を渡りますが、薩軍は川を渡らずに外側を：川内川の北の方を通過して鹿児島に向かいます。此処が鹿児島に帰る時に通った道です。

何故か知らないけど広がった道が県境だけ急に狭くなっています。通り過ぎると道は広くなるという状態です。隣の県に遠慮した格好です。

此処ら辺は温泉が沢山ありました。般若寺温泉という所です。これは吉松です。吉松の柿木(カキキ)という所に西郷さんは泊まったと言います。柿木集落の景観は昔と変わらないとのことでした。お婆ちゃんがおられて、昔の話をいろいろ聞きました。逃げて戻って来やった(薩軍が帰って来た)時、地元の人が垣根に握り飯を置いて、目立たないように腹ごしらえをさせた、ということでした。

これは吉松から栗野にかけての所です。正面に見えるのは栗野岳です。川内川が狭くなっていて、此処には日本窒素の水力発電所があります。水害でやられた杉が倒れていました。これは栗野です。

此処は横川です。此処ら辺までは国道を来て、北からずーっと南に向かっていたのですが、横川から横に折れて霧島の方に向かっています。(編集時後記：横川・溝辺の間に鹿児島出身の野津道貫が率いる官軍が薩軍の南下を食い止めるために砦を築いて待ち構えていた)。

此処は霧島温泉駅です。駅のすぐ近くに立派な碑があります。次は、高速道をくぐって溝辺の方に行きます。

此処は竹山ダムです。竹山ダムを下ったら高松城址という所です。そして此処から加治木町に入ります。

二見 (写真に写った田圃を見て) そこは私の田圃です。両側とも。

内山 そうですか。次は山田に入ります。そこに日露戦争の凱旋門があります。此処で初めて桜島を見ます。もっと手前からでも天気が良ければ桜島は見えますけど。

此処から蒲生に行きます。蒲生の昔の町、下久徳(シキョウトク)に入ります。鹿児島から行くと蒲生薬局というのがあって、そこを右に入って行く所です。通りに小さな社があって角の家が西郷さんが泊まった淵上(フカミ)家で、昔は立派な屋敷だったそうです。質屋をされていたけど没落したとかで、石垣だけが当時の雰囲気を残しています。全く表示もなく役場に尋ねて判りました。また家の名は忘れましたが、此処は桐野利秋と辺見十郎太が泊まった家だろうということでした。

佐山峠を越えて鹿児島市に入ります。峠を越えて普通はすぐ左に真っ直ぐ行って溪谷園という温泉の方に行くと思うのですが、地図を見てこっちの方がいいのじゃないかと考えこっちに行きました。

此処ら辺で鈍豆を作っていました。そこで原口先生が講演されるというポスターに出会いました。左に曲がると、途中で阿弥陀仏があります。

上野 郡山へ出る道ですね。

内山 そうです。右側はゴールデンパウムというゴルフ場です。左側は吉田の運動公園です。そこを過ぎると吉田の役場跡です。

薩軍最後の行程は蒲生から鹿児島までだったのですが、都合上、吉田まで足を伸ばしておいて、最後の日を吉田スタートで歩いたのです。

此処は高速道の吉田インターの手前です。左折してインターの過ぎて、すぐに右に曲って吉田→花棚(ハナダ)→堀ノ内→野呂迫(ノロコ)→帯迫、と行きました。

実方(サネカタ)の手前に駄馬落(ダバラク)という所があります。西郷さんは馬の扱いが下手だったので荷物を落とした。ただそれだけのことで地名が付いたのです。「積み荷はカラ芋、引き手は西郷南洲翁」。

此処は別府晋介の誕生地です。別府晋介は桐野利秋の従弟ですけど、扱いが違い、家の裏の狭い所に碑があります。桐野の方は立派な公園になっています。また、だいぶ経ってから西郷さんと一緒に官位を与えられています。

これは鞆懸(タンケン)に降りて来る道です。見られての通りの狭い道です。

此処は一つ橋(ヒツバシ)という所です。玉龍

高校前のバス停があって、すぐ右に折れて稲荷川に架かっている橋が一つ橋です。この橋の手前の右側が西郷さんが泊まった家らしいのです。一茶館と思っていたのですが、一茶館の向い側にある文具店の所が田中七之丞宅跡(編集時後記：明治10年9月1日、11時頃から深夜城山に入るまで田中七之丞宅が薩軍本営になった)。

蒲生も此処もそういう碑がないのです。今まで説明したように、各地に碑が立っているのです。表に○×を付けておきましたが、お膝元の鹿児島に碑が立っていないのはおかしいと思い、1月半ぐらい前新聞に投稿しました。それも資料の最後に付けておきました。

一つ橋のすぐ近くが福昌寺跡です。西郷さんは義理に厚い人ですから、斉彬公の墓に詣られたのじゃないかなと思います。

これは終焉之地です。終焉之地に行ったらいろいろな野菜・果物・魚が供えてありました。例の右翼の人たちが先に着いて立派な祭壇を作っていました。異様な雰囲気だったのですが、知らん顔も出来ないので挨拶をして来ました。

そこから城山を登り展望台に行き、ドン広場へ行きました。此処はドン広場の一番高い所です。薩軍本営跡ということになっています。そして山を下り洞窟で終りにしました。

洞窟の前に温泉があり、長寿泉という温泉ですが、そこに入って家に帰りました。城山の中にも温泉があるので、びっくりしましたが、なかなか良い温泉でした。

薩軍帰還路踏査は無事終了しました。此処に9月1日に着いて、9月24日に最後を迎えるわけです。その間、3週間ぐらいの城山籠城になります。あっちこちで官軍を出し抜

いているもんですから官軍としてもこの城山で取り逃がすことは出来ない、相当慎重に構えたのだと思います。300人ぐらいの城山籠城者に対して、5万人ぐらいの官軍がいたわけですから全然比較にならないのです。話を聞いてみると、外部との往来も出来ていたみたいです。

最後の24日の日でも洞窟から岩崎谷の方へ歩いて行って最後を迎えることになります。あくまでも戦うという姿勢で全滅したわけです。それが西郷さんの気持だった。少し行った所で辺見十郎太がこの辺でどうでしょうと西郷さんに伺いを立てますが、まだまだと云って結局岩崎谷の下の方で弾丸を二発受けて「晋どん、もう此処でよか」と云って介錯を受けた。あくまでも自分たちは間違っていないとの気持で行ったのだと思います。

それは何故かという、明治6年にいろいろな経緯があります。「一の秘策」とか云ってひどいことを大久保がして話がひっくり返ったわけです。また2回目に西郷さんが島流しになりますけど、そのきっかけは大久保が久光に讒言したのじゃないかとの説もあるみたいです。

明治6年、いろいろなやりとりがあって大久保と西郷が喧嘩をしますけど、その時に大久保が西郷に留守政府は何もしないという約束だったのに、いろいろなことをしたと云ったら、ひどいのはお前の方だと、西郷が云ったらしいのです。お前がひどいことをしたのを知っているのだ、と。そういう意味だったのじゃないかとの説もあります。

西郷さんは自分を説明することのなかった人だった。だから判りにくいこともある。勝てば官軍と云いますが、大久保は生き残っ

た方ですから歴史を操作した可能性もあります。俵野でいろんな重要書類を焼いたということですが、それを考えると興味深く、いろんな考え方があるのだなと思っています。

シニアガイドの研修を受けて、もろに西郷側の話をどんどん聞いていますが、そうじゃないという説もいっぱいありますし、そっちの方が正しいのかも知れません。兎に角いろんな西郷の説を勉強して、大久保の方の話を聞いていろんなことを知っていききたいと思います。

ひどい目にあって引き下がれない、常に戦う姿勢で最後を迎えたのが西郷さんじゃないか、というのが結論です。

〔質疑応答〕

平田 右翼の人たちは毎年供え物をあげているの？

内山 百周年の時と、今年が百三十周年ということで。百周年の時も結構大変だったみたいですが、今度も大変で風呂など入らずにそこら辺の川で洗い流したとか。東京からも5人ぐらい来ていたようです。

平田 兎に角、薩軍の退路を歩いた人は、あんたが初めてだろうと思うのだけど、検証する意味で歩いた人はいないので、その意味で非常に貴重な体験だと思います。

行程について記録を残しているのは「平田盛二日記」というのがあります。それを宮崎の友人が欲しいというので、コピーを送ってやったのだけど宮崎の連中はほとんど歩いていないのです。あんたは一般人として初めてだろうと思うけど（笑い）、それほど凄い事をやったと思います。そう簡単に歩く人は出て来ないと思います。よくも甲南民族には人が揃ったもので（笑い）、江戸までの参観

交替路を歩いたり、薩軍退却路を歩いたり（笑い）。

浜田 どんな方々が一緒に歩いたのですか
内山 私は山の会をしているのですが、私じゃなくて私は顧問です。私が最初に作ったのですが、会長は、今、別の人がしています。インターネットで誰でも申し込める形になっています。

浜田 どの人たちですか。

内山 大体、鹿児島市です。串木野とか岩川とか。一番左の二人はひよんなことで参加した人です。最初の俵野から歩き出す時に、宮崎日々新聞に話をしたので小さな記事になったのです。それをたまたま大分県の方が宮崎県に来ていて新聞を見たので、参加させてくれと云って来ました。宮崎日々新聞の記事にホームページのアドレスが出ていたのですが、宮崎の人は誰も来なくて大分の方が2～3回途中で参加されています。すごく熱心な方でした。

平田 現在、熊本県と大分県で西南戦争の研究が盛んです。鹿児島県の連中は少々冷めている。西郷南洲顕彰館以外はね。

内山 大分県も西南之役には立派な方が参加されているのですね。

平田 大分県は自衛隊出身者が研究している。西南戦争当時の銃砲の研究を盛んにやっている。また南日本新聞が西南戦争百三十年という企画で、熊本日々と宮崎日々とを誘って熊本・宮崎・鹿児島三県の共同企画という事を進めているけど、大分県を誘っていない。

米原 道なき道の所を、これが当時の道かと迷う所をいっぱいあったのでしょうか。

内山 えー今思い直して、新西郷橋がありましたけど、あすこは多分私が間違った道を

通っていると思います。西郷橋を渡らなければならなかったのに渡らなかったのです。あすこは違ったかな、と。峠は一緒ですけど。多分、昔のことだから大体川を遡って、その道を行ったと思います。

二見 私も一緒に歩いてみたい、と思うのですが。

平田 一番大事なのは鹿児島県内を歩くということ。

米原 一部分であっても鹿児島県内は歩いてみたいですね。

二見 山田を歩いてますね。それから竹山ダムの所は全く道はなかったのです。

内山 あゝ。

二見 竹山の山の中に私の山があり、そこに二転三転した道があったのです。また当時は橋がなかったのです。大正の頃に石橋を造った。その橋も壊れている。さっき田圃の写真がありましたが、あすこの橋はかろうじて残っている。その上に県道が走っている。

それで記録の5のところ、湧水町川西から鹿児島市城山町への道、この間の史蹟と道をもう一遍調べあげて歩いてみたらもっと詳しいことが判ってくる。その上で私のうちの山の中とか道路の脇あたりに碑を建てれば建てられる場所が何カ所かありますので。

平田 地主が場所を提供するそうですから（笑い）。

二見 予算はないけど、道探しと一緒に歩いてみませんか。

内山 小林から鹿児島までは誰でも時間をかければ歩けるのじゃないですか。

二見 横川・溝辺・山田というふうになって来ますよね。途中で薩軍と官軍との攻防があって、こっちへ抜けて来た。

内山 そうですよ。横川では官軍が陣地を構築して待ち受けていた。

二見 どの道を来たのかは知らんけど、昔の道を迎ればかなり違ったコースが残っているのです、山の中に。そこを私たちが小学校まで6キロメートルの道を9年間通ったのです。竹山ダムというのは全く新しい所です。

内山 川の対岸ですね。

二見 山の中に私たちがずーっと通った道があります。そこを払って歩けばよいでしょう。

上野 「ひろば」に投稿された「高千穂・銀鏡・村所・蒲生・鹿児島」には表示がないと。私が思うのは蒲生ですけど、蒲生の従軍者が熊本県で降参してるのです。球磨川辺の処で。その人たちが帰ってきているから蒲生には複雑な人間関係がある。しかも蒲生町長をされた晋(スム)先生（日本史専攻）という方がおられる。本も書いておられるけど、それによると幕末の有力政治家なんですね。蒲生の薩軍はその人の指導で降伏した。そういう人間関係を考えると碑を建てたくない気持があるかも知れませんね。

内山 私は村所と蒲生は家を持っている方がそこに住んでいないからと聞きました。村所の人は宮崎に住んでいて、なかなかO.K.が貰えなかった、と。

平田 鹿児島県の人たちは田原坂、熊本城攻撃、可愛岳突破、帰還路そして城山ぐらゐが戦場と見っていますが、鹿児島県のあちこちで戦闘を繰り広げているのです。その検証を各市町村の郷土誌が少し触れているだけで総体対な把握をしていない。蒲生の人たちが碑を建てていないのは、そんなことが響いているのじゃないかと思っています。

蒲生と出水が降伏したことは市町村郷土誌にもはっきり書いてあるし、西南戦争に関する本には大抵書いてある。春山原の戦闘、大崎の荒佐野の戦闘の後、鹿児島県出身者はほとんどが降伏しているのです。それをどの市町村郷土誌も触れていないのです。その事をすべて忘れてしまっている。延岡まで逃げて行ったのは西郷親衛隊だけで、鹿児島の連中は7月段階でほとんど降伏している。精鋭部隊だけが随って行っているのです。

そう言った点も西南戦争では見直す必要がある。鹿児島県のあちこちで戦闘が繰り広げられた。一番大事な事は、鹿児島県に入ってからどういう態度をとったか、ということを引きちと検証しなければならない。

二見 薩軍の通った道とか休憩所とか、溝辺では石原辺りになるでしょう。休憩したという話は残っている。

平田 それは攻め上る時です。横川の人達は薩軍が二度来て戦争をしたというのをよく調べています。

二見 行く時も通り道だったから、いろんな話が伝わっているのでしょう。

平田 今話題になっているのは帰って来る時のことで、横川で薩軍を食い止めたのは鹿児島出身の野津道貫なんです。官軍側も薩軍が帰って来る道をよく知っていた。薩軍本隊は栗野から踊(牧園)へ向きを変え、天降川の左岸から渡って上床山の下あたりで溝辺を横切って竹山の方に向かって行くのです。

鹿児島に帰って来る時も帯迫で官軍が待ち構えていた。そこで戦闘して、一部は伊敷の方に向きを変えます。官軍にも薩摩出身がいたので、来る道に待ち構えていた事を知らなければならぬ。

上野 私は今「征西戦記」を見ているのですが、宮之城にも宮之城出身の大浦兼武が先頭で入って来る。正確に道を知っているのです。それを見て行くと、出身地鹿児島というのが相当出て来るのです。向こうでは鹿児島の連中を東京に残しておく、西郷軍に加担する恐れもあるとのことで、前線に出したとの説もある。また何故か同じ聯隊を第二旅団・第三旅団とさっさと分けるのです。それも他県中心です。鹿児島出身を分散させた。鹿児島の軍人だから、そのように見られていたのでしょうか。

それから鹿児島県で戦争をしたということは意外と知られていないのです。ほとんどが熊本県と宮崎県と思込んでいます。鹿児島で戦争したのは西郷さんが戻って来やった時だけだと思っている人は沢山おられます。

平田 それともう一つ、薩軍に参加して阿久根出身者が阿久根で戦死した。高江出身で高江で戦死、敷根出身で敷根で戦死など地元での戦死者が意外に多いのです。

西南戦争の後始末をしていない。わが郷土の者で薩軍に参加し、戦死したのはこれこれと名前だけを列挙して済ませている郷土誌が多い。何処で戦って何時戦死したということを書いていないものが多い。年月が経つと忘れてしまいます。

それは兎も角として、薩軍の経路は大事な古戦場ですからね。また、これだけを実際に歩いた人はいなかった。

米原 開拓者だからね。

二見 鹿児島県の中でも、この通った道を平田 きちんと検証しなきゃいかんね。その時は指導を頼みますよ。

浜田 地図に書き込んだのはないですか。

内山 それがないのです。一応、5万分1図に書いておきました。通った宮崎県の地図に印を付けました。

平田 鹿児島県内はないね。

二見 古い地図というのはどの辺まで遡りますか。

平田 明治17年の5万分1図があります。それにもとづいて計画を進めるとよいと思います。

二見 それは手に入りますか。

平田 平凡社の歴史地名大系「鹿児島県の地名」に付録として入っています。あれは20万分1図か。

脇岡 国土地理院に5万分1図がありますよ。一番最初の5万分1図が。国土地理院に復刻版があります。

平田 県立図書館も持っているかもね。

米原 明治20年代のものかな。

平田 明治の中頃の地図ならば、まだそんなに道路は造られていないから記録としては利用価値がある。その地図に出て来る道は歴史が古いと見てよい。

上野 インターネットでアクセスすれば、無料でコピー出来ます。私の参観交替の地図も、国会図書館にアクセスして、無料で部分コピーしました。片仮名混じりの地名で、しかもコピーで作られているから地図も見にくいのですが、それでも判るのです。

浜田 国会図書館が持っている資料をパソコンに打ってあるので検索出来るのです。一番大きな地図は国会議員の秘書にコピーを頼めば手に入る(笑)。

平田 それは兎も角としても薩軍が帰って来た道を検証する必要があるね。

上野 以前私は西郷さんが行った道を熊本

まで歩いたのです。だが帰って来る道は負け戦ですから、まだ実行してないのです。どの道を通って、どこで戦ったか、地図を見ながら整理しているのですが、メインとなる地図がないのです。今までないのがおかしいと、私は思います。地図を確かめながら戦闘の旅を辿んなさい、という作業をさせていない。

平田 歴史理解の基礎的作業をまだやっていない。横川で食い止められて、栗野に泊まっているのかな。

内山 泊まってないです。

平田 道を変更して植村に泊まっているのだね。そして天降川を渡って三縄を経て溝辺に出て来る。そして上床山に官軍が待ち構えていた。だからその下を走って逃げて竹山の方に行っている。竹山から山田を通して蒲生に行ったのです。後は佐山峠を通して帯迫で食い止められたということは判っている。それを押さえて古い地図を見れば見当が付くと思う。

上野 竹山から吉田麓に出たら、郡山への道を通ったことになる。道の途中で山を越えて吉田の役場の所を通って行ったらしいのです。

平田 佐山峠から帯迫に向かったことは確かだけど。

上野・内山 その途中が判らない。

平田 昔の地図見たら見当が付くだろうとは言える。

二見 明治17年の地図、それあたりからもう一回勉強しなきゃいけない。

平田 兎に角、9月1日朝、帯迫で戦死した人がいる。

二見 内山さんが歩いたのだからリーダーとして歩けば。

薩軍退路一百里を歩いて

内山 憲一

平田 実行して検証すればよい。南日本新聞を引っ張りださなきゃいかん。この道を検証しよう、と。

二見 飛び石を渡った昔の道を通ったと思うのです。うちの母なんかは七つぐらい飛び石を渡って学校へ行ったと話していました。

平田 そんなのが昔の道でしょう。

二見 明治に入ってからいろんな道が整備されたけど、明治の初めはまだ橋のない所が多かった。西郷さんなんかは、古い昔の道を行ったと思うのです。

米原 飛び石を渡る所はよいけど、ちょっと広い所は渡し舟が必要だった。

平田 簡単に渡しを渡すことは出来なかったはず。

二見 昔の道というのは、何回も改修して変りながら現在の道になっている。今の道はそのまま行っても良い場合もあるし、そうでない場合場合もあり得る。

平田 要するに横川から加治木へ国道を目指したことは確かだけでも、横川～加治木の間で食い止められた。そして溝辺に出て来て辺川の方へ出ようととするのだけど、そこにも官軍がいるとの情報で山田に向かった。

二見 山田に抜けるのは間違うことはないけど、山田から蒲生に向かう道がどこだったというのがよく判らない。

平田 鹿兒島へ帰って来る途中の戦闘の場所、そこで戦死した人たちの名前を押さえて行けば、大体判る。戦死した人が通って来たはずだから。それを探って行けば大体の道の見当が付くのだが。

上野 加治木でたまたま墓を見たら、戦死した日付から西南戦争だと気付いて調べました。参加者なんですけど「加治木町誌」に出て

来ない。現在、墓は納骨堂方式になって古い墓は残っていない。墓を調べるにも多分手遅れじゃないかの気がしている。

二見 薩軍の子孫が竹山にもまだ一人残っている。西南之役顕彰碑にその人は遺族として5万円寄付されたのだけど。

上野 それは墓じゃなくて記念碑ですね。死んだ人は死んだ次は神様ですよ。

平田 薩軍戦死者の名簿は私がリストアップしています。

米原 宿泊はどうしたのですか。それをしないと予定は立たんでしょう。

内山 毎回、大体どこまでという予定を立ててやりました。一人では行けないもんですから、仲間と行って車を先に置いてから歩きました。最後になると参加者がいなくなって私一人だもんだから家内に一緒に行って貰って(笑い)、先に車で行って待ってもらいました。頭があがらなくなりました。

平田 奥さんも甲南民族だからね(笑い)
上野 うちの女房も最初と最後だけは協力しました(笑い)。

平田 内山君の歩いた道を基本として薩軍の退路を検証するよう努力しましょう。竹山を歩く時は二見さんに案内してもらいましょう。

二見 竹山の道は昔は田圃だった。もう少し山よりに昔の道があったし、橋は架かっていなかった。

(以下、テープ切れ、録音なし。何を語ったかの記憶もなし)。

1. 薩軍退路経由地一覧(1877年)

日付	地名	地名	地名	地名	地名	地名
8月17日	俵野	可愛岳 (南面崖下を西へ)	西方稜線	中の越(前軍)		
18日	大台場山	和久塚	稜線	屋形越	地藏谷 (大鹿倉山東南)	
19日	大鹿倉	上祝子				
20日	鹿川	鹿川	東八合目			
21日	小河内	高橋	赤水峠	岩戸 (永野内)	三田井	
22日	神橋	新橋	押方	徳別当	小谷内	戸の口
	坂狩	坂本(専光寺)				
23日	山原	多武木	八重平	並び松	七つ山	穂白尾
	弓木	合嶋	八重	松ノ平		
24日	(東南へ)	恵後の崎	山瀬	又江の原	川上迫	尾迎
	藪町					
25日	古園	榎原	小野	上渡川	征矢(そや)貫	
	銀鏡					
26日	小川	天包山	村所			
27日	縄瀬	合崎	鶴瀬	坂谷峠	下槻木	夏木字中藪
28日	九瀬	神上	小林			
29日	飯野	西川北	水流	岡松	吉松村中津川字柿木	
30日	栗野	米永	会田	横川	山田芦谷原(霧島温泉駅近く)	
31日	赤水	清水岩穴	三縄	山田	蒲生	
9月1日	佐山峠	吉田	吉野	花棚	堀内	野呂迫
	実方	佐衛門坂	一つ橋			帯迫

2. 西郷宿营地一覧

日付	宿营地	宿营地表示	作成時期	建立団体	表示物
15日16日	俵野	○	H16.03	北川町教委	案内板他、資料館
17日	中の越(前軍)	宿営せず			-
18日	地藏谷	○	H17.06	延岡西南役会	標柱(祝子川沿いの道路脇に設置)
19日	上祝子	○	H02.03	北川町教委	案内板
20日	鹿川峠(東八合目)	○	?	?	標柱
21日	三田井	×			-
22日	坂本(恵光寺)	○			石碑(大)
23日	松ノ平	○	S57	諸塚村寿会連	石碑(小)・案内板
24日	尾迎	○	S63.03	南郷村教委	案内板
25日	銀鏡	×			-
26日	村所	×			-
27日	夏木字中藪	○	H03.06	須木村教委	石碑(大)・案内板
28日	小林	○	H16.05	小林史談会	標柱
29日	吉松村中津川字柿木	○	H02かH03	吉松町教委	標柱
30日	山田芦谷原	○	H09.07	牧園町教委	石碑(大)・案内板
31日	蒲生	×			-
9月1日	一つ橋	×			-

地名研究会報

第 100 号

平成 20 年 6 月 1 日
鹿児島地名研究会

I. 第 100 回例会 平成 20 年 3 月 2 日 (日) 於西郷南洲顕彰館研修室
(出会者) 今村誠一・入来院貞子・上野堯史・内山憲一・川野雄一・久米雅章・
築地成郎・西田春人・浜田良知・脇岡修一郎・平田信芳 (計 11 名)

II. 大日本地名辞書読会 P. 578~P. 579
種子島・熊毛・西之表

III. 大隅・薩摩の郡郷名

[話題となった地名および事項] 種子島の古代表記、種子島の音よみ地名、
屋久島の音よみ地名、現和という地名、多祢国府、薩摩国の郡郷、
大隅国の郡郷、桑原国府、安房と宮之浦、大穴持神社

種子島の古代表記

平田 種子島の表記で最も古いのは日本書紀に出て来る「多禰」です。その次は続日本紀の「多禰」。ところが平城京出土の木簡に「多禰」と書いたものが出て来ました。それで最近の歴史家は「多禰」の文字を使うのです。しかし漢和辞典を引くと、分厚い詳しい辞典でも「禰・禰」はありません。似た形を探すと「執」があります。これは、執行とか執刀・執筆など「執る：とる」という意味です。「執」に近いのは「藝」という文字。今は芸術とか書きますが、以前は藝術と書いた。「苗を植える・種子を蒔く」のが園藝の本来の意味です。「禰」を読むとすれば「ゲイ」としか読めない。「藝」の意味を考えてみると「植える、種子を蒔く」ということのようにです。それで「種子を植える」という意味に理解されて多禰と書いたのかなと思います。もっとも「執+火」は熱(初)だから多禰初→禰と読んだのかも知れません。

最近、多禰を書く人は少なく、また多禰を書く人も少なくなって多禰と書く人が増えて

来ました。日本書紀を引用する時は多禰と書きますが、普通は多禰・多禰を使います。平城京出土木簡の影響は大きいと思います。

これらが古代の種子島の表現として正しいということになっていますが、こんな難しい文字はパソコンでは出て来ません。禰も禰の形で出て来ます。禰も禰もパソコンにはありません。私はこんな難しい文字(禰・禰)を使わなくてもよい「多祢」で済ませと云って来ました。何故かというも莫祢・英祢(アクネ)とか祢占(ネジメ)などは中世文書で皆「祢」を用いているので「多祢」でもよいと考えたからです。一昨年、黎明館の企画展「祈りのかたち」で展示された 500 年前の地図に「多祢」と書いてありました。私が勝手に想像して書いたのですが、古くから多祢という表記が用いられていたのです。判り易い表記「多祢」を定着させたいものです。

種子島の音よみ地名

後で話をする予定でしたが、レジュメの大隅国の郡郷の右下のところに多祢島の郡名に

熊毛(クマカ)・野満(ノマ)・馭謨(コム)・益救(ヤク)があります。レジュメの説明になります。漢字のよみを a = 系統不明、b = 和語：古代日本語、c = 呉音、d = 漢音の四つに分けて考えました。漢字には他に唐音、宋音、明・清音もあるのですが、日本の漢字の大半は呉音・漢音で片づくと思います。唐音は特別な場合だけ漢和辞典に出て来ます。

四つの種類に分けて地名の表記を眺めると多祢島は一番北の熊毛だけが b + b という音で、これは古代日本語的な音。ところが野満・馭謨・益救は全部呉音なんです(編集時追記：多祢^ノ・多祢^ノ・多熱などもすべて呉音)。

呉音というのは中国の南北朝時代、南朝の宋へ倭五王が使節を送っていますから、5世紀頃日本に伝わって来た中国のことばが呉音になります。これに対して漢音というのは北シナの発音で、これは遣唐使が持って来たものになります。ですから呉音や漢音は都で教育を受けた官人でなければ知らないのです。そうすると南の方にこれが集中しているということは、私が4年ほど前に発表した多祢島の国府が南種子にあったとの説の裏付けにもなるのです。多祢島の国府が南にあったことについては鹿大史学会で発表し、歴史読本にも書いて置きました。詳細な地図を付け加えたら論文になるのですが、その暇もなく発表すべき機関誌もないので、一般的な歴史読本に国府の解明は地名が手がかりになると書いて置きました。一応公表してあるわけです。

今回、地名表記を呉音・漢音で眺めていくと新しい視点で分析出来ることに気がきました。呉音・漢音の文字を使っている所は国府周辺に多いということです。

下の方にメモとして書いておきましたが、

種子島南部と屋久島に呉音表記の地名が集中しているのは多祢国府が南の方であったことを示唆していると考えます。また音よみ表記の地名が種子島東岸(安納・現和・安城)・中種子(納官・油久・美座)に見られます。その他に庄司浦というのがあります。音よみ地名は種子島の東海岸にあって、西海岸にはほとんどありません。西海岸にあるのは納官だけです。西海岸の方は北西の季節風が強く冬場は立ち寄れないわけです。冬に行く場合は東海岸を通った方がむしろ安全。しかし外海でうねりが大きいのです。中種子の東海岸はサーフィンの若者が全国から集まって来るぐらいです。地名を見ると、呉音地名が不思議なほど東海岸に集まっています。

屋久島の音よみ地名

屋久島の音よみ地名は、一湊(イツウ)と安房(アホウ)。一湊は漢音、安房は呉音です。他はほとんど和語の表現です。ということは、屋久島の中で一湊と安房が重要な場所だったから、中国スタイルの表現がなされているのだと考えます。

口永良部島へ行った時、一湊の沖でピッチング・ローリングが激しく波しぶきをかぶりもの凄く揺れたのです。乗っている地元の人に聞いたら、こんな波しづかな日は年に1~2回だということです。その時、此処は黒潮の分流が流れているのだと感じたのです。土地の人々には何ということはないのですが、初めて行った者にはびっくりする流れ、うねりなんです。

そこで一湊という漢音の地名は、遣唐使が帰って来る時、最初に立ち寄る湊の意味になる。これは県の維新史料室長の徳永和喜氏が「一湊は遣唐使が最初に立ち寄る湊という意

味だ」と、種子島高校の郷土研究誌に書いてあります。彼とは別の立場・視点で漢字表記の一湊はそういう意味だと判った次第です。

現和という地名

上野 579ページの10行目「近衛家人、見和平次郎有光」とあるのは、現在の地名は現和(ゲンワ)ですかね。

平田 なるほど。見和は現和になるな。

上野 読み方が。

平田 「ミワ」でなくて「ゲンナ」ですね

上野 これは人の名前から来たということですね。

平田 なるほどね。私の読み間違いです。しかし現和の意味は分からない。

上野 読み方は先生の見解から行けば?

平田 現和(ゲンナ)は呉音。

上野 呉音ですかね。

平田 現和はまだ分析していない。ちょっと待ってね。質問があってから辞書を引きますから。現は呉音(ゲン)、漢音(ケン)。現和はc + c型になる。こんなのは暇にまかせて辞書を引ながら呉音だ漢音だと分けて行くのです。

多祢国府

多祢国府については西之表が繁栄したことから北の方が注目されて来ました。ご存知でない方が多いと思いますから、私がどうして南の方に着目したかをかいつまんで説明します。独立した島の国を眺めて見ました。佐渡島・淡路島・隠岐島・老岐・対馬・多祢(種子島)です。多祢を除いて今までに知られている五つの島の国府がどこにあったかを見ると、老岐だけが真ん中であって、他は皆南にあるのです。南のどんな処か。水田地帯なんです。種子島も南種子に水田地帯が集中して

います。そこに目を着けたのが一つです。

国府には国分寺がそばに置かれますが、国分寺のそばには必ず鎮守神としての八幡神社があるのです。これを国分八幡と呼びます。種子島の八幡神社といえば、南種子に真所八幡があります。真所は政所という政庁名ともつながります。その二つ：水田地帯と八幡の存在を念頭に置いて、南種子町に探しに行ったのです。

南種子町の文化財担当者に手紙を送って、〇〇日に行くからと連絡したのです。若い担当者二人が一人ずつ毎日付いて回ってくれたのです。真所でも地表にどんな破片が落ちているかを見て回ったのですが、ほとんどないのです。これはおかしいと思いながら第2の調査地「里」という集落に行くと、土師器・須恵器や青磁・白磁・染付などの破片の散布が見られ、いわゆる真北の方位(北極星を見通した古代の方位)で道路がきちんと造られていることに気がきました。その周辺の田圃も真北方位で地割がなされていたことも判りました。里集落を歩いてみると、一町四方でなく半町ごとに土地の区画が復元出来るのです。そのことが一つです。

南種子町文化財係提供の5千分1字総図をもとの一つ一つの小字のよみを確かめていくと、里集落のすぐ南の田圃に高田(コウダ)。栗屋田(クリヤダ)という地名が出て来たのです。こちらがこれはなんと読むのでうかと聞かないうちに「うちの田圃がクリヤダにある」とか「コウダ・クリヤダ」と説明するのです。誘導尋問でないのに、国府田(コウダ)・厨田(クリヤダ)という地名が出て来たのです。

薩摩国府を調査した時に、国府城のど真ん中に栗屋ケ迫(クリヤダ)という地名があった

のです。また県下の遺跡調査でクリヤという地名がある処に必ずと云ってよいほど墨書土器が出土していて、郡衙跡らしいものが想定されているのです。「厨」というのは此処で出来た物・取れた物を都に運ぶ土地であり、国府の役人たちの賄(まかひ)をする田圃ということで、厨田があるということはすぐ側に国府があったとの決め手になるわけです。

だから①地割、②八幡社の存在、③厨の付く地名、④遺物の散布などから、間違いなく南種子町里に多祢国府があったことを想定出来ます。

また、その周辺を調べると、里から地割と少し離れた1和半〜2和ぐらいの直線道路があるのです。これは昔の種子島の駅路か伝路かも知れない。官道があったとしたら直線的ですから、これは官道の痕跡に違いないと考えたのです。

「里」から1和ばかり離れた処に郡原(コリパロ)という地名があります。従来、郷土史家たちは此処に郡衙があったのじゃないかと見ていたのですが、そこへ行って初めて須恵器の破片を見付けました。遺跡としていい場所なんですね。小字を調べると寺西・寺東という地名があるのです。寺院などはないのですが、そういう地名が残っているのです。もしあったとすれば、そこに島分寺があったに違いない、と考えたのです。国分寺でなく島分寺です。そこまで見当を付けて、南種子町の担当者にゆっくり調べなさいと云って来たのですが、鹿児島大学とタイアップしての広田遺跡の調査が3年ぐらいかかったようです。まだ島分寺までは手が回らないのでしょうか。多祢の国府・島分寺は私が見当を付けて来た処でしづれ見付かると思います。

今回、「里」集落に入って畑を見て廻りました。土師器の破片は随所に見られますし、須恵器や青磁の破片も見付けました。

それともう一つ、これは現地に行く前に調べたことですが、アメリカ軍が写した航空写真と元禄時代の絵図を見比べて、この「里」に道が集中していたことが判りました。古い江戸時代の地図などは役に立たないと思いがちですが、どこが政治や経済の拠点になるかというのが判ります。「里」は古い地図の上でも重要な処であったことが示されているのです。

それにヒントを得て、今度は何に気付いたかということ、大口市の「里」にねらいを付けていたのですが、明治時代の地図に「曾木の里」という地名が出てきたのです。曾木の里の現地調査に出かけると、律令期の大水駅という存在が浮かびあがって来ました。

県内に残っている「里」という地名の処は奈良時代まで遡ることが判ってきたのです。どんな処に「里」があるかということ、甌島の里、市来の大里があります。その他にも川内の宮里、櫻島の古里、串良の有里などがあるので今後リストアップすることにします。

また曾木の里の近くに大峰遺跡というのがあるのです。菱刈町大峰集落の墓地と重なります。川内川の両岸に水田地帯が開けるのですが、水田面から8メートルぐらいの高さの処に墓地があるのです。背後の山自体も水田からの比高が20メートルもないのです。そんな処に大峰という地名が付くのが不自然と感じたのです。本来、「大水根・大水祢」と書いた地名であったら、それが大峰に変化しても不思議ではない、と。そうしたら、謎の「大水郷・大水駅」がこの辺にあったのではとの推理が

働くわけです。

そこで大水郷をどのように考えたかという、此処に曾木の滝、川内川がどのように流れている。此処が菱刈、この川が羽月(ハツキ)川。その上流に平出水(ヒライズミ)川と井立田(イナダ)川。これらの川に沿って、出水と都城(島津荘)を結ぶ道があったのです。曾木里というのは此処になります。下殿渡(シドノワタ)というのも此処。今はなくなりましたがここを宮之城線の鉄橋が渡っていた。そして大口に入って行ったのです。宮之城線の鉄橋があったということだけでなく、此処は古来重要な交通の要所だったのです。この辺を調べて行けば大水郷の中心部も判って来るでしょうし、大水駅の存在も出て来るに違いないと考えます。

羽月川と川内川の合流点に鉄橋が架かっていたというのはどういうことかということ、白鷺が川の真ん中に群がっているのです。白鷺は浮かぶのでなく立つわけですから、そこは人間も楽に渡れる浅瀬だと判ります。調べて行くと豊臣秀吉が20万の大軍を率いて島津征討にやって来ますが、帰る時此処を一気に渡ったとしか考えられない。こういう浅瀬でなければ、20万の大軍は渡れない。そういう処が昔からの交通の要所になるわけです。

そうすると、どういうことがいえるのか。国分→溝辺→曾木→仁王→佐敷が大体一直線に並び、そこに古代官道の痕跡が見えて来るのです。大隅国から大宰府へ向かう駅路の見当が付くのです。

「里」という地名が重要な処だと気付くと此処に大水郷があったとの見当も付きます。

「里」から約1.5和下流に曾木の滝があり、大きな水の流れを見ただけで「偉大な水」を感じるので「大水」という地名は曾木の滝に由来することを直観として感じます。

そこで、どういうことが判るのか。此処に大水郷があった。こっちの方に羽野郷。吉松の古名が筒羽野ですから、羽野郷は吉松から栗野にかけてだろう。大水郷は中世の太良院の地：本城郷と曾木郷。大口は牛尿院。亡野郷というのが出てきますが、これはどう考えても山野以外に考えられない。

菱刈郡の四郷は羽野(吉松・栗野)、菱刈(現菱刈町の北部)、亡野(大口・山野)、大水(中世の太良院：西太良・東太良)に落ち着きます。

少々脱線気味の話になりましたが、「里」という地名一つにもゆるがせに出来ない内容が含まれていることが判ります。

大隅・薩摩の郡郷名 —— 呉音・漢音にもとづく分析 ——

平田信芳

今日で例会は100回になり、この会も25年経ったことになります。会報100号を出せば一応けりが付くと思うのです。今回(99号)の初めの部分は録音のミスで、こういうこと

を話し合ったとの要点をまとめたに過ぎません。だから要点をまとめるだけなら1〜2枚で済むだろうと思うのです。老齢の域に入りましたから、後は大日本地名辞書を読む会に

に限定して2ヶ月に一遍ぐらいにして行ったらどうか。その場合、費用はほとんどいらないのです。二・三百円もあれば足りるわけですけど、隼人研究会や史談会その他も五百円ぐらい集めていますから、一般から仲間を集めるにしても資料代他五百円という形でするのが他の会に迷惑をかけないと思います。

大日本地名辞書は大隅国が済むと薩摩国になりますから、一応読んで行く価値はあると思います。2時間で2枚読めば、3枚は多いでしょうか。2枚ぐらいにして、あとは意見交換をしたり質問をしたり。それと一々誰が発言したかでなく、どういうことが話題になったぐらいなら、会報という形は残して4ページにまとめるのは負担にならないと思うのです。

2ヶ月に一度、会費は五百円、一般の人でも参加して下さいと新聞でも連絡する。25年も経つと古くからの会員はあの世に行っちゃって鬼籍に入った人が増えています。そういう形でやって行きたいと思いますが、よろしいでしょうか。

入来院 これを大きな形にしてもらえたら
平田 2時間、1枚でよいですか。

入来院 1枚でもよいのです。大きな文字で読めるように。

平田 1枚ずつ読んで行ったら薩摩国だけで15~16回でしょうから3年ぐらいかかりません。101回からは2ヶ月一遍、会員以外も参加自由、資料代他五百円という形でやります。

上野 曜日とかは。

平田 今まで通り、第1日曜日。

上野 次は？

平田 6月から。4月は無理。間に合わないから。奇数月とすると1月が大変だから。

偶数月の第1日曜日ということで今まで通り進めましょう。

薩摩国の郡郷名

昔の歴史書は大隅・薩摩の順番で並べるので大隅国から始めるとよいのですが、設置の順からは薩摩国が先で、大隅国は後になります。薩摩国・多祢国が設置されるのは702年以前で、大隅国の設置は713年。

入来院 七百何年？

平田 702年です。多祢も702年。大隅国は713年。713年というのは憶えといて欲しいと思うのです。713年は元明天皇の和銅6年になります。この年に地名は住字2字を用いて表現せよとの命令も出ているのです。地名を2字にせよと命令した年、それから大隅国設置の年。それともう一つは風土記を作れと命じた年です。その意味で、鹿児島県の人三つ一緒に憶えた方が便利です。

それを考えて年代の古い薩摩国から始めることにします。まず出水郡は先程述べたようにb+b型になります。これらの中で山内、借家、大家、国形はb+b型で、勢度だけが呉音c+c型になります。これは黒之瀬戸だと思います。このように分けて考えると山内は山内寺がありますから野田、大家は郡衙のあった所と見当が付きます。

高城郡。国府があった処だけあって、中央政府からやって来た官人が多かったためか、漢音が相当数入っています。はっきりしているのは合志郷。鶴田に隣接して合志と、中世の絵図にあります。肥後国から移って来た合志の地名が書かれていますから、鶴田の神子(コウシ)に比定出来ます。新多は新田神社がありますから、あの辺だと見当が付きます。宅万寺跡というのが中郷にありますから、中郷

・東郷が託万郷の比定地になります。判らないのは飽多・鬱木・宇土です。これらは宮之城・祁答院・大村辺りにかたまっていると見られます。また高城もどこかに入らなければならぬ。高来(高木)、「木」という文字を当てはめるとすると、鬱木という表現は高城になる可能性が大きい。そうすると飽多は宮之城辺りということになる。宇土は薩摩町大村？これらは決め手はありませんが、今後墨書土器などが出土したら比定材料が増えるだろうと思います。

薩摩郡。薩摩はd+c型。幡利もd+d型で日置だけがb+bの和語だが比定地がどこになるのか判らない。平礼石(ヒラレイシ)というのが古文書に出て来ます。避礼石と書いたのであれば判るのですが、2字に表現せよとのことで避石の形にしてしまったので判らなくなった。避礼石という地名だったと解釈すれば隈之城に比定できます。幡利郷は判りません。日置郷も判りませんが川内川左岸にあったことは間違いなし。入来あたりに考えられます。

甌島。管々と甌島、二つの郷のように考えられますが、管郷の意とれば甌島は郡一郷になり、これはb+b型で問題はない。

日置郡。これはb+b型。富多は於富多という表現が省略されたとすればc+c型で、伊集院大田という古い集落があります。納薩：ノウサツとしか読めないのですが、これはc+c型で大里(オオサト)という音が近いと見れば市来の大里という大きな集落があります。市来・伊集院と当てはめると、残りの合良は郡山しかない。

伊作郡はd+d型。これはイサゴ。奄美では砂をイサグと表現するので、吹上浜の砂丘

に由来する地名だろうと見当が付きます。利納(リナ)をどのように読むのかは解決出来ないで系統不明ということにしておきます。

阿多郡。阿多はそれぞれ一字音を呉音で表現しただけ。鷹屋は竹屋で古くから加世田のことと云われています。田永は田伏の誤記と解釈出来ます。葛例(カヰ)は漢音でどこか判りません。加世田・田布施・阿多と来れば、残りはどこになるのですかね。坊津ですか。秋目は関多郡といわれたので、あの辺が比定地になるのかも知れません。

河辺郡は川上郷・稲積郷の2郷ですが、川上・稲積は大隅国にもあります。右のメモ4に書いておきましたが、河辺の2郷：川上・稲積は大隅国の郷名を入れたのではないかと。川上というのは日本武命がクマソタケルを討ちますが、別名川上タケルで、川上は高山の地名です。畿内の人々にとっては川上という地名は印象深かったと考えられます。稲積郷というのは従来の考え方では和氣清麻呂が稲積老に世話になったということで牧園説が強いのですが、牧園には中津川という地名があるので仲川郷に比定せねばなりません。

溝辺町竹子(タケ)の下宮といわれる稲荷神社の祭神が稲積神という記録があるので、溝辺辺りが稲積郷だろうと思うのです。また稲束を積んだ形に最もよく似ているのは加治木の蔵王岳です。突っ立った山、あれは稲束を積み上げたような形ですから、溝辺から加治木にかけての郷名と考えたら、稲積郷というのは重要な郷になります。まだ正体の判っていない稲積という地名は中央貴族に印象深かったので大隅国にも薩摩国にも書かれたのだと思うのです。

稲積城は溝辺にあった。しかも大隅国府と

大水駅のちょうど真ん中になります。古代の里程でちょうど三十里になり駅間距離としても適当です。

穎娃郡。開聞(ヒヲキ)は和語ですが、穎娃は漢音・呉音が入っています。穎娃は「衣」という地名が先行するのです。これを2字に表記するためにこのような組み合わせになったのです。開聞・穎娃は現代まで開聞町・穎娃町という形で残っています。

揖宿はイフ・スクという形の呉音表記になりますが意味は判りません。

給黎は呉音表記です。喜入はd+bになります。長門本平家物語には「木入」というのが出て来ます。木を入れるというのは和語の表現です。あの辺は湿地帯でメヒルギの自生地があり、木を入れなければ道は造れなかったのでしょう。

谿山郡。谷山郷と久佐郷ですが、和田から坂之上に登って行くのが阿弥陀坂です。その上に草野貝塚があり、その辺に草宮とか草野とか「草」の付く名字の人々が住んでいますから久佐郷があった処と見当が付きまます。残りの谷山と中山(中村と山田)一帯が谷山郷ということになります。

麿島郡。麿島はb+b型。都万と在次という表現はd+d型です。そこでメモ5ですが在=有、次=宿：やどると考える時、有・宿を聞き手が在・次と書いたとすると有宿から在次に転化したということが判ります。有宿だったらすくと読むことが出来、宇宿に比定することが出来ます。麿島郡3郷のうち、一つ突破口が出来たと思うのです。

延喜式駅名では市来・高来をイチク・タカクと読んでいることからウスク・ウスキの転化を考えることも出来ます。また、壱岐では

キツネをクツネともいうと甲子夜話に書いてあるので、キとクは変わる可能性も考えられます。

これで在次は解けたと思います。都万と安薩については、どこかで墨書土器が出て来れば麿島郡の郷名は解決出来ます。薩摩国の郷名で質問はありませんか。

音読みの地名

久米 高城(タキ・タキ)と高城(タジョウ)の違いは？

平田 高(カ)は和語です。城(シヨウ)は呉音漢音は城(セイ)です。タカジョウは折衷語になります。高城(タキ)となると、本来「城」には「キ」という読みはないのです。しかし城戸(キト)の読みがありますから、後に和語で「キ」と読んだ可能性はあります。高城(タキ)が縮まって「タキ」になっているのです。

久米 都城とか隈之城などもあります。

平田 ミヤコノシロとかクマノシロと読めば和語の表現ですが、ジョウが入って来ると音よみの形(呉音)になります。音読みが新知識だと世間の評価が定着するのは時期的に少し下がると見られます。

本来、地名は人々の話で判る表現で理解し定着するもので、政治体制が整い漢字の知識が増えて来ると、呉音・漢音の地名が登場して来るのです。音よみの地名は時代が新しいと理解してよいと思います。

馭謨郡と益救郡

久米 馭謨郡と益救郡は馭謨郡が南になるのでは？

平田 どちらが北・南になるのかははっきりしないので、クエッションマークを付けているのです。

久米 屋久島は河辺七島と関係があったの

では？

平田 島津氏の行政区分では屋久島奉行の支配です。河辺郡の七島統治と屋久島支配は別だったと思います。屋久島も河辺郡司が支配していたのですかね。

種子島と屋久島は称寝氏と種子島の争いの場で、どちらかという種子島の勢力が屋久島に及んでいたのです。三国名勝図会には種子島氏が屋久島を支配していた頃の拠点は永田だったと書いてあります。

馭謨郡については種子島と屋久島を含めて熊毛郡と馭謨郡に分けて考えた場合、馭謨郡が屋久島で熊毛郡は種子島と理解していたのです。式内社の益救神社は北の宮之浦にあるので益救郡を屋久島の北部に当てると、馭謨郡は屋久島南部になります。その辺の判断が出来なかったので一応クエッションマークにしておいたのです。

大隅国の郡郷

多祢のことは先程話したので大隅国の説明に入りましょう。

菱刈郡については先程話しました。羽野郷と大水郷が川内川の左岸、菱刈郷と亡野郷が右岸になります。菱刈郡の人々が政府に申し出て新しく郡を建てたとしても、左岸地域を押さえたら日向国や肥後国との連絡路は確保出来るわけです。ただ後の羽月郷が亡野郷の範囲に入りますが、これは手なづけたと考えられるといいわけです。

桑原郡。郷名のほとんどがb+b型です。例外は答西郷です。これはd+d型です。大原郷、おおはる・おおはら。吉田町に大原という地名が現存します。吉田町に比定出来ます。大分郷、「おおきた」が訛って「おおい」になったというのですが、どうして「い

た」と読むのか理解出来ないで、系統不明としましたが、b+b型の変形と見てよいでしょう。

豊国郷。最も豊かな土地。建久凶田帳で水田面積が最も大きいのは帖佐です。帖佐は和名抄郷名とは直接関係ないのですが、帖佐という表記はd+d型です。薩摩国府があった川内市もd+d型です。帖佐も漢音の表記ということで国府に関係がありそうです。

センダイについては奥州仙台は陸奥国府、静岡市の千代は駿河国府、尾張国の千代が尾張国府、それから美作千代、因幡の千代、薩摩国川内。すべて国府があった処です。センダイという漢音からも国府の呼称との推定が出来ます。

帖佐というのも片佐：国府のあった場所、国府所在地の地名と考えたら、久波々良国府：桑原郡にあった国府というのは帖佐にあったのではないかと。国分の府中は桑原郡でなく贈於郡の範囲。古くは曾小川と云っていますから贈於郡だったと考えます。

答西郷を山田に比定したのは此処に当畝町トクセマチという小字があるのです。しかし畝町という昔の土地面積用語があります。町・反より古いのが代(シ)、それよりも古いのが畝町です。しかし具体的な広さとか代とのつながりはよく判りません。

稲積郷は溝辺町・加治木町。広田が栗野町・横川町と考えたら先程の羽野郷と抵触します。今後の検討課題です。残った桑善(クヨシ)郷は日当山・嘉例川。仲川郷は牧園町です。

贈於郡。葛例は佳例川：福山町。志摩郷は向島：櫻島。阿気郷は呉音表記。方後郷は湿地帯の濁尻で隼人町。人野郷は大隅郡人野郷を考えると、牛根・垂水あたりになります。

大隅国大隅郡大隅郷と、大隅が3拍子揃っているのだけど難問。私は大崎町に大隅直のものと思われる巨大古墳群があるので、あの辺りが大隅郡の中心だったと思うのですが、比定材料が足りません。

謂列(付)郷と読めば「南」という地名が最も近い。始臈は吾平、大始良があります。これはd+d型になります。称寝郷は根占・大根占。大阿郷は大河と考えると佐多町に大河という集落がある。岐刀郷はキタと読めば謂列：南にたいしての北になります。大隅郡には比定材料不足の地名が多いのです。

始羅郡。串良とか鹿屋などは考えてみると肝属川の左岸になります。野裏は読みも判りません。

肝属郡。肝付はb+b型。桑原はどこになるのか判りません。鷹屋は高屋神社の存在から内之浦が比定地。川上郷は川上タケルの本拠地があったと思われます。高山町の川上。肝属郡にはb+bという和語地名が多いので一応鷹麻(カアサ)と読んでこきますが、呉音・漢音の読みになると「カソマ」と読むのかも知れません。「カソ」と読むとあの辺に岸良(キヲ)という地名があるので、「カソヲ」を「カソマ」と聞き違えたとしたら岸良が比定地として考えられます。

馭謨郡。一応謨賢(モケン)郷とc+cで読んでおきます。和語で何と読むのか見当が付きません。上屋久町にあった郷になるのか。信有(シ・シウ)郷は屋久町にあった郷なのか。

熊毛郡は熊毛(クマケ)・幸毛(サキ)・阿枚(アヘ)の3郷。熊毛・幸毛はb+bの表現になります。阿枚(アマイ)と読めばc+c、阿枚(アヘ)と読めばc+bになります。南種子町には平山(ヒラヤマ)という大きな集落があるので、つな

がりがあるのかも知れません。これは決め手にはなりません、このような考え方もあり得ます。

それは兎も角としても郡郷名を初めとして昔の地名はほとんどが古代日本語：和語で片づくのです。呉音とか漢音が入って来るのは国府とか郡衙周辺の地名に見られます。その視点で整理していくと呉音・漢音という表記から日本の地名は分類が可能だと考えます。

桑原国府

上野 桑原郡の答西(トウセ)は山田にしてありますが、この答西が帖佐(フウサ)に重なれば

平田 ダブれば一番いいのですけどね。帖佐は「庁」に由来すると思うのです。従来、答西は帖佐だとする説が強いのです。帖佐を豊国にしたのは、古代・中世では帖佐が最も水田面積が広く、最も豊かな処が帖佐なんです。

上野 ちょっと不確かかも知れませんが、読売新聞に県内の農産物の自給率調査が載っていたのです。一番悪いのは種子島の中種子町。問題は土地なんです。消費ベースでの土地獲得率が高いからです。今話題の豊国の町：始良町が自給率18%です。日本の自給率は40%だそうです。実をいうと合併後始良市となる町は田舎を併合するので農地が増えますから自給率が高くなります。鹿児島市は消費100%だったと思います。カロリーベースで行くとそうなるのです。日本の自給率がカロリーベースで計算されているそうです。何を何%自給しているとの計算をしないと本当の自給率は理解出来ない。米なら始良町は何%と計算で出て来るのです。カロリーベースで行くと違って来る。だから自給率云々というのは信用出来ない代物です。

平田 何故、帖佐にウェイトを置いたかという建久国田帳の水田面積は帖佐が最も大きいのです。だから豊国郷をそこに当てた。加治木や国分よりも帖佐が広いのです。

上野 やっぱり、そういうイメージがありますね。国分は後から拓いた処ですからね。

平田 国分の南の方は湿地帯ですからね。瀧尻(カガシ)という地名からも考えられる。

上野 あゝ、それは判り易いですね。私は最初から、あゝいう水田が出来ていたのかと思っていた。

平田 それと最近の発掘調査の結果、例えば始良町の船津で駅路の跡が出て来たでしょう。その側に郡衙跡らしいものも出て来ています。奈良・平安時代の遺跡が帖佐で集中的に見付かり始めている。何故そういうのが出て来るのかということです。埋文の連中が見直さなければいけないなどの感じになって来ています。

上野 始良市になると、注目されるようになるのでは。

平田 桑原郡衙があった処を考えると見方が違って来ます。大隅国府は和名抄に「久波々良国府」と書いてあるので、国府所在地は桑原郡で国分の府中が桑原郡だったと知っている人がほとんどです。しかし桑原郡と贈於郡の境界は大体現在の天降川の線だった。延喜式神名に鹿児島神社(鹿児島神宮)は桑原郡と書いてあるけど、大穴持神社・韓国宇豆峯神社・宮裏神社は贈於郡と書いてあるのです。大穴持神社が贈於郡だから、贈於郡と桑原郡の境界は大体現在の天降川の線だったと考えなければならぬのです。大穴持神社が桑原郡だったら府中の桑原郡所属が考えられるのだけど。国分の府中とか大隅国分寺は贈

於郡にあったということを考えなければならぬので、大隅国府は贈於国府から桑原国府に遷って、また贈於国府に戻って来た歴史があったのです。

上野 その桑原国府は帖佐？

平田 帖佐だと考えています。

上野 始良町からこっちは桑原郡ですか。

平田 隼人町は桑原郡です。しかし隼人町に国府があったことは考えられません。

上野 隼人町は国分と一緒になりたくなかったのは歴史的に正しいわけですね。

平田 溝辺とは一緒になりたかったのですね。

上野 ああ、それはありますね。

平田 皆、空港を持っている溝辺と一緒になりたかったのです。ちょっと広げ過ぎたんだよね、霧島市は。イメージとしては「花はキリシマ、タバコは国分」なんだよね。だから霧島の方が花を取ったのであって、国分という古い地名を考えなかったということでしょう。私の宣伝が足らなかったということでしょう。

安房と宮之浦

久米 多祢国府は本土との連絡を主に考えて北の方にあつたと考えて来たわけですが、先生は多祢国府は南の方にあつたと云われました。南種子町のどこですか？

平田 南種子町の「里」です。茎永(クキガ)を流れる郡川(コリガリ)の右岸、茎永は左岸になります。「里」は先程述べたように航空写真や江戸時代の元禄絵図を見ると、交通の要所になるのです。

久米 それは時代が下がるのでは？

平田 中世以降そのままでしょう。

久米 屋久島との関係は？

平田 古い時代は判らない。宮之浦が近世以降の政治の拠点だけど、安房に古代以来の拠点があったのではないか。それと一湊が先程述べたように遣唐船が最初に帰って来る湊という意味で注目されていたんだらうと見られます。他に屋久島には漢音の地名はないようです。

久米 唐船淵というのがあって、中国との往来が云われているのですけど。

平田 唐船淵というのは中国からの船が流れ着いたということでの地名。淵(フ)が付いておれば、これは和語。唐船は漢音だから、チャンボンの地名になります。

久米 安房は南の中心。

平田 安房は南の方、屋久町。一湊は上屋久町。一湊に近いのは永田。三国名勝図会には種子島が屋久島を支配していた時は永田に治所が置かれたと書いてある。種子島氏が屋久島を支配した時は、その代官が永田にいたということ。島津氏支配になってからは宮之浦に奉行所が置かれた。宮之浦だったと思います。安房だったのかな。

上野 シドッチがやって来た時は安房から鹿児島に移動しています。安房から宮之浦に連れて来られて、それから調べが始まっています。

平田 宮之浦にウェイトが置かれていた？

上野 その時点では宮之浦が中心だった。

大穴持神社

浜田 福山の宮浦神社や大穴持神社も古い神社で気になっているのですけど。

平田 今は見えなくなりましたが、大穴持神社の鳥居から見ると、正面に開聞岳が見えるのです。桜島のうしろ側：瀬戸海峡の延長に。だから大穴持神社の設置は開聞岳の噴

火に関係があるのだらうと思うのです。大穴持というのは「大きな穴を持っている土地」のことで噴火口を意味すると思うのです。大穴持神は噴火の神様で、開聞の噴火の時に神の怒りを鎮めるために建てたのが大穴持神社だと思ふのです。初めは海の中にあったのかも知れませんが、不便とのことで陸地に上げて現在地に落ち着いたと思うのです。

それと現在地はどういう位置にあるのかというと、府中にあった大隅国府の中軸線の真南にあるのです。だから簡単にあっちに行ったりこっちに来たりはしないと思うのです。

浜田 境界線としては桑原郡とどこ？国府は何郡になりますか。

平田 境界は桑原郡と贈於郡。府中の国府は贈於郡にあった。

浜田 贈於郡にあった。しかし時代によって桑原郡に入っていた時期があるのでは？

平田 桑原郡に入っていますか。私はこう思うのです。鹿児島神宮のうしろに宮坂麓という所があって、宮坂麓は「往古大路」と古文書にあるのです。大隅国府→宮坂麓→溝辺→曾木を経て真っ直ぐ大宰府に向かうのが大隅国の駅路だったと思うのです。もし国分が隼人あたりに国府があったのであれば、その道は変更する必要はないのです。帖佐(桑原郡衙)に国府が移動してそのルートが使われなくなれば「往古大路」の意味が生きて来ます。贈於国府から久波々良国府に移り、隼人塚を築いたり大隅国分寺石塔を築く少し前にまた贈於郡の方(府中)に国府が戻って来たと思います。そうでなければあのような石塔を建てる意味はないのです。

大穴持神社が桑原郡でなくて贈於郡にあることは延喜式に書いてあるので、それは動か

ないと思うのです。

浜田 郡界は時代によって移動しているのでは？

平田 そんなに動かす必要がありませんか。天降川を挟んで出たり入ったり、国分と隼人の境界線がジグザグになっていますが、あれは明治の初めに裁判沙汰になって、結局は隼人側が勝って国分が負けたから相当隼人側に取りれたとの話が伝わっています。そういうことで隼人の人たちは国分と合併したくなかったのです。

浜田 広瀬あたりはどうなんでしょう。

平田 大穴持神社のある一帯は海岸段丘でちょっとした高台でしょう。

浜田 国分の自衛隊から・・・

平田 大野原一帯。

浜田 そんなに豊かでなかった。

平田 昔も集落はあったでしょう。瘦せていてもいいわけです。漁業でくればよいのですから。時間が来ました。これで100回例会を終ります。

(物故会員)

小川亥三郎・片岡八郎・上赤一豊・桐野利彦・郡山政雄
木場武明・永田典男・浜崎盛雄・原口虎雄・肥後芳尚・
鉾之原矢七・本田親虎・山田慶晴

薩摩国の郡郷

13郡35郷

郡	郷	よみ	系統不明	和語	呉音	漢音	比定地
出水 b+b	山内 勢度 借家 大家 国形	やまうち		b+b	c+c		野田：山内寺 黒瀬戸 米ノ津？ 出水 阿久根
		せど		b+b			
		かりや		b+b			
		おおや くにかた		b+b			
高城 b+b	合志 飽多 鬱木 宇土 新多 託万	こうし				d+d	鶴田町神子 水引：新田神社 中郷
		あきた		(b+d)			
		うつき		(d+b)		d+d	
		うと にいた たくま		(b+d)		d+d	
薩摩 d+c	避石 幡利 日置	ひられいし		(d+b)			隈之城
		はり ひおき		b+b		d+d	
甌島 b+b	管々 甌島						(管郷の意) 甌島
		こしきじま		b+b			
日置 b+b	富多 納薩 合良	(お)ふた			c+c		伊集院：太田 市来：大里 郡山？
		のうさつ こうら		(d+b)	c+d		
伊作	利納	？	a			d+d	伊作
阿多 c+c	鷹屋 田永 葛例 阿多	たかや		b+b			加世田 田布施 阿多
		田伏(たぶせ)		b+b		d+d	
		かれい あた			c+c		
河辺 b+b	川上 稻積	かわかみ		b+b			
		いなづみ		b+b			

郡	郷	よみ	系統不明	和語	呉音	漢音	比定地
穎娃 d+c	開開 穎娃	ひらきき		b+b			開開 穎娃
		えい				d+c	
掛宿	掛宿	いぶすき	a		c+c		掛宿
給黎	給黎	きいれ		(d+b)		(d+d)	喜入(木入)
谿山 b+b	谷山 久佐	たにやま		b+b			中村・山田 草野・草宮
		くさ			c+c		
魔島 b+b	都万 在次 安薩	つま			c+c		宇宿
		(有宿) あさつ	a		c+c	d+d	

【メモ】

1. 大半が和語(古代日本語)表記である。
2. 呉音は5世紀に倭の五王の南朝遣使の頃に伝来したとみられる。仏教用語に多い。
和名抄郷名の場合、呉音表記は万葉仮名的な使用法が定着していたものとみられる。
3. 漢音表記は7世紀以降、遣唐使によってもたらされたもの。大隅・薩摩が律令体制に組み込まれ、国司たちによって持ち込まれた地名表記と考えるとよい。
4. 河辺郡の2郷、川上郷と稻積郷は大隅国の郷名の混入と考えられる。
川上は日本武尊に討たれたクマソタケル(川上タケル)の存在が畿内の人々にとって強く印象づけられていたと考えられる。
大隅国府の前身的存在であった稻積城の記憶が中央貴族にあったと考えられる。
5. 在=有：あり、次=宿：やどる、との共通因子から「有宿：うすく」の表記が解明。
市来：いちき・高来：たかき、を「いちく・たかく」と延喜式駅名によみが付いていることを考えると「うすく→うすき」の転化を考えてよい。また老岐ではキツネをクツネということが甲子夜話に記されている。
6. 系統不明(a)は古代朝鮮語に由来するとみられるが、研究不十分な分野であるので踏み込まない。同様に、サンスクリット語系・アイヌ語系(東北・北海道ではあり得る)・アルタイ語系・マレーシア語系・タミル語系などがあるかも知れないが、少数と考える。
7. 地名を和語(古代日本語)・呉音・漢音の視点で表記を類別することによって、和名抄郷名をはじめとする地名解読の切り口が拓けて来た。

大隅国の郡郷

8郡37郷

郡	郷	よみ	系統不明	和語	呉音	漢音	比定地
菱刈 b+b	羽野	はの		b+b			筒羽野：吉松
	亡野	山野？		(b+b)		d+b	山野・大口
	大水	おおみず		b+b			曾木：太良院
	菱刈	ひしかり		b+b			菱刈
桑原 b+b	大原	おおはる	b+a	b+b			吉田
	大分	おおいた					蒲生？
	豊国	とよくに		b+b			帖佐？
	答西	とうせ				d+d	山田？
	稲積	いなづみ		b+b			溝辺・加治木
	広田	ひろた		b+b			栗野・横川
	桑善 仲川	くわよし なかつがわ		b+b b+b			
贈於 c+c	葛例	かれい				d+d	佳例川：福山
	志摩	しま			c+c		向島 (桜島)
	阿気	あけ			c+c		向花の誤写？
	方後 人野	がたしり ひとの		b+b b+b			西国分：隼人町 牛根
大隅 b+b	人野	ひとの		b+b			垂水
	大隅	おおすみ		b+b			？
	謂列	いなみ		b+b			南
	始臈 襦寝	あいら ねじめ			c+c	d+d	吾平・大始良 根占・大根占
	大阿 岐刀	おおかわ (大河) きと・きた		b+b		d+d	佐多？ 高隈？
始羅 d+d	野裏	のうら・のうち		b+b			
	串伎	くしら		b+b			串占の誤写
	鹿屋	かのや		b+b			鹿屋
	岐刀	きと				d+d	百引？

郡	郷	よみ	系統不明	和語	呉音	漢音	比定地
肝属 (肝付) b+b	桑原	くわばら		b+b			？
	鷹屋	たかや		b+b			内之浦
	川上	かわかみ		b+b			高山
	鷹麻	かりあさ		b+b			？
馭謨 c+c	謨賢	もげん			c+c		上屋久
	信有	しなう			c+c		屋久
熊毛	熊毛	くまげ		b+b			北種子
	幸毛	さちけ？		b+b			中種子
	阿枚	あひら		c+b	(c+c)		南種子

【メモ】

1. 和語 (古代日本語) 地名が大半を占める。
2. 呉音表記・漢音表記は国司 (中央政府の官吏) 着任後の表記と見られ、薩摩国に比べると、すっきりした形で整理されている。
3. 難問は大隅国大隅郡大隅郷がどこになるか、ということ。墨書・刻書土器の出土を俟つことにする。中世に救仁郷とよばれた大隅古墳群の密集地：後世の大崎郷と考えるのが、直接的な考古資料が未出土である

多 禰 嶋 (702~824)

国	郡	よみ	系統不明	和語	呉音	漢音	比定地
多禰 c+c	熊毛	くまげ		b+b			種子島北部
	能満	のま			c+c		種子島南部
	馭謨	ごむ			c+c		屋久島北部？
	益救	やく			c+c		屋久島南部？

【メモ】

1. 種子島南部および屋久島に呉音表記が集中している。多禰国府が南にあったことを示唆する。また、音よみ表記の地名も種子島東海岸 (安納、現和、安城)・中種子 (納官・油久・美座) に見られる。
2. 屋久島の音よみ地名は一湊 (d+d) と安房 (c+c)。奈良平安時代に要地であったことを示唆する。